引馬野のかやが下なる思ひ草またふたこゝろなしとしらずや　俊頼（堀川百首）

（七）然菅の里　然菅の渡

然菅の里と云ひ、然菅の渡と云ひ、古來其名高くして三河國の名所に數ふ、此所定かならず、然菅は亦志香須賀と書く、或は矢作川の川上なりと云ひ、或は豐川の末なるべしと云ふ、建保名所百首には志香須賀渡と書きて宮路山よみ合とあり。本郡耆老の曰く、志賀須賀の渡とは、矢作川の渡にして、今の佐々木、桑子、附近を舊と志香須賀の里と稱せりと。此は或は佐々木上宮寺緣起に據りしものなるべきか、寧ろ、建保名所百首に宮路山よみ合とあるに從ひ、豐川の渡なるべしとすべきか、古人詠歌また多し。

あら磯こす浪はさわがし然すかに海の玉もは憎くはあらずて（萬葉集）

大江爲基あつまへ罷りくだりけるに扇をつかはすとて　赤染右衞門（拾遺集）

おしむともなきもの故にしかすかの渡りと聞けはたゝならぬ哉

屏風の畫にしかすかのわたり行人立わつらふかたかける所をよめる　藤原家經朝臣（金葉集）

行人も立ちそわつらふしかすかのわたりや旅のとまりなるらん　二品法親王慈道（續後拾遺集）

逢瀨こそ門遠なりともしかすかの渡りなれにし中な忘れそ

しかすかのわたりにてよみ侍りける　能因法師（後拾遺集）

おもふ人ありとなけれと古里はしかすがにこそ戀しかりけれ　中務（新勅選集）

行は有行ねばくるししかすがの渡りにきてぞおもひたゆらむ　知家（建保百集）

あひ見てもあはでもなるゝしかすがの渡りものうき夢のうき船　定家（同上）

秋風になくねにたてししかすがのわたりし波におとる袖かは　行意（同上）

うしとても猶しかすがの渡し守しる人なみのゆくゑをしへよ　よみ人不知（同上）

いへばありいはねばくるし我心こやしかすがの渡りなるらん　花園三位公晴（大神宮千首）

都でていくのゝ旅をしかすがの遠きわたりにいまぞなりける

行通ふ船路はあれどしかすがの渡りは跡もなくぞありなん　源順

あいみつゝ猶おぼつかな宮路山こや然菅の渡りなるらん　源光行

かくしつゝくれぬる秋を然菅のわたりも淺き契りとぞ思ふ　順德天皇

(八) 綠野池

三河藻鹽草云、此の綠野池、碧海郡粟寺村の地にあり、俗呼で、鶯草池と云ふ、と、又三河古蹟考には、八名郡三渡野村を擧ぐ、何れか是なるかを知らず、姑く三河藻鹽草に從ふ、夫木集に和泉式部の一首あり。

春ふかくなりゆくまゝにみとり野の池のたまもの色ことに見ゆ

(九) 藤野の村

櫻井村大字河野、川島、村高、附近を舊と藤野鄕と稱せしことに就ては、前章既に之れを說きたるが如し、後世此の藤野村を以て當國名所の一に數ふ、夫木集に宗國の一首あり。

紫の絲くりかくと見へつるは藤野の村の花盛りかも

(一〇) 二村山

二村山は、古來三河國の名稱に數ふ、其所定かならず、或は云ふ三河と尾張との境なる二村山是れなりと云ふ、愛知郡の二村山是れなるべきか、此の地舊と本郡に屬せしことありと云ふものあり、古へ東海の宿驛たりき、古人の詠歌多し、左に摘錄す。

くれはとりといふあやをふたむらつゝ
みてつかはすとてよめる　清原諸實（後撰集）

くれはとりあやに戀しとありしかば二村山もこえずなりにき
返しの歌　よみ人しらず（同上）

から衣たつをおしみし心こそふたむら山のせきとなりけめ
むさしの國よりのぼり侍りけるに三河國二村山のもみぢを見てよめる　橘能元（詞花）

いくえとも見へぬ紅葉の錦かなたれふたむらの山といひけむ
堀川院の御時きさいの宮にて三五にほとゝぎすといえる心をよみ侍る　權中納言俊忠（千載集）

さつきやみふたむら山のほとゝぎすみねつゝきなく聲をきくかな　前右大將頼朝（續古今集）

よそに見しおさゝが上の白露をたもとにかくるふたむらの山　順德院（同上）

ともしゝて今宵を明む玉くしげふたむら山のみねのよこ雲　平泰時（同上）

ちかつけば野路さゝ原あらはれてまたするかすむ二村の山　堀川院中宮上總（續後拾遺集）

ほとゝぎす二村山やこへつらん明はてゝのみ聲のきこゆる　藤原行朝（新千載集）

越行はひとかたならずかすむなりふたむら山の春のあけぼの　曾根俊忠（夫木集）

霞立つ二むら山の岩つゝじたれ折りそめしから錦かも　大江匡房（同上）

ふたむらの山の麓の秋はぎはししきをしける野邊かとぞみる　正家（同上）

しつかなる二村山の麓にて千とせの松の花ぞさきける

秋風にはたおるむしのこゑきゝて尋ねぞ越ゆる二むらの山　重之（同上）

誰か代よりうへて此名をとゝめけん薗生の竹の二村の里　冷泉大納言（同上）

分ゆけば二村山のこくれよりはゝそまじりのあられちるなる　爲忠（萬代集）

ほとゝきす二村山をたづねみん入あやの聲やけふはまたかと　俊頼（同上）

たまくしげ二村山のほのぼのとあけゆくすゑはなみじなりけり　衣笠内大臣（同上）

あづま路の山にや春ののこるらんふたむらみゆる遲櫻かな　俊惠法師（同上）

くれはとり二村山に來てみれはめもあやにこそ月はすみけれ　前内大臣基（同上）

雪となる雨となりてや峯はけにかゝれる雲にふたむらの山　爲氏（同上）

明くれていくかなるらんたまくしげ都に遠きふたむらの山

子規ふたむらやまをたつぬれば峯をへだてゝなきかはすなり　俊成（同上）

二村の山の端しらむしのゝめにあけぬとつくるはこ鳥のこゑ　小侍從（藻鹽草）

はる〳〵と二村山をゆきすきて猶するたどる野邊の夕やみ　阿佛尼（十六夜日記）

出ながら雲にかくるゝ月影をかさねてまつや二村のやま　西行法師（山家集）

三河なる二村山をわかれては此の世をわれもあらじとぞ思ふ　鴨長明（海道記）

けふ過ぬかへらば又よふたむらのやまのなこりのまつのした道　宗祇

露時雨二村山の紅葉かな　昌琢

聲いつれ二村山のほとゝきす

（一一）鷹取山

舊と本郡に鷹取山と稱する所ありき、今は知る人少けれども、多くの老人は猶ほ之れを記臆に存すとか、然れども當時の山として想像せらるゝは明治用水開鑿以前に於ける松林の所々に散在せしものの之れなるべし。後年開墾の業漸く盛にして鷹取山の名も年と共に漸く消へなんとす。此の所里謠あり、

おどけ果てたよ鷹取山で昔なじみが餅くれた

古くよりの里謠なれども其の意分明ならず、或は鷹取山の寂しき山林たりしを謠ひしものなりと云ふ、或は又情話なりとも云ふ。

（一二）衣ヶ浦

碧海幡豆兩郡の沿岸より、尾張國知多郡幡豆崎に至る一帶の內海知多灣を、一名衣ヶ浦と稱す。風光明媚伊勢灣內の名勝なり。衣ヶ浦の名は、日本武尊東征の時、宮簀姫の御兄にあたらせらるゝ、建稻種命御伴に從ひ給ひ、歸路駿河國にて水鳥を射んとて誤りて、海中に落ち失せ給ひしが、其の御遺骸、幡豆郡、宮崎村、幡豆神社の所在地に漂着し、又御衣は知多郡の南端に漂せしを以て、宮崎村に幡豆神社あり、建稻種命を祭り、又知多町の南端を端豆崎と稱す、而して此の內海を御衣に因みて衣ヶ浦と呼ぶと云ふ。

（一三）一夜權現の傘松

本郡の海岸は高濱新川大濱等、多く白砂靑松にして海淸し、中にも大濱町の權

現の岬は、衣ヶ浦に突出し、矢作川の河口に當り、灣を隔てゝ西知多半島を近くに眺め、西南は海波、渺茫、佐久島、日間賀島、篠島等を波間に遠望し、風景明媚衣ヶ浦第一の勝地なり。此岬に大なる一松あり、幾百年のものなるかを知らず、海濱に蔚然として天を摩す、此松傘に似たるを以て里俗呼んで傘松と云ふ、里謠あり。

一夜權現の傘松は松は枯れても名は殘る

此の地方の漁夫は、漁に出づるや、此の松を目當に漕ぎ戻るを常とせり、又此の處往昔燈籠ありて、夜間出入の船に便しき、里謠あり。

一夜權現の燈籠の灯誰が毎夜ともすやら

此の海岸近年に至り海水浴場としての設備成り、中にも新川天王森は新須磨と呼び海水浴場としての名既に遠近に高し。

第二節　古城址

古城址

大濱古城址

大濱古城址　大濱町に在り、初め稻熊氏之れに住し、次に天文年中天野孫三郎是れに據り、五十貫文を領す、次に永井傳八直勝或は傳十郎又は藤井隼人是れに居る、當所名主永田平右衞門の子なり、松平信康及德川家康に臣事し、諸所の合戰に功名あり、天正十八年常陸笠間の城主に封せらる七萬石を賜ふ、是れよりして廢墟となる、直勝初め岡崎に信康に仕へ、長田傳八直勝と名乘りしが、信康自刄の後濱松に家康に仕ふるや、長田といふ苗字源家に於ては不吉なりとて由緒により永井傳八直勝と改めき。

小出村古屋敷　永見新左衞門之れに居る。

棚尾村古屋敷　棚尾村にあり熊谷若狹守之れに居る。

東端村古城址　永井傳八郎直勝嘗て之れに居る。

同　村古屋敷　神谷與七郎同藤左衞門同源六相次で是れに居る。

米津村古城址　明治村字米津にあり其の壇域五十間四方三重堀なりしが今は皆畑と變ず、米津藤太夫又左馬介道壽、是れに城き、後孫世々之れに居る。米津藤藏勝正法名淨信、其の子政信、小大夫、號、辨慶、味方の原にて討死す、其の子勘兵衞、由政の時、武州、久良岐、一萬石を賜はり封侯に列せらる、寛文六年一萬石加封、貞享中五千石を族弟に分知せしめ、寛政十年出羽長瀞へ移る。

福釜村古城址

福釜村古城址　安城町大字福釜にあり、永正年間松平親盛(石京亮)是れを城て居る、親盛は長親の二男にして福釜松平の祖なり、其の子右京亮親次は、宇理城攻擊の時利あらずして戰死す。弘治二年、德川氏此の城を修理し、酒井忠次等をして是れを守らしむ。永祿の頃右京亮康親あり、又親忠の六男、刑部丞、親光、は西福釜と稱しぬ、三河物語に、永祿六年、門徒一揆の時、屋萩川の西には藤井の松平勘四郎殿、ふつかまの松平右京殿、兩所相并で、岡崎へ御忠節あり云々と

あり、廢墟の年月詳ならず、今一小空壕を存し其の他は宅城及畑となる。明治二十九年此の附近に一小紀念碑を建設す。

泉村古屋敷　鳥居鶴之助、田中五左衞門是れに居る。

小垣江城址　神谷與八郎、長坂千二郎是れに居る。

半城土城址　稲垣雅樂助是れに居る。

野田ノ城址　稲垣氏之れに居る。

三の輪村城址　淺井治兵道介之れに據る。

篠目村城址　城主を詳にせず。

重原城址　初め織田信秀の臣荒川新八郎之れに居り、次で山岡傳五郎或は河内守其の後を嗣ぎて是れを守り、天文二十三年三月今川勢の爲めに攻め落さる。

刈谷城址

刈谷城址　刈谷町字刈谷に在る城址之れなり、天文二年水野右衞門大夫、忠政、初めて尾州緒川より是れに移る、嫡子下野守信元相續す、永祿三年五月桶迫間合戰の後、信元の弟藤九郎信近此の城を守り、六月駿河勢の爲めに攻め破られ、信近是れに戰死せしも、信元是れを復す、信近の弟和泉守忠信、始名は藤十郎、加賀井彌八の爲めに切害さる、天正三年信元信長の爲め家康に切害さる、其後は織田の將佐久間信盛此の城を領せしが、天正八年に至り信元の季弟、藤十郎、忠重、其の本領を附與せらる、忠重慶長五年の役に刺客に殺さる、嫡子勝成次男忠清相次で相續す。勝成は後に美作守と稱し、福山に封ぜられ、忠清は吉田に轉封さる、此に於て松平忠房は丹波より來りて十八年間在城、慶安二年松平定政之れを領し、同五年より元祿十五年まで稲垣重種父子四代居城し、寛永元年本田忠良來り、正德二年より三浦明敎父子三代居城し、延享四年土井利德之れに居城してより累代領有して明治四年に至り廢墟となる、當城を龜城と稱しき。

藤井村城址

藤井村城址　櫻井村大字藤井字北本郷にあり、目下宅地、畑及藪等に變ず、松平長親の四男彦四郎利長城て是れに居る、藤井松平の祖なり、天文九年安詳の役に戰死す、其の子勘四郎信一之れに居り伊豆守と稱す、後慶長五年關ヶ原の役に大功あり、依りて常陸國土浦城、三萬五千石を領し之れに移る、其の後廢城となる。

泉田村古城址

泉田村古屋敷　富士松大字逢見字泉田にあり、矢田作十郎是れに居り、水野家に仕ふ、一向一揆に與し永祿七年佐々木にて討死す。

櫻井城址

櫻井城址　櫻井村大字櫻井字城ヶ原に在り、現今概ね山林原野に變ず、小浦喜兵治始めて此に城き、後松平玄蕃助親房、小浦氏を追ふて此の城を占領す、親房子なし、松平長親の三男內膳正信定を養ふて嗣とす、櫻井松平の祖なり、是れより其の子家重又其の子家次及忠正、忠吉、を經て家廣に至り德川氏に忠勤せ

し故を以て遠州濱松二萬石を領し、其れに移る後廢墟となる、古城址の周圍に土圍僅に現存し、其の一隅に城主家重以下四代の墓標を存す。

同村古屋敷　淺井六之助是れに居る。

同村堀内城址　堀内小三郎是れに居る。

姫村城址　**姫村城址**　櫻井村大字姫小川字姫に在り、目下宅地及林野等に變ず。内藤清長彌次右衛門尉此に城き、其の子家長(彌次右衛門其弟喜市郎信成(三左衛門尉)相嗣で居城す。家長は遠州二股合戰の際に拔群の戰功により、上州佐貫城二萬石を領して之れに移る、後山城伏見に戰死す。信成は遠州一言坂の戰功により、豆州韮山二萬石を領して之れに移る、此の城是れより廢墟に歸す、此の址中に城主清長の墳墓を存す。

小川七村城址　**小川七村城址**　櫻井村大字小川字問田に在り、目今畑林等となる、石川正安(左近將監)始めて此に築き住す、其の子庸正(與七郎)康長(修理亮)親康(左衛門尉)忠輔(右近大夫清兼(安藝守)相嗣で在城し、數正の時に至り、岡崎城代となり廢城せり。

同村古城址　**同村古城址**　本多總左衛門之れに居り、明應年中松平親忠の聟養子となる、其の子佐渡守正信始め彌八郎と云ひ、家康に奉仕し、執事職に進み、三萬石を喰む。

河島城址　**河島城址**　櫻井村大字河島字太田屋敷に在り、其形狀は長方形にして南北約百二十間東西六十間あり、城内は目下宅地に變じたるも四圍の土牆は現在して所々に古松繁茂せり。天正年間太田主計居城し、其の子左馬之助相續で住居せしが、晩年に至り水戸家に仕候して廢墟となる、太田主計の在城せしことは横濱市太田町に建設せる碑文によりて明瞭なり。

同村古屋敷　鈴木小五郎是れに住す。

木戸城址　**木戸城址**　二ヶ所の内一ヶ所は宮地となる。石川式部同大郎五郎之れに居る、次で成瀬藤藏正義また之れに居り、咏方原の戰に出でゝ討死す、其の子隼人正藤九郎正成に至り、尾州家に仕へ三萬石を喰む。

坂戸村城址　長坂大炊入道之れに居る。

古井村古城址　石原總左衛門之れに居る、後細井左馬之助守世、蟠豆郡細池村より移りて此に居る、同彦兵衛の時に至り額田郡六ッ名村に移る。

安祥城址　**安祥城址**　安城町大字安城にあり、古戰場或は城の森と稱ふ、址中に了雲院なる一梵宇現存す。文明十一年の頃、織田氏の當城を略取し、松平右京亮親忠居城す、其の後同出雲守長親藏人信忠二郎三郎清康に至る四代相嗣ぎ、後清康岡崎城に移る、爾後安祥長家(左馬助)城代たりしが、天正十八年織田信秀と戰ひ利あらずして、敗死し落城す、是れより廢墟となる。

同村古城　多門縫殿重則酒井左衛門之れに居る。

山崎塞址　二ヶ所あり、松平藏人信孝之を城き、後保科越中守之れに居る。

高木城址　安城町大字高木にあり、目下宅地及畑となる、細井左馬助守世始めて城き、後高木清秀(善次郎)居城して德川家康に仕へ、其の子正次正成相傳へて、後他に移封せられて廢城となる、正次は河内國丹南の地を賜ひ子孫相續で世々侯たり。

新堀村古屋敷　長坂血鎗九郎之れに居る、後丹波守と稱す。

池端城址　平岩左京進及羽勘氏定出生安藤彦兵衛之れに居る。

佐崎城址　矢作町大字佐々木にあり、周圍に竹木を廻らし、内に上宮寺と稱する寺院を存す。松平三左衛門親久始めて之れに城き、其の孫三藏信次に至り異心ありて兵を構へ大に敗れ、永祿六年此の城陷落し爾來廢墟となる。

桑子城址　矢作町大字桑子にあり、其の形狀區劃詳ならず、目下近傍田畑に變ず。往昔阿部因獄正此に城ぎ、後安藤念清房(薩摩守)其の子帶刀以來世々在城し、彦四郎直次に至り德川家康に仕へ、紀州頼宣に附屬して其の地に赴きてより廢墟となる。

牧内城址　一色左京、牧内左京進忠高之れに居る。

富永村古屋敷　山田彦八、同清七之れに居る。

川端村古屋敷　島田三河守之れに居る。

川野村古屋敷　倉橋半四郎之れに居る。

上條村古屋敷　足立吉大夫上條氏之れに居る。

本郷城址　矢作町大字西本郷にあり、城域區劃等明ならず。唯僅に樹木竹林を存し、其の他は宅地及び田畑に變ず。植村新六榮康後に出羽守と稱す、本名土岐源三郎持益、濃州より遠州植村に移住す、植村氏と號す、後又三州に移り此の地に至りて城き、松平長親に仕ふ、其の子氏義(新六郎)榮安(新六)等に傳へ後廢城となる。

岩根古城　加藤播部介正成之れに居る、松平長親に仕ふ。

筒針城址　小栗仁右衛門吉忠同大六及び山田曾右衛門之れに居る。

渡村城址　矢作町大字渡にあり、目下宅地及田畑となる、新田義貞の將鳥居中務忠景、紀州熊野より、此の地に來り、渡里傳内と改名し、當城を城きてより、子孫累代居城し、天文年中鳥居忠吉後に伊賀守に至りて松平清康廣忠及德川家康に仕へ、其の子忠宗、元忠、忠政等相傳へて居城す。元忠は慶長五年伏見城に戰死し、忠政は奥州岩城を領し、其れに移る、其れより廢城となる、當城記念の碑は矢作川の堤防に建設しありしが、其の後同川出水の際泥沙に埋沒して今見へず。

淺井城址　目下幡豆郡に入る、二ヶ所あり、西の城には松平十郎三郎康孝

之れに住し、天文十三年之れに死し、其の子忠孝は永祿六年正月十一日一向一揆の時針崎の合戰にて討死し、其の子康忠に至りて家絶ゆ。東の城には大津土左衛門住す。

合歡木古屋敷　松平藏人信孝同金助之れに居る、一向一揆の時家康に味方して忠戰す。

青野城址

青野城址　六ッ美村大字上青野字稻前西の地にあり、今田面に變ず。松平長親六男甚太郎義春是れに城主たり。日近村に於て討死す、其の子義忠右京亮之れを嗣ぐ、義忠尚ほ幼なりしを以て、家臣松井左近忠次之れを輔けて此所に居る。後德川家康其の子忠吉をして當城に居らしむ、數年の後廢墟となる。

下青野村古屋敷　伊奈市左衛門之れに居る。

中ノ郷古屋敷　本多刑部左衛門是れに住す。

赤澁村古屋敷　熊谷一學是れに居る、次で天野助兵衛、同甚四郎、同平七相嗣で住す。

井內村古屋敷　久世三四郎、坂部三十郎是れに居る。

土井村古屋敷　本多彥二郎信重之れに居る、享祿五年御油畷の合戰に討死す、其の子豐後守廣孝は家康に仕へ諸所の合戰に功勞あり、天正十八年八月上野國白井城二萬石を賜ふ。

上和田七村古屋敷

浦邊城址

上和田七村古屋敷　宇都左衛門五郎忠繁、其の子宇都九郎左衛門忠武、其の子大久保忠俊、以後大久保氏代々の居地たり、大久保彥左衛門の家康に仕へて我儘氣隨なりしは人のよく知る所なり。大久保家留書云、大久保は代々御當家の舊臣先祖より忠世に至るまで武勇武邊忠義比類なし、三州にても一向亂の時上和田村忠世の屋敷へ大久保一黨の共者三十六騎相集り一向の賊徒を防ぐ、大久保は日蓮宗にて三州上和田の郷妙國寺の大旦那なれば、此の時妙法蓮華經の旗を眞先に押立て戰功をなす。

同村古屋敷　松平親忠の五男刑部之丞親光の子兵庫親直是れに居る、和田七郷の領主たりき。

野畑村城址　佐野右馬助是れに居り、天文年中清康に仕ふ、其の後黑柳彥村其の族佐野圖書同小大夫是れに居る。

在家村古屋敷　石川大隅守、同八右衛門之れに居る。

坂左右村城址　都築總左衛門是れに居る。

浦邊城址　六ッ美村大字國正字浦邊にあり、現今宅地田畑等に變ず。其の中央小高き所に一大石あり、是れ渡邊氏の城址なりと云ふ、其の近傍に古井二ヶ所を存す。渡邊源次道綱此の地に築き居城し、浦邊七郷の領主たり。範綱、高綱、守綱、重綱、治綱を經て、尾藩の祖義直に仕へ、三州加茂郡寺部等の地を領して

名古屋に移る、爾後廢墟となる。

國正古屋敷　渡邊忠左衛門重綱之れに居り、小田原、關ヶ原、大阪の陣に從て每戰功勞ありき。

宮地村古屋敷　大久保右京之れに居る。

法性寺村古屋敷　八田森右衛門之れに居る。

三ッ木城址　松平清康の弟十郎三郎康孝之れに居り早世す。其の兄藏人信孝是れに居り、天文十二年德川廣忠を攻めんとして敗れて城陷る。

下和田城址　六ッ美村大字下和田字神宮寺にあり、反別二反に餘る、今悉く宅地及田畑に變ず。天文年間松平三左衛門尉忠倫此の城に住す、後松平廣忠の爲めに殺されてより一時廢城となりしが、數年の後佐野右馬助及加藤帶刀居城せりと云ふ。

中島城址　六ッ美村大字中島字巴城にあり、目下田畑となりて其の形跡更になし。由良平八郎初めて築きて此に居る、板倉彈正重定之れを攻めて自ら代て入城し、暫くにして松平大炊介好景、又板倉重定を逐ひ自ら居城し、其の子主殿介伊忠に至り吉良義照と戰ひ戰死す。是れより廢城となる。

池鯉鮒堀溝　知立西之町にあり御茶屋跡なりと云ふ。

牛田城址　水野忠政の家臣牛田玄蕃之れに居る、子孫相嗣ぐ。

來迎寺城址　村上兼房之れに居る、今崎城と云ひき。

今村城址　松平吉之丞一學其の子下總守之れに居る、德川家康に仕ふ。

宇頭城址　二ヶ所あり內一ヶ所は芳阿彌屋敷と云ふ、他は渥美彌三郎是れに居る、天正中のことなり。

矢作城址　二ヶ所あり內一ヶ所は島田彈正、同出雲守是れに居る、家康に仕へ、一向一揆の時忠戰す。

境村城址　東境にあり、酒井與右衛門是れに居る。永享十二年六月德川有親其の子親氏と共に關東を逃れて其の地に至る、與右衛門の家に入る、酒井氏の祖松平廣親は親氏の子にして母は與右衛門の女なり、廢墟の年月詳ならず。

大友城址　石川三藏、同右衛門八之れに居る。

北野村古屋敷　松平內膳之れに居る。

橋目村古城　山內源內、加藤與右衛門、原田七藏、石橋道全之れに居る。

小針城址　阿部孫四郎之れに居る、通稱を四郎五郎と云ひ、大和守後に攝津守と稱す、忠正は其の號なり、其の子藏人の時に至り額田郡六名に移り廢城となる。

同村古屋敷　上田七郎兵衛元成是れに居る、松平廣忠の時其の父宗太郎年寄役たりき。

柿崎村古屋敷　山田八藏之れに居る、宇頭の渥美彌三郎と屢々戰ふ。

若林村古城　本田四郎右衞門是れに居る。

上村城址　上郷村大字上野字藪間にあり、目今山林となり竹木繁茂す、一丘陵をなす。城域二千五百坪に餘り、四圍悉く水田にして、一部は開墾畑地となれり。戸田小法師尾州より來り當城を築く、其の後戸田孫四郎なる者相繼で居城し、暫くにして田原に移り、爾後酒井將監忠尚在城せり。永祿六年一向一揆に味方し利を失ひて駿河に逃走して後廢墟となる。

下村城址　上郷村大字上野字會下にあり、東西三十三間南北三十八間あり、明治の初年頃までは址地顯然たりしが、明治用水鑿けて後、開墾されて一部は田となり、其の他は宅地及松樹を植栽す。内藤清長(彌次右衞門)初めて築城し、太郎左衞門長政を經て、七郎左衞門清政の時に至り、德川家康に仕へ、慶長十二年二月駿州久能城に移り廢墟となる。

森越村古屋敷　杉坂三七之れに居る。

宗定村城址　阿部四郎五郎忠政之れに居る、大久保忠久が養父なり。

渡刈村古城　深津藤太夫、足達右馬助、近藤傳次郎之れに居る。

鴛鴨城址　上郷村大字鴛鴨字矢迫にありて丘陵の狀態をなし、四圍水田にして附近に小丘あり、城址の坪數千五百坪に餘あり、周圍に防禦用の築堤の跡を存す。松平和泉守信光之れを築き、其の子宮内小輔親光をして在城せしむ。其の子中務小輔親康及親久の三代居住して後廢墟となる。

竹村古屋敷　鈴木七郎之れに居る、次で同主殿、同七左衞門、同助左衞門、同市藏之れに居る。三河鈴木氏の祖なり。

浮谷村古城　原右衞門、酒井左衞門、此れに居る、此所今加茂郡に入る。

大福寺村古屋敷　天野六藏之れに居る、此所何所なるかを詳にせず。

家原村古屋敷　家原丹羽守之れに居り、桶狹間の戰に討死す。此所今何所なるかを詳にせず。

明智古城址　原田勘兵衞、同三九郎是れに居る。

宮口村古城址　加納孫三郎是れに居る。

第三節　古戰場

大濱

天文十六年、織田信長年甫めて十四、武者始めとして兵を率ひ參河に入り、大濱村羽城を攻む。城主長田直吉城兵を勵まして善く防ぐ、信長遂に拔く能はず、乃ち火を放ちて還る、後に至り織田氏の兵來りて羽城を脅すこと屢々なり。

弘治二年織田信長兵を率ひて參河に入り、岡崎に迫る、是れより先き今川義元は酒井忠次、大久保忠勝、同忠佐等を福釜に遣し、其の寨を守らしむ、信長即ち柴田勝家、荒川新八郎等をして之れを攻めしむ、忠次、忠勝、等善く防ぎ戰ひ、遂に勝家の軍を襲ふ、勝家傷き、兵を收めて還る。

重原

天文十七年織田信秀、其の將荒川新八郎賴季をして、此を收めしめ寨を築きて居らしむ。同年德川廣忠、松平康親、阿部四郎五郎忠政、等を遣し重原を攻めしむ、忠政善く攻め新八郎等寨を捨てゝ西に走る、後また織田の將山岡傳五郎此の地を攻め取り此れに居りしが、天文二十三年三月今川氏の兵遂に之れを攻め落す。

緒川

天文二十三年今川義元尾張に攻め入らんが爲め、松平長勝をして知多郡小川の北村木に砦を築きて之れに居り、また寺本城を降し以て小川城に通ずる糧道を絶たしむ、小川の城主水野信元、乃ち援を尾張織田信長に請ふ、信長海に航し暴風を冒して正月二十五日刈谷に到り二十四日村木の砦を攻め、砦主長勝をして遂に和を請はしむ。

刈谷

永祿三年、今川義元の田樂狹間に戰歿するや其の將岡部眞幸鳴海城に在り、捍禦して屈せず、信長之れを感じて成を行ひ且つ其の請に應じて義元の首級を贈る、仍ち眞幸城を致して去る將に三河に入らんとするや、間諜を放ちて刈谷城を覘はしむ、城主信元は小川に在り、城中の戍卒僅々四五十に過ぎざるを知る、乃ち步卒をして城中に入り火を放たしむ、城兵狼狽爲す所を知らず、信元の弟藤九郎信近遂に一命を殞す、信元の長臣牛田玄蕃、城下より馳せ來り觸るゝに　せて薙ぎ散し、信近の首級を取り返し、眞幸の卒を悉く城外に逐ふ信元もまた到り援ふ、眞幸悠然兵を收め、主君の喪を奉じて、駿河に歸る。

石ヶ瀨

石ヶ瀨は知多郡東浦村森岡と大府村大字大府との境界に當り石ヶ瀨川あり之れなり、其の幅二十間許り、平坦にして兩岸に水田連亘せり、永祿三年六月緒川の城主水野信元織田信長の嫌疑を恐れ兵を發して岡崎に德川家康を征めんとす、家康之れを知り兵を率ひて到り、之れと石ヶ瀨川に合戰す、兩軍皆相識る、接戰最も勵む、迭に殺傷ありき、翌四年兩軍復た此の地に戰ふ。

十八町畷

知立より刈谷に至る道筋にして刈谷の入口なる畷を云ふ、永祿三年六月石ヶ瀨合戰の時家康信元の兵また此所に於て相挑み相戰ふ。

櫻井

永祿七年二月德川家康一向宗門徒の味方八ッ面の城主馬場小平太を討ち、還りて小川村に抵る時に野寺本證寺の住持空誓三百人の兵を率ひて之れを追ふ、家康銃手をして當らしむ、水野信元の兵また機を見て大に僧徒を伐つ、空誓辛じて脫す。

安城

安祥

安城は元安祥と書す、了雲院と云ふ寺あり、此の地を城の森と云ふ、卽ち古城址なり、此の城もと織田氏に屬す。文明十一年七月十五日岡崎城主松平信光夜に乘じて之れを襲ふ、城陷り織田氏の守將梁田直敎遂に殪る、信光乃ち親忠を之れに留めて守備せしむ。天文九年六月織田信秀兵を三河に發し安詳城を攻む。城將松平長家善く防ぎ戰ふ、岡崎松平廣忠其の將松平利長同康忠等を遣し長家を援けしむ、信秀遂に城を拔く能はずして却く、天文十三年、織田信秀更に其の將織田左馬助敏宗に命じ、兵三千を率ひしめ、安祥城を攻めしむ。城兵固守し善く拒ぐ、敏宗傷きて綏く。敏宗の敗れて尾張に還るや、信秀大に怒り、同年冬自ら兵に將として來り攻め一舉にして之れを拔く。天文十四年松平廣忠兵千餘を率ひて矢作川を渡りて、安祥城を攻め、清田畷に抵り大に敗れて綏く。天文十八年駿兵來りて之れを攻む、亦拔く能はずして兵を收む。同年十一月今川義元僧大原雪齊をして兵七千に將として、來りて安祥城を攻めしむ。此の事尾張に聞ゆるや信長將に來て之れを援はんとす、既にして城陷り守將織田信廣遂に城を致して降る、信長の率ゆる援兵また途にして轡を還す。織田松平の兩氏各其の質子の交換をなすはこの戰ひの後なりとす。

佐々木

永祿六年、德川家康其將菅沼定顯をして、佐碕に城かしむ。糧儲未だ備はらず。此に上宮寺あり、頗る資糧に富む、定顯之れを徵す、上宮寺住持勝祐信祐の二僧聽かず、定顯等之れを奪て去る。二僧大に怒り、乃ち同宗門徒に激して、衆を合せ定顯を攻む。定顯堪へずして、急を家康に告ぐ、家康茲に酒井正親に命じ、其の主謀を斬り以て徇はしむ。僧徒益々怒り、遂に野寺の本證寺針崎の勝鬘寺土呂の本宗寺等の僧徒と謀り、門徒を衆め、兵を嘯集し、家康に抗す。所在の豪族また門徒に屬するもの極めて多し。結んで解けざること一年に及ぶ。世に之れを永祿一向一揆の亂と稱し、史上光輝ある戰亂なり。既にして一揆の勢侮るべからず、家康所々に難ず、同七年正月十三日松平三藏信次矢田作十郎等强兵を集め門徒を率ひて佐々木にあり、之れに對して桑子には妙嚴寺の僧徒弓の弦を濕し渡利には鳥居忠吉一族の者共武を磨て油斷なく要心す、十四日忠吉の部下捕へられて、佐々木の獄門に梟けらる、明くれば十五日佐々木勢鯨波を擧げて渡利の砦に押寄すれば、妙源寺にては早鐘を亂打して急を岡崎に報ず。家康之れを聞くより兵を引

き連れ矢作川を打ち渡り來りて忠吉等を援く。兩軍入り亂れて大に戰ふ、手負死人算なし。佐々木の將松平三藏信次矢田作十郎共に鐵砲に中て此所に討死す。

渡理川原

渡理川原

矢作町大字渡なる矢作川西岸の地を云ふ。額田郡岡崎城主松平信孝織田信秀に降るや、上野城主酒井忠尙、上和田城主松平忠倫また信秀に降る。時は天文十六年九月二十八日信孝岡の城より大軍を引率し出でゝ渡利川原に陣すれば、忠倫また兵を引き連れ上和田より來りて信孝の兵と此所に會し、岡崎松平廣忠を攻めんとす。廣忠之れを聞や僅の手勢を以て是れに馳せ向ひ、散々に打ち破られ僅に身を以て岡崎へ逃げ歸る。

善明堤

善明堤

幡豆郡花明村大字善明なる矢作古川の左岸を善明堤と云ふ。永祿四年四月幡豆郡東條城主吉良義昭駿河今川氏に通じ、其の將瀨戸川上富永等をして、酒井忠尙を上野城に攻めしむ。時に中島城主松平好景、其の子伊忠をして兵を率ひ、到りて上野城を援けしむ。義昭之れを聞き、中島城の虛に乘じて之れを圍む。好景時に深溝にあり、來りて更に義昭の後を衝く、義昭忽ちにして敗れ、東條を指して北ぐ、好景之れを逐ふて善明堤に至る、之れを見たる牟呂城の兵馳せ來りて義昭を援く。好景遂に前後に敵を受け惡戰苦鬪遂に討死す。

藤波畷

矢作

藤波畷

幡豆郡横須賀町字駿馬にあり。永祿四年四月東條城主遂に今川氏を離れて、尾張織田氏に屬す。家康乃ち酒井正親を遣りて之れを征めしむ。兩軍大に藤波畷に戰ふ。正親の軍大に利あり、遂に東條城を拔き義昭を降し、また吉良氏の將富永忠光等を殺す。

矢作

矢作町大字矢作は古來東海の公道に當り、且つ矢作川に沿ひ要害の地たるを以て、屢々戰爭ありし所なり。頃は源平の昔、源頼朝追討の爲、頭中將重衡、權亮小將維盛以下七千餘騎を東國に下されける、養和元年三月十日頼朝の家臣新宮十郎藏人行家は、尾張墨俣川の合戰にて之れに打ち破られ、退きて矢作川の東岸に陣を取り直し、計を設けて平氏の軍を迎へ討ち、欺謀を以て之れを西に走らす。次では元暦元年源義經が兄頼朝の命を帶び平氏追討の爲西上の際、三浦小河の兩將が渡河の先渡を爭ひしことあり、また建武二年十一月新田義貞が朝敵追討の宣旨を蒙り大軍を率ひて東下するや、此の川を挾みて足利義直の大軍と激戰し、遂に之れを敗退せしむ。又延文五年仁木義長の守護代西郷彈正左衞門は、大島左衞門佐義高が仁木に代り三河の守護となりて來りたる時、此の地に倚り之れを防ぎて大戰す。また次では戰國の中駿河今川氏の將北條長氏が、永正三年岩津城主松

平氏を襲ひし時、其の一族松平長親が安祥城より來りて之れを援け、此の川を挾みて奮戰、駿河勢を擊退したる等、古戰場としての事跡頗る多し。

上野

天文十四年、松平信定の子内膳正清定上野城に據りて松平廣忠に抗す、廣忠至りて之れを攻む。酒井將監忠尚また上野城に入り清定と力を合す。翌年九月廣忠また大に兵を出して上野城を攻む。清定將監等遂に出でゝ降る、永祿六年一向一揆の亂起るや、酒井忠尚また上野城にありて僧徒に組し、事破れて駿河に走る。忠尚復た上野城に歸り城を修め、土民を糾合し將に事を爲さんとす。酒井忠次、本多廣孝、等家康の命を帶び來りて之れを攻む。城陷りて忠尚遂に復た駿河に赴き今川氏に屬す。

野寺

永祿六年、一向宗門の一揆起るや、僧徒に組し野寺本證寺に楯籠りし武將の中に戸田三郎左衞門忠次あり、間もなく心を變じて岡崎に至りて家康に屬す。茲に家康戸田三郎左衞門を嚮道とし酒井忠次をして兵に將とし、野寺に到り本證寺を攻めしむ。戸田案内を心得たることゝて忠次の兵忍ちにして寺門に入る、既にして戸田眞向に鐵砲を受けて遂に倒る、忠次の兵乃ち進退を失し、遂に寺内を追ひ出さる。

和田

明大寺川原

永祿七年、正月土呂針崎野寺の僧徒一揆の兵を擧げて來り和田を攻む。守將大久保忠俊、忠世等兵を勵まし防戰善く勤め創を被むる。德川家康馳せて之れを援ふ、鵜殿康孝之れに死し、門徒の士渡邊守綱家康に逼り將に之れを刺さんとす、土屋長吉之れを見て心を變じ鋒を倒にして家康を掩ひ之れを逃れしむ。守綱忿激一擊にして長吉を屠る。日暮れて兩軍交々退綏す。

明大寺川原

額田郡岡崎町大字明大寺にあり。天文十七年四月三ッ木の城主松平信孝岡崎を攻めんとして兵を明大寺河原に出す。岡崎城主松平廣忠其の臣酒井正親等をして之れを逆へ擊たしむ。正親の士大橋源五右衞門信孝を射る、信孝殪る。正親等敗北の兵を追ふて遂に三ッ木の城を拔く。

第四節　塚墓

利井重茂彌八郎墓　知立町大字知立寶藏寺域にあり、俗說に人誤てこれにふるゝ時は瘧を病らふに至るといふ、石は岡崎城主田中吉政のたてしものなりと。

殉臣兩墓ナヒハラツカ　知立町刈谷道の並木にあり、刈谷侯水野忠重の臣を葬りし地なり。

右に付言あり曰く、慶長五年庚子七月濱松侯吉晴堀尾帶刀將に刈谷侯忠重水野に謁せんとす、途にして利井重茂に遇ふ、其の知人なるの故を以て相伴ふて到る、十九日忠重之を池鯉鮒の客舍杉屋良藏に迎ふ、夜宴酣にして忠重睡る、重茂一躍して之を斫り遂に絶命す、時に吉晴柱に倚て睡る又併せて之を斬る、吉晴驚き醒め擊て之を殪す、忠重の近臣等來り視て以爲らく吉晴二人を殪すと、乃ち將さに吉晴を擊たんとす、吉晴辨解して纔かに免かるゝことを得たり、是に於て忠重の臣二人殉死す、其の葬地今に至るまで追腹塚と稱す。抑々重茂の忠重を殺すに至りし其の意詳かならず、逸史及び武德偏年等には石田三成の刺客と稱せり。

村說によれば三成內大臣家康を害なりとし重茂をして關東に狙擊せしむ、されど釁の乘すべきなきを以て怏々として徒らに西歸す、途にして吉晴に遇ひ乃ち俱に忠重に面す、宴中忠重の方向如何をこゝろむるに東軍に屬するの意色滿ちしを以て遂に之を及すといふ。

和泉守信近墓　刈谷町大字元刈谷楞嚴寺域にあり。

蛇塚　高濱町大字吉濱にあり、一名大塚又長者塚ともいふ。塚脚二十歩高さ七尺許り、塚中石槨のごとき者ありて其の一隅を見るといふ。

菅原松麻呂墓　高濱町大字高濱にあり、大納言菅原家長の第三弟寶曆十一年辛巳本村に至る、これ本村恩任寺の有緣に因りてなりとか。十四歲にして卒す、即ち此の地に葬る。

德川親季墓　大濱町稱名寺域にあり、親季永享十二年庚申卒す。其の子有親本刹に閑居せしを以て父の遺骨を分葬すといふ。

松平親氏墓　同町同寺域にあり、されど親氏泰親共に松平村安養寺に葬るよし鹽尻にのせたり、さもあるべし。玆に墓あるは思ふに後世の所爲なるべし、寺記には應仁元年丁亥の卒とあれども、諸史には康正二年丙子の卒に作れり、何れか眞なるや記して疑を存す。

松平信忠墓　同町同寺域內にあり、寺記に和田親平建立の伽藍宏壯にして支院亦二十院ありし云々と。村記に曰く、本村に六供六坊ありしに何れの時か岡崎へ移る云々と、享保中一村童あり字六供の地を堀りしに香盤鈴各一個五鈷四個を獲たり、皆古銅にして靑鏽愛すべきなりと、想ふにこれ稱名寺天台宗なりし時の遺器ならんか。其の器今は石川八郎治の家に傳へたり。

長田直吉墓　長田重吉墓　林氏菊墓

右三墓共に大濱町寶珠寺域中にあり。

小石塔　明治村大字東端念空寺にあり、寺僧曰く、松平右近將監墓なりと、されとも或は松平源三郎の墓ならんともいへり、未だ詳かならず。

神子塚　明治村大字東端にあり。

火塚　明治村大字和泉字揖御林山にあり、土人曰く、往古三河尉某任國中に卒す、是れ其の古墳なりと信ずべきにあらざるなり。

火塚　同字惣山にあり土俗の說前に同し。村老曰く、本龍寺後門の石垣中に此の塚石を用ひたり。又一說に開墾の時堀て石に遇ふ之を覩れば則ち石槨なり乃ち復た土を掩ふと云ふ。

火塚　同字南揖にあり土俗の說上に同し。慶應三年丁卯此の地開拓の時金環及び陶器數個を堀りいだせり。

大塚　明治村大字米津にあり、只名のみにして塚無く巨扁石の横はるを見るのみ。村說に物を埋めたる上の蓋なるべしといへり。

松平忠直墓　櫻井村大字野寺にあり。

金四郎忠直初め宗直といひ周防守康親松平の父なり、岡崎侯廣忠に仕ふ、廣忠内膳正信定を避けて國を去る、世臣爲めに離散す、獨り宗直能く身を致し陪從志を變せず、依て偏諱を賜て忠直と更む。天文十一年壬寅岡崎に戰歿す、本性寺に葬る。法諡正順忠直禪定門。

五輪小石塔三基　櫻井村大字小川字破城の南にあり。

下野權守政康墓　石川親康墓　安藝守清兼墓

右三墓共に櫻井村大字小川に在り。

圓光寺順正墓　これ亦櫻井村大字小川にあり、順正の法諡を安政院と號す。此の所の地名安政は此に原つくものか。然れども法諡の安政は安政に戰歿せしに由るに非ず、永祿の役諸史に安政に戰ふと書す、是れ順正の死に先だちて安政の稱有るに似たり。石川康正或は玆に住して地名と爲りしものか後に同訓なるを以て安政に改めしにあらざるか。

三塚　櫻井村大字小川にあり、土俗の說には同地なる岩根の加藤庄右と大帳の天野六藏と旱歲に田を爭ひ六藏走る、庄右これを追て矢作に抵る、六藏江戸に奔る、後幕府檢地の從僕と爲り來て多く岩根の田を量出し大帳の田に於ては竿を疎にす、村民大に怒て妻子三人を坑にす、三塚乃ちこれなりといふ。

内藤清長墓　櫻井村字姫小川にあり、寺記に永祿七年甲子八月十二日歿すと書す。清長は右京亮義清の男なり、義清は額田郡菅生の人なり。

姫塚　櫻井村字姫小川の誓願寺より東北二町許の處にあり、塚足方十四間高一丈五尺にして塚の中央に五輪塔あり村說に曰く、古へ本村の東面は海灣にして湖水北に進み入ること三里餘、時に一つの扁舟本土の濱に漂着す、村長小川傳太郎といへるもの之を檢せしに、窈窕たる貴女の盛裝したる傍ら嫺雅凡ならざる一女侍せり、これ蓋し宮中貴重の女なるが如し。乃ち之を閭中に請し其の詳細を侍女に問ふ、始めて其の第三十七世の聖上孝德天皇の皇女なることを知り、愕然

として遽かに假宮を造營し以て村民尊奉せり。而して侍女は皇女の乳母なりといふ後宮官人某と親しきに因り書を寄せて近況を報し愛顧を内奏せんことを請ふ。是に於て矢部丹下内勅を奉して報す、乃ち厨下資料乏しからざるに至ることを得且つ長門都築河合野村の四氏をして奉仕せしむることを賜ふ。乃ち村民宮を營んことを議して地を卜し區畫經營す。其の地方五十間環らすに土垣を以てす。宮殿成りて茲に延請す、朝暮觀世音佛を敬禮す蓮華寺と稱す。小川村字堂開道に蓮華寺の址と稱する地あり地姫小川と相接す。

白鳳十年辛巳六月二十四日薨せしかば村閭の北隅に葬る。初め皇女罪有て謫せられ海濱に落魄し遂に此の僻邑に漂泊すと云ふ。蓮華寺宮の遺址字姫森と稱す、一名姫城慶長年中其の地を割き櫻井村の内東町に入る、而して長門某等四名の邸慶安二年に至るまで各獨税地なりしが三年庚寅より隙邸の名儀を以て些少の錢を納め來るといふ。

獅子塚　櫻井村字東町にあり上に秋葉神祠あり。

某天皇御惱みの時勅禱ありて舞獅子の頭を各國神祠に納め給ふ、後之を埋むといふ古塚なり。

八塚　同　同字にあり櫻井村八塚の一たり。近時此の塚より古鏡出でたりといふ。

山伏塚　櫻井村大字櫻井字櫻林といへるにあり、野田熊勝を葬る。巨枯松及び墓表あり。

狐塚　同村大字櫻井にあり、松平信定の執政柴田權兵衛政幸及び同氏庄兵衛宗政、庄兵衛政定、庄兵衛政直、庄兵衛政盛五人の墓あり。

看月塚　同村大字櫻井にあり、其の義詳かならず。

松平氏七世墓　同村大字櫻井菩提寺域中にあり、信定、清定、家次、忠正、忠吉、家廣、忠頼の墓なり。墓に實葬のものと否らざるものとあり。

浮屠氏の諸侯及び名家等に於ける苟も緣あれば好んで其の墓を設くるの癖あり、後世紛議の媒となる、彼の家廣の如きは濱松に遷りし後に卒せしなり、況んや忠頼をや、知らす尚此の二人遠く此の寺に埋葬せしものにや。

龜塚　安城町大字古井字丸下にあり。

山伏塚　安城町大字古井字西側といへる處にあり。

金藏塚　安城町大字古井にあり、

二葉松に此の塚種々怪あり、土人曰く、塚に溺するもの忽ち瘧を病むと、又曰く燐火暗夜に此所より出でゝ田面を飛行す、これ親しく自他村民の見る所なりといへり。

赤松某墓　安城町大字赤松字丸山の側にあり、村民之れを赤松圓心の墓な

りと稱す然れども恐らく誤ならんか。

右京亮親盛墓　安城町大字福釜寶泉院の西南林中に在り、猶同地に右京亮親次、松平親俊、筑後守康親の墓あり。

左右塚　安城町大字福釜にあり、松平親俊永祿中に土呂針崎を攻む、叛賊伊藤右近及ひ僧二人を殺し之を本村城外に埋む、これその塚なり。

浪人塚　安城町大字福釜にあり、編年集成に福釜能仁塚と書す、これ音の近似せるを以て誤れるに非ざるか。

姥塚　安城町大字福釜にあり、其詳細知るによしなし。

本多忠豐碑　安城町大字安城にあり、碑文は大學頭林衡の撰なり、尙ほ同村に本多忠高の碑あり。

阿部正信墓　安城町大字安城にあり、正信は新四郎といひ大永五年乙酉二月二日戰歿せり。乙酉は松平清康立ちて第三年にして小康無事の時なり。想ふに他邦の征戰に歿せしなるべし、後裔阿部勝利慶應三年丁卯墓表を建つ。本村明法寺にあり、勝利は正信十五世の孫にして食祿五百七十石なりき。

阿部重尙墓　安城町大字安城明法寺に在り、墓表は其の後孫重義といへるもの慶應三年丁卯に建てしものなり。重尙は正信の長男にして新四郎といひ天文九年庚子六月六日安祥の役に戰歿せり。阿部家の傳記によれば上野城碧海郡に戰死すとありこれ誤なるべし。此の阿部といへるは本郡小針城主阿部忠正攝津守の支流にして幕府麾下の士なり。

東城塚　安城町大字安城にあり、三河堤に東城康忠の塚にして天文九年六月六日安祥の役に岡崎兵の援兵として本城に來り奮戰して歿せしなりと。

千人塚　安城町大字安城東城塚の南にありて老巨松欝蒼たり。天文九年庚子六月同十三年甲辰冬同十八年己酉春及同年冬の四役に戰歿せし士卒を葬る。

堀平十郎塚　安城町大字安城字社宮司堂にあり、十郎名は宗正なり、古墳記に宗正の墓大樹寺々內竹用院にあり、村長の言によれば堀氏足役を免許したるの印書今に存す。

近藤彦四郎塚　安城町大字安城にあり、土人ゴウド彦四郎塚と稱す、其の文字を問へとも知る者なし久しく疑問の一たりしが後に生邑記を觀るに近藤彦四郎永祿中安祥に戰歿すと記せり、始めて此の人なること疑なきに至れり。

鏡塚　安城町大字安城にありて形圓なり、鏡は唯其の形を以ていひしものならん、此の他古見塚姫塚藤塚等あり。

中川覺右衞門墓　安城町大字安城明法寺域にあり。

不自塚　安城町大字上條にあり、武士塚の訛傳なりといへり。

大胴塚　安城町大字上條にあり、蓋し無首の屍を葬るの塚なりといふ。尙

重塚といへるもの二ヶ所にあり。

破城塚　安城町大字山崎なる城址の近傍にあり。

主針頭親吉墓　矢作町大字桑子の妙源寺域にあり、尙同寺域に天野金太夫、都築十三郎、加藤喜左衞門、荒川藤右衞門、服部權太夫、山内三左衞門、中條藤左衞門、安藤太郎左衞門、安藤木工之助、對馬守重信、帶刀直次、主水正清秀高木長坂血槍九郎、加藤喜助等の墓あり。

馬塚　矢作町大字桑子妙源寺門側にあり、二葉の松古墳の部上宮寺の條下に小牧合戰の時武者奉行高木清秀黑御馬を賜ふ、死後之を埋むと記せり。

本多忠豐墓　同所妙源寺域にあり、碑は安城村にあれども墓は桑子西の坊といへるにありしなり、而して近年改葬せしものなりと、本多忠高の墓も同一なり。

安藤塚　矢作町大字東牧内の堤外にあり、幕府麾下の士安藤太郎左衞門の祖某の墓なり。

重代塚　矢作町大字上佐々木の上宮寺域の北位なる妙覺池の岸上にあり、武家祖先の墓多し。

松平信次墓　同所上宮寺の東南田畝の中にあり、村記には天正十五年丁亥五月歿すとあり。

太田善太夫祖先累世墓　矢作町大字上佐々木に在り、善太夫は幕府麾下の士にして二千石を食みき。ッき。

伊賀守勝重板倉墓　六ッ美村大字高畑の大久後水陸兩田間にある數歩の地をいふ。然れとも葬地にあらず、蓋し民其の德を欽慕し甘棠の遺意墾かすして以て今に至るなり、而して墓は幡豆郡貝吹村長圓寺域にあり。

大山滿政墓　六ッ美村大字下中島崇福寺域にあり、大山左衞門介法諡廣德院卽ち赤松敎祐なり、延德元年己酉六十歳にして三州大山城に卒す。

大山滿政夫人墓　同所にあり、法諡德操院赤松貞房女なり。

吉良持廣夫人墓　同所にあり、寺記に信忠の女とあり、吉良の瀨戸に住し瀨戸大局と稱し慶長十四年己酉卒す、其の夫持廣は東條の城主なり。

吉良義安夫人墓　同所にあり、寺記に德川家康の叔母なりしといふ、或はこれ外叔母水野氏なるか、義安は上總介たり。

荻野吉義夫妻墓　同所にあり、荻野時光九世之孫なり、今川義元に屬し駿州中妻城に住す後三州幡豆郡寶村城に遷り德川氏に仕ふ、慶長八年癸卯卒せり。

板倉重重墓　六ッ美村大字下中島にあり、重重は好重の子にして伊賀守勝重以下累世の墓は貝吹村長圓寺域にあり。

二葉松に中島村長圓寺に板倉黨古墳在りと記す、これ貝吹村にある古墳をさすも

のなり、長圓寺貝吹村移轉の後も仍ほ中島に編籍す。

渡邊兼綱墓　六ッ美村大字定國にあり。

畔柳某次兵衛墓　六ッ美村大字井内にあり、寛永十六年九月歿す、男を勝吉權左衛門といへり。

一說に宮地村妙國寺蠲租符地は舊此の畔柳次兵衛所賜の地なりとも云ふ、其の理あきらかならず。

左近將監宇都宮泰藤墓　六ッ美村大字宮地の妙國寺域にあり、正平七年壬辰の卒なり。

宇都泰綱墓　同地にあり、應永十五年戊子の歿なり。

宇津泰道墓　同地にあり、文安二年乙丑の歿なり。

宇津泰昌墓　同地にあり、明應元年壬子の歿なり。

宇津昌忠墓　同地にあり、永正二年乙丑の歿なり。

宇津忠興墓　同地にあり、大永二年壬午の歿なり。

寺記に三郎右衛門忠興とあれとも興の誤なるべし。

久世直信平七郎墓　同地にあり、墓表は五輪の塔と稱する石塔にして高さ一尺三寸あり、寺記に永祿六年癸亥十二月二十一日の歿とあり。

土屋重治長吉郎墓　六ッ美村大字上和田にあり、永祿六年一向宗門徒の亂に重治一揆に黨す。七年甲子正月針崎の戰ひの時家康危急なり。重治急に心を翻し大聲呼て曰く、君恩は照々として近し、佛罪は冥々として遠し、たとひ死後には紅蓮に乘るも焦熱の苦をうくるも目下君の危急を救はざるは是れ人たる道にあらずして生きながら畜生道に墮つるなり。汝等も此の理をさとらば早く降參すべしとて家康に降る、時に銃丸に當て死す、年二十三。

八劔塚　六ッ美村大字法性寺にあり、されど三河墳墓記幷に二葉松共に載する所なし。

本多信重墓　六ッ美村大字土井の陸田中にあり、早乙女利政、早乙女利昌の墓も亦あひの堀にあり、太田定八郎近時其の墓表を邸側に移しぬ。

釋順超妻墓　六ッ美村大字中の郷淨妙寺域にあり。

大炊頭利勝土井母墓　山城守信重本多妻墓

右の二墓共に六ッ美村大字中の郷淨妙寺域中にあり。

本多宗信墓　同村同字の東下明といへるにあり、老松の聳ゆるを見る。

鳥居忠宗墓　矢作町大字渡りの六段缺にて戰歿せし人にして墓は六段缺を距ること南三町の處にあり。

鷲取卿墓　矢作町大字西本郷にあり、重代記に鷲取卿の御尊宅の跡へ藥王寺を引き政則蓮華寺と稱す。此の辰巳の方に鷲取卿の墓あり、又南の方に小塚あ

り山賊の塚といふ、其の由來に曰く、大鷲賊といふ山賊ありて往還の旅人を煩はすにより、帝王公卿に勅して退治し給ふ。是れより鷲取卿と御名を申奉り此處に御尊宅あり云々と、和志取卿和志取神社等の原因皆此の鷲取卿にありと見えたり。

冠塚　矢作町大字西本郷鄉社和志取神社の側にあり、冠塚とは近年の稱なりといへども其の詳細明かならず。

鍋田正保墓　矢作町大字矢作光明寺にあり、永祿八年乙丑の歿にして墓表に釋阿彌陀佛と勒するものこれなり。

鍋田正數墓　同所にあり、永祿十二年己巳の歿にして墓表には廓翁自然居士と題せり。

鍋田正明墓　同所にあり、元和八年壬戌の歿にして墓表には安空宗心居士とあり。

右鍋田三墓表の刻字共に磨滅して明瞭ならず、文化年中本刹の食客寓岩といへるもの鍋田氏の系譜を參考編纂し刻苦數年にして成るといふ。

箸塚　矢作町大字矢作にあり、古墳記によれば此の塚何の世の合戰なるか河を隔てゝ陣せし時軍勢の食したる箸を埋めし塚なりとあり。一說にこの箸塚は土師塚にして箸塚にはあらざるべしと。往昔此の里にて陶器を製りしこと土人の遂に和禮塚と稱し、其地名を割塚と書くに至りしものなりと。

猿投塚　前記割塚の東南にありて徑十五間あり、名義明ならず、或は云ふ石川ズントの墓なりと、ズントとは何人の事なるや詳かならず、此の猿投塚の北に二塚あり亦東に一塚あり其の亦東に一塚あり棺圓形をなす、何れも徑六七間に餘る。

宇都留義塚　前記棺圓塚の北にあり徑五間に餘る、其の北に更に一塚あり徑上に同じ。

大塚並に小塚　矢作町大字東大友に在り、塚中より多くの土器を出す。

山城守忠正塚　矢作町大字小針の土井畔といへる地にありて城址の東北にあたれり、然れども亦舳越村願照寺にも同氏の墓あり、本村の方埋葬の地なるべし。

十二塚　矢作町大字小針の西の山にあり、今は僅々一二を存するに過ぎず、塚につきては村民區々の說ありて更に詳かならず。

山田八藏塚　矢作町大字柿崎の邸址にあり。

千人塚　矢作町大字柿崎字扇山といへるにあり、卽ち古戰場なりと云ふ。

十二塚　同町同大字にありしものなれども今は其の地名のみ存するに過きず。

九塚　矢作町大字字頭にありて祠址に三塚祠址の東に一塚蓮華寺山に五塚あり、こは矢作町大字西本郷の部なり。祠址御休にある三塚の第三坤位の塚は半月形をなせり、蓋し南北二村經界を分つの時鑿斷して半規をうしなへり。或は曰く曩昔本村地論に因て蓮華寺山を亡ふ、依て新に經界を正し半塚以南他村となると然れども年暦詳かならず。

古來四月三日十月十二日藥師と共に九塚を祀る、これ必ずや故あることならんも其の傳說を知るによしなし。

吉田兼亮忠左衞門妻之塚　知立町大字牛田にあり、赤穗義士吉田兼亮の一齒を併せ葬る。

姫路藩士伊藤十郎大夫は赤穗藩士吉田兼亮の女婿なり、兼亮既に節に死す、寡妻名は林伊藤氏に寄寓す、寶永元年甲申姫路侯本多氏越後村上に封を徙され、七年庚寅又刈谷に封を轉せられ寡妻も亦再たび伊藤氏に從て徙る、同年十一月元刈谷村に歿す、法諡を安性と曰ふ、遺言に因て牛田泉藏寺に葬る。安性性謹愼淸介にして德其の夫に愧ぢずといふ。

中將業平塔　知立町大字八橋にあり、古墳記に澤邊上の岡に在る五輪塔なり、應永八年とあり云々。今檢閲するところによれば石色新なるを覺ゆ、されば三河事記に「業平石塔近年建立す」とあるこれ信なるべし。

松平飛驒守の墓　上郷村大字上野にあり、天正十一年九月卒せり、此の墓廢寺たる洞樹院域にありしを以て今は茫乎たり、嘗て五輪塔六道錢等を堀り出せしことあり、其の他は知るによしなし。

兼高夫妻墓　上郷村大字川端の阿彌陀院に古墓あり、住僧其の誰の墓なるを知らず、されど三河事記には兼高夫妻墓とあり依てしばらく此の名をとる。兼高は矢作の長者にして正平より百七八十年前の人なり。此の墓また千手丸の父母の墓なりといふものあり。

石見守高正墓　上郷村大字阿彌陀堂にあり、元中九年壬申に歿す、神谷氏の祖たり。

因幡守高重墓　同地にあり、應永二十二年乙未に歿す、神谷氏なり。

主殿介高元墓　同地にあり、文明十七年己巳に歿す、これ亦神谷氏なり。

赤塚　上郷村大字渡刈の赤塚といへる古塚六あり依てかりに赤塚と記す、

而して其の大なるものは塚足三十間許高さ壹丈餘あり、相傳ふ古昔鷲輿末の原に行幸して鷹刈したまふ。是れ其の時の築つく所なりと、未だ其の實を知らず。

深津正次三郎九郎墓　同地の大通院にあり、三河堤に曰く、深津陸之助光重の後裔なりといへり。

三絃塚　上郷村大字鴛鴨にあり。

旗降塚　同地にあり、三絃塚と共に種々の說あれども記するに足るべきものなし。

宮内少輔康時墓　上郷村大字隣松寺にあり、康時は鴛鴨松平氏なり、隣松寺記に天文五年に卒し、隣松寺に葬ると書せり。

松平康親墓　同地の隣松寺域にあり、墓表は姫路酒井氏の臣則久の建つる所なり。康親は康時の男なり、諸記に松平中務墓弘治二年と記せり、諱を記せず、弘治二年に卒せしは康親なり。

松平覺峰墓　同所にあり、宮内少輔たり、姫路侯世臣松平則久享和二年建つる所の松平氏の碑に覺峰の諱詳ならざるを以て康親男某とす、隣松寺記には親久とし永祿八年乙丑とあり三月卒す、是れ亦墓石は則久の建つる所なり。按するに康時以下三墓の眞所在地は永覺新郷なるものゝ如し。

薩摩守忠吉墓　同所にあり、墓表には憲營玄白大居士とあり、二葉松古墳記其他諸記をみるも本刹に此の墓あることなし甚だ不審なり、且つ忠吉の遺骨改葬の說ありて又聊かその事を書きし片紙を見る、因て按するに忠吉は天正九年辛巳年甫めて二歲にして松平宗忠甚太郎の後を承く、宗忠は右京亮義春遺腹の子にして東條松平是れなり。隣松寺記によれば忠吉の養母美津子は鴛鴨松平氏の女なり、若し改葬するときは東條松平養母の香花院にして可なり。養母私親（さとかた）の香火院隣松寺へ改葬すといふこと不審といふべし。

松平宗忠夫人墓　同所にあり、薩摩守忠吉の養母にして法諡を喜秀院といへり。此の墓宗忠の香火院にあるべくして玆にあるは假設せしものか、未だ詳かならず。

三塚　上郷村大字永覺新郷にあり、北なるは天文五年丙申兵庫頭某榊原梨湫にて戰歿なしゝを葬りたる塚にして、中は榊原兵庫天文十三年甲辰歿せしものを葬りし塚なり、而してその南なるは天文十五年丙午松平岡崎侯廣忠松平豎物を攻擊せし時の首塚なり、塚相距ること各三間許なり。

松平氏墓地　同地に愛宕神の祠あり、祠の南に數畝の小林あり字墓蹟と稱す、祠地と相接せり、土俗傳へて鴛鴨松平氏墳墓なりといへり。然れども年暦の久しき塚墓頹廢し周圍境界僅かに存して墳墓なし。

按するに姫路城酒井氏の世臣松平則久は鴛鴨松平氏の後裔なり、享和二年其先康

親及び其男覺峰の爲めに兩墓表を隣松寺に建つ。此の兩墓もとこの祠南の小林中に在りしを知らずして其の香花院隣松寺にたてしことゝ見えたり。蓋し則久の建つる處の隣松寺の碑中に先世墳塋頽敗湮滅と記せり、これを以て當時既に明ならざりしことを知るべし。

車塚　同地にあり、閭南の坂に車塚と稱する高塚あり、土地の人相傳へて弘仁八年丁酉東山親王（隣松寺三河に謫せられ上野に住す、薨するの後車をこゝに埋む、因て車塚と稱し坂を車坂と稱すといへり。

乳兒塚　富士松村大字東境字新林といへるにある小塚なり、村說によれば德川親氏本村酒井與右衞門の家に匿る、其女に通し一男兒を生む、既にして親氏松平信重の女婿となり與右衞門の女の生む所の男兒を松平に迎ふ、女其の兒を送て出で深く別を傷む、依て其の地に就き塚を築き以て之を標すとあり。

御船塚　富士松村大字築地にあり、これ鈴木丹後守か神位を載せ來りし船を埋むる所なりといへり。

老松塚　富士松村大字築地にあり、塚上に一老高松雲を凌て樹てり、されど何の塚なるかを知らず。

丹後塚　同地にあり、丹後守の塚なりといふ。

毛受孫兵衞室墓　小山村敬專寺にあり、五輪石の小塔にして二あり、一つは孫兵衞の爲めに設けしものか、孫兵衞は田原城主たり。

村說に知立の人永見淡路守は敬專寺の檀越たり、其の女阿萬は中納言秀康（德川の生母にして元和五年己未越前福井に逝す、其妹卽ち孫兵衞の妻なり、城陷るの後は敬專寺に住する故を以て墓あるなりといへり。孫兵衞は越前の人志摩守吉次三浦の父にして嘗て越前某地の城主たりしことあり。

渡刈の古塚　上郷村大字渡刈の赤塚に古塚六あり、大なるは塚足三十間許高さ一丈餘、相傳ふ古昔鸞輿末の原野に行幸ありて鷹狩し給へる時築く所なりと。

第十一編　風俗

第一章　古傳說並古墳

(一)　御陵傳說地

和志塚又王塚

參河國碧海郡矢作町大字西本郷字和志山なる蓮華寺の側に一大古墳あり、土地の人和志塚或は王塚と云ふ。昔大王生なるものあり、參河國に逃れ來りて朝命を奉ぜず、遠近に暴威を振ひし爲め景天行皇の皇子氣入彦命大命を奉じて、三河國に來り、遂大王生を捕へ朝廷に奉答せり、天皇其功を賞し給ひぬ。塚は卽ち此の命の其の後此の地に薨じ給ひしを葬り奉りしものなりと。明治の御代に入り、前後數回、宮內省より實地踏査の事あり、明治三十年三月御陵傳說地と認定せらる。

(二)　古塚諸傳說

本郡矢作川の流域に臨める、渡刈、馬場、國江、桝塚、北野、橋目、小針、柿崎、尾崎、宇頭、大岡、山崎、上條、古井、櫻井、小川等の地に於ては、冲積層に臨める洪積層の臺地に數多の古塚を現存し、里人は是等の塚に就き、夫々牽强附會の說を世々に傳ふ。今是等の塚を檢するに、多くは上代の墳墓にして內には先史時代のものもあるべきか、必ずしも里人の傳ふるが如きものにはあらざるなり。其の形前方後圓なるあり、單に圓形の塚なるあり、大なるは周圍百間にも餘り、高さ七八間に及び、小なるは高さ四五尺に足らざるものもあり、其の所在田畑の間に其の上に雜草の生ずるあり、林間にありて其上に雜木の茂れるもあり、又風雨の爲自然に崩潰して今は名のみ殘れるあり、又或は故意に破開して其の址を田畑に墾きたるものもあり、されど古來塚に手を附くる時は不吉の事ありとなし、其儘にして今日に至り、尙ほ明に舊形を保持するものも少からず。而して既に發堀されたるものゝ內部には切石を以て疊み上げし堅固なる廓室あり、其內に更に數多の土器を納め、偶〻鐵器の腐蝕したるもの或は金環管玉礫等を包藏す。以上は本郡に於て發見する古墳に就ての大要なるが、猶ほ吾人は、往々にして田畑の間に石鏃石棒等を採拾することあり。是れ等は何れも「アイヌ族」の製作する所にして先史時代の遺物に屬す附して考古の資に供ふ。

(三)　犬頭絲の物語

今昔物語

參河國は上絲國なりき。今昔物語に犬頭絲の物語を載す。本郡六ッ美村に犬頭犬尾の兩神社あり。又矢作町の里間に古來此の犬頭絲の物語を傳承せり。左に今

昔物語なる犬頭絲の物語の大要を記さんに。「今は昔參河國某の郡に一人の郡司あり き。妻と妾とを持ちてけり、妻妾共に年々蠶を飼ひて生絲を採りしが、一年妻の蠶、何が故にや悉く死に失せき、郡司之れを見て不吉の兆なりとし、心面白からずなりて、遂に妻が家には通はず、妾の家にのみ通ひてけり。妻は悲しさ遣る瀬なき中にも二年三年は過してけり。或る日一蠶の桑の葉に附着してありしを取り歸り、懇に飼養し居たりしを不思議にも、此家に年來養ひありし白犬の、何思ひてか此の一蠶を喰ひてけり。是れを見て女は蠶一つだに飼ひ得ずなりしは何の因果にてかと泣き居たりしが、此時白犬の二つの鼻の穴より二筋の白き絲の如きもの垂れしかば、女怪み寄りて是れを見るに、雪かと紛ふ許りに白き絹絲なり、取りて是れを引くに綿々として出でゝ盡きることなし、引き出せし絲の量非常のものとなりし頃其の白犬は俄に倒れ死にき。女は此の時此白犬こそ神佛の化身にて己れを助け給ひしものなる哉と、且は喜び、且は悲しみ、最と丁寧に、其の屍を桑の木の下に埋め、さて其の引き出せし絲を靜に繰り居たりしが、先の郡司偶々其の側を通り、是れを見て不思議に思ひ、其の故を女に問ふ、女斯くと答へければ、郡司は驚きて、さもあるべし、妾の取る絲は年々に其色黑く節多くして見惡し、此の絲の雪の如く白くして光り妙なる、世に類なきものなる哉、神佛の加護ある此の妻を愚に思ひけることの淺ましさよと、己が身を恥ぢ誤りを悔ひ、是れよりは、此の妻の家にのみ通ひ、妾の家には終に通はずなりき、郡司後に此事を國司に物語りしに、國司は吉祥なる哉とて之れを公に言上せしに、是れよりぞ犬頭絲と名づけ天皇御服の御料に供し奉るべき上絲は、三河國よりぞ奉られける、郡司後に妻の蠶が先に俄に悉く死せしは、妾の構へて殺したるものなることを知りたりける、是れを思ふに前世の宿業にこそ云々」此の物語今昔物語に參河とあれど何れの郡なるか明ならず只だ本郡に於て此の事を傳へ又犬頭神社と稱するあるを見れば何かの因緣あるにや與更に多し。

犬頭神社

（四）三河國三川の說

三河國の國名は、其の國内に、豐川、大平川、矢作川の三大川あるに據りて、名づけしものなりとするは、古來一般に傳ふるなり。古書には、參河と書くを以て最も通例とし又三川御川等と書けるものも少からず

三河名義の說には、寛文刊本職原抄首書に「參河國有三河、一曰豐川、二曰男川、三曰矢作川、男川者河上有山神白髮明神也、豐川者此河上有長者民屋豐饒故曰豐川、矢作川者日本武尊東征時於河邊多作矢故曰矢作川」とあり、古風土記の逸文とも疑はる。羽田氏の參河國古蹟考には内山氏國號考を引き、賀茂郡あれば賀茂の神の御川の義なりと論破す。卽ち矢作川の畔古の神社多し、神の御川と呼

びしが遂に國名の源をなせしものなるか。

三河國二葉松に三河の國名に關し三大河の說を擧げて曰く

或老翁曰三河の水源を考るに豐川は設樂郡の神田山の麓に出で八名郡の長篠村に合ひ寶飯郡の前芝村にて海に入矢作川は其源南は保殿に出で北の源は大多賀山の下に巡て黑岩にて合額田郡の西に出で旅豆郡にて海に入落也男川を扶士川とし大平川とする說をとるに大平川の源は額田郡北の上毛呂に出で南は宮崎に出で保母尾井平にて合ひ大平を流れ上六名に合ひ矢作川に合ひ海流れ落也

或人曰大平川を三河の中に入事信用し難し夫れ水は高原に出で北より西へ流るゝ是逆流と云ふべし、我壯歳より是を疑へり、諸人に尋問せしに不決之然るに或修業僧の曰けるは三つの川の中に男川とは男川のことにて其源加茂郡梅ヶ坪の上四郷花の本の邊より出で一流は花園の上竹村の邊より流れ出て二流池鯉鮒の上駒場邊にて合池鯉鮒と今岡の間にて東海路を横に南へ流れ小山高川熊村苅谷の西を流れ碧海の海に入る考るに豐川矢作川は順流なるに大平川の横に逆流を並べかぞへて三河とは云難し後考を待と云ふ再按するに國名風土記に三つの河あるに因て國の名とすると云へば下流短き逆流にては一國に並べかたかるべし當國の形容東の端に豐川あり中に矢作川あり西に男川あ

りて三流を紆とし經とすべし、矢作川第一の長流豐川次之男川次之川流の左右神社多く照臨ありて諸民永久に神恩を蒙りて安泰なり、河の字の人从衆流長脈の狀也、異國にて伊河洛を三川と云、されば其他國の川を合て三河とす、而るに三河國の名東西の中に一川宛貫き流れて草木五穀をうるをし、凡そ豐川と號する上に演る如く古川上に富貴の長者ありて子孫繁昌因之豐川と名くと也、矢作川は日本武尊東征より事起れり、或說にト、川元來アト川なり、大己貴命諸國を巡り玉ふ時御足の迹今諸州にあり、御足の迹池鯉鮒の野に有と云ふ、菅の清公の記に足迹をト、と訓す、彼是引考るに池鯉鮒の西に流る川を男川と云ふなるべし。

卽ち、此所に男川或はト、川と云ふは、今の逢妻川を指せること知るべきのみ。其の源は、加茂郡擧母、宮口の二所に發し、南下、駒場の南、知立の北に於て相逢ふ、右を男川と云ひ、左を女川と云ふ。是れより西し、泉田の南、小山の西に於て堺川に合し、南流衣ヶ浦に注ぐ、延長凡六里。上流男川は、古へ燕子花其の川邊に咲き、八橋を蜘蛛手に架け渡したりと云ふ、在原中將業平のから衣の歌の古蹟なり。又堺川は古くは妹川と呼べり、逢妻川の男川に對し更に妹川ありとなすものあり。參河の參字は後世に至り專三字を用ひ、又修して參州と云ふ。

第二章　方言

抑々方言なるものは、是れを嚴密に調査するに於ては、先づ其の語原を尋究し、次で其の地方に於ける一般發音、特に、音韻の調査をなし、又語の轉訛したる蹟を明にせざるべからず。斯くして調査を重ぬる時は相互に異りたる語原より出で、然も同一の事物を指せる言葉もあるべく。又同一の語原より出づるも音韻の都合及轉訛等により全く異りたる言葉をなすに至れるものも有るべし。されば是れが嚴密なる調査を爲すには極めて多くの困難を感じ亦勞力を要す。されど普通に方言と稱するは、所謂標準語に相違したるものゝ總てを云ふものにして、其の中には地方特有の熟したる方言もあるべく、嬰兒の片言の如き幼稚のものもあるべく、又誤謬を傳ふるものに至りては、蓋し其の數極めて多かるべし。

標準語とは如何なるものを云ふか、是れを定むるには又極めて多くの困難を感ずべし。世に方言矯正の聲高し。されど方言は方言にして其の地方に特有の立派なる言葉にして、矯正の餘地更になし。然るに此所に方言矯正と稱するは、單に所謂標準語に異りたるものを其の標準語に近づかしめんとするを云ふのみにして之れを詳しく云へば、誤謬を傳ふるものを速に矯正せんとするの謂ひに歸す。

本章に載する方言は、先に當教育會に於て詳細調査したるものにして、多くは郡内各地よりの通告を其儘に記入したるものなりとす。初めに是れを品詞に分ちて掲げ、次に動詞形容詞助動詞等の活用形の一般を示し、又次に時と法との言ひ表はし方を區分して之れを示し、其の他待遇上の言葉、語詞の組立、方言分類、等を掲げたり。總て漢字を以て書き、其の下に平假名にて標準語と見るべきものを記し、又其の下に標準語に異なる可及的多くの言葉を記入することゝせり。動詞、形容詞、助動詞、等の活用形、及時、法、等の部に於ては上段に其の標準と見るべきものを記し、其の下段に此の地方特異のものを掲げたり。品詞の部に於て平假名にて標準語と見るべきものを擧げざるものあるは、此の本郡の内にても多種多樣に云ひ、何れを以て普通のものとなして然るべきか見別の付け難きものなりとす。

第一節　名詞之部

第一　天文、地理、地文に關する名稱

一天體	
太陽	ニチレンサン、コンニチサン、オテントウサン、オヒサン、ニチリンサン
月	ガチリンナン、オツキサン
つき	

星	ほし	オホッサン、オホッツアン
宵明星	よいのみようじやう	ヨイノミヨージン
暁明星	あけのみようじやう	ヨアケノミヨージン
二　暦　時		
夕方	ばん	バンゲ、バンゲシマ
終日		ヒイテ、イチンチ
夜	よる	ヨーサ、ヨーマ、ヨーサリ
夜業		ヨーナビ
夢	ゆめ	イ　メ
通夜	つうや	ヨワカシ
昨日	きのふ	キンノ、キンニョー、キニョー
一昨日	おとつい	オトトイ、オトテー
一昨々日	さきおとつい	サキオト、イ、サキオトテー
昨晩		ユーベ、ユンベ、キニョーノバン
一昨晩		オト、イノバン
一昨々晩		サキオト、イノバン
明日	あす	アシタ
明後日	あさつて	アサッテ
明後々日		シガアサッテ、サ、ッテ
晦日	みそか	ツゴモ
大晦日	おーみそか	オーツモゴ、オーツゴモ
一昨年		オトトシ、オトテシ、オトトイシ
明年	らいねん	ライレン、ミヤウネン
明後年	さらいねん	サライレン
暦	こゆみ	コイミ
閏年	うるうどし	ウルウ
三　方　位		
南	みなみ	イナミ
東南		オキ、タツミ、ヒガシミナミ
東北		ベットウ、ヒガシキタ
西北		イヌキ、ニシキタ
西南		イセジ、ニシミナミ
四　氣　象		
東風		ココチ（舟人）

東南風	コ　チ(舟人)
東北風	ペットーカゼ
西南風	マ　ゼ
西北風	ダ　シ(舟人)
南風	イナサ(舟人)、マエカゼ
北風	きたかぜ	キタッポ(舟人)
無風	ナ　ギ
旋風	マイマイカゼ、
颶風	オーカゼ
吹雪	ふゝき	フキマハシ
暴風雨	シケ、ハヤテ
晴天	ジョーテンキ、オテンキ
露	つゆ	ツ　イ(子供)
鱗雲	イワシグモ
雷	かみなり	ヨーダチ、ゴロゴロサン(子供)
時雨	しぐれ	ザ　ン　ザ
五月雨	さみだれ	シ　ク

梅雨	つゆ	シ　ク
霧雨	シケ、ケサメ
夕立	ヨーダチ、イナヅマ、イナビカリ
虹	に　じ	ネ　ジ
雨垂	あまだれ	アマザレ、アマザリ
雫	しずく	シズ　コ
霜柱	タチゴーリ
霙	みぞれ	ゼシヨレ、シグレ
五地理	
田	た	タ　ン　ボ
地の傾斜面	ドテ、
峯	みね	ム　ネ
山巓	テツペン、テンペイ、テツペイ
野面	トオモ、
林	ヤ　マ
土	ド　ロ
土塊	ツチダングリ、ツチコロ、ツチクレ

泥	どろ	ベト
丘		ボタ
大道		オーカン
小路		セコミチ
四辻	よつゝじ	ヨツ、モジ、ヨツカド、ヨツモジ
三叉路		ミツ、モジ、ミツモジ、ミツマタ
境	さかい	シヨ（子供）
潮	うしを	ソコリ
干潟		ハマ、ハマケ、ウミベタ
海岸		テンボサキ
波止場	はとば	グテ
沮洳		カーラ
磧	かわら	ドテ、テーボ
堤防	つゝみ	カハベタ、カシ
河岸		ス
中洲		ヨドミ、ミホ、ミヨ
淀	す	

渦巻	わたし	ギリ
渡船場	ほり	ドバ、ワタシバ
堀		ホーレ、ドンボチ
溝	みぞ	イミゾ、エメゾ
下水		ド　ブ
地震	ぢしん	リシン

第二　博物に關する名稱

一　獸類

獸	けもの	ケダモノ、チクショウ
蠶		カンラグ
尾	を	オッポ、シリッポ、オンボ
蹄	ひづめ	ツメ、カッポン（子供）
馬	うま	ドードー、ヒンヒン（共ニ子供）
牡馬		オンタウマ
牝馬		メンタウマ
小牛		コボー、ウシノコ

猪	ゐのしゝ　シシ
狸	たぬき　タノキ
狐	きつね　ケツネ、コンコン
猿	さる　エテモン、イテモン、エテ
犬	いぬ　ワンワン(子供)　ヂイヌ
和犬	トーケン、カメ
洋犬	イヌコロ
犬の子	ウ　サ
兎	うさぎ
猫	ねこ　ニヤーニヤー(子供)
鼠	ねずみ　ネズ、チューチュー、ネラ
二十日鼠	はつかねずみ　ホッポコ
田鼠	むぐらもち　オグラモチ

二　鳥　類

鳥	とり　トート(子供)
翼	はがい　ハゴイ、ハネ
烏	からす　カーカー(子供)

鳶	とび　トンビ、ノスリ
白鷺	しらさぎ　サ　ギ
五位鷺	ごゐさぎ　ゴ　イ
梟	ふくろ　ゴロスケ
山鳩	キジバト
燕	つばめ　ツバクラ、ツバクロ
雀	すゞめ　チューチュー(小供)
鶯	うぐひす　オグイス
鷄	にはとり　トート(子供)
雛	ひよこ　ヒ　ナ
家鴨	あひる　ガーガ(子供)、アヒ
雌	めす　メンツ、メンタ、メン
雄	をす　オンツ、オンタ、オン

三　魚貝類

魚	うを　サカナ、イヲ、トト(子供)
鰓	えら　エギ、エゲ
鰭	ひれ　ヒ　ロ　レ

蟲類

鱗　うろこ　コケラ
貝殼　かひがら　カイギラ
小魚　コマカモノ、ザコ
鰹節　かつをぶし　カツブシ
蟹　かに　ガニ
小鰻　メソ、ビリ、ハリメソ、メンバチゴ、ロプセン、フセンゴ、ウケス
目高　めだか　メダシコ
鮹　どぢやう　ジヨジヨ
蜆　しじみ　ヒジメ
田螺　たにし　ツボ、ツボドン

四蟲類

蟲　むし　ムシケラ
蛇　へび　クチナワ
蝸牛　かたつむり　デンデンムシ、ネギロ、メーメー
蛞蝓　なめくじ　メンクジ、マメクジ、メメクジ
毛蟲　むかで　オコジ、オコゼ、ケムシ、ムカゼ
蜈蚣

蛙　かへる　ガイロ、ガイタ、カワズ、ゲイロ
蚪斗　ひる　ダマグツ、チョンゴロ、アクチョン、グイラゴ、ククチヤテゴ、ドングツ、ゲーラフグ、ボデグワン、フグタマ
蛭　とんぼ　ヘーロ、ヘータ
蜻蛉　せみ　ドンボ
蟬　はち　セビ
蜂　こほろぎ　ハッチ
蟋蟀　みゝず　オカマギス、ホーロギス、コーロギス、ホロホロ、オコロ
蚯蚓　くらげ　メゝズ、メメタ
海月　ニウ
機織蟲　ほたる　ハタオリギツチョ、オサイ、オサン
螢　かげろー　ホタロ、ホタイロ、カツポン
蜉蝣　ぼうふり　プイ
子子　はい　ボーブラ、ボーフラ
蠅　くも　ハイブンブン
蜘蛛　あり　グモ
蟻　アリンボ、アリボ、アリンド

鹽斯		キッチョ、ギス
	五穀類	
陸稻	おかぼ	オカブ
中稻	なかて	ナカ
晩稻	おくて	オク
糠	ぬか	コヌカ
麥藁	むぎわら	ムギカラ
蜀黍	もろこし	トーノキビ、ケンセイ
玉蜀黍	とうもろこし	コーライ、カラトーナンバ、ナンバトー、トーカラ
小豆	あづき	アツキ
大角豆	さゝげ	ササギ
蠶豆	そらまめ	トーマメ
粳		ウルシ、モチ
	六菜蔬	
野菜類		センザイモノ
大根	だいこん	タイコ、デーコ、ターコ
人參	にんじん	ネンジン
牛蒡	ごぼう	ゴンボ
蕪菁	かぶら	カブ
菜	な	ナツバ
冬瓜	とうぐわ	トーガン
夕顔	ゆふがほ	ユーゴン
茄子	なす	ナスビ
胡瓜	きうり	キューリ
葱	ねぎ	ネブカ
馬鈴薯	じやがたらいも	ジャガイモ
自然生(山ノ芋)		ジネンジョ、トロロイモ
佛掌薯		ツクネイモ、テコイモ、トロロイモ
芋の莖		イモガラ、ズイキ
慈姑	くわゐ	クワエ、グウエ
零餘子		カシヨイモ、イガゴ
蓍椒	たうがらし	ナンバ、トンガラシ
薹		トー
紫蘇	しそ	シソー、チソー

菌	きのこ	ハツタケ
	七果實	
果物	くだもの	クダモン
枇杷	びは	ビヤ
柿の蔕		カキノジク
柿の澁		シブ
毬彙		ガンタチ、イガ、トゲ
柘榴	ざくろ	ジヤクロ
蜜柑	みかん	ニカン
柚	ゆず	イズ
櫻の實	さくらのみ	サクランボー
橡の實		トチボロ、トチダングリ
南天	なんてん	ナリテン、ナルテン
	八草木	
棟		センダ
花蕚		ジクシ
花冠		ハナビラ、ハナベラ

葉柄		ジクシ
秣		カブツ
紫雲英	れんげそう	エマシバナ、ゲンゲ、オシヤカバナ
月見草	つきみさう	ヤシヤコラバナ
藻	も	ゴモク、モク
	九鑛石	
浮石	かるいし	アワイシ
砥		トイシ、ト
粘土	はに	ハネツチ、ネバツチ、ハツト、ネツト
硫黄	ゆをー	ユーオ
石油	せきゆ	セキタン
粘土に小砂ある物		サバツチ、サバ
礫		イシナ、イシコロ
	第三　人倫に關する名稱	
	一	
曾祖父		オージーサン、オージジ

曾祖母		オーバーサン、オーバヾ
祖父		オジーサン、ヂヾ、ヂヾイ、ヂサマ、
祖母		オバーサン、バヾ、バヾア、バサマ、
父		オトウサン、オトッツアン、オヤジ、ターサン、ターター(小兒)
母		オカアサン、カカサン、カーカ(小兒)、オッカア、オフクロ
伯叔父		オッツアン、オヂゴ、オヂキ　ヂーヤ
伯叔母		オバゴ、オバサン　バーヤ
繼父母		マヽオヤ
兄	あに	ニー、アニサン、アニゴ、アニキ
兄妻		アネサン、アニヨメ
弟	おとうと	オトヽ
夫の弟		コジュート
姉	あね	アネサン、アネー、ネー、ネーサン
妹	いもうと	イモト
夫の妹		コジュート
兄弟	きょーだい	キョーデー
姉妹		キョーデー
異母兄弟		ママキョーダイ
異母姉妹		ママキョーダイ
玄孫		ヤシラヤ、ヤシャラゴ
夫		ダンナ、トッサ、ヤド
妻		カカア、カカサ、カヽ
入夫		ヨーシ
養子		ムライゴ(幼少の時他家に養はれしもの)

二人品

女		ヲンナ、オンナゴ、ビーック、ビータ
男兒		ボー
女兒		ビー
乳兒	ちのみご	アカゴ、アカンボヽアカ
産婆	さんば	トヤゲバヾー、トヤゲババサ
乳母	うば	ママサ、ママー
子守	こもり	モーリ
私生兒		シクジリゴ、ホッタゴ、テテナシゴ

鰥寡		オトコヤゴメ、オトコゴケ
隱居		ヤゴメ、ゴケ
主人		インキョー
主婦		オヤカタ、オダンナ
若主人		ゴツサン、ゴシンゾ、オカミサン
若主婦		ワカダンナ、ニーサン
若き男		ワカヨメゴ
丁稚		ワカイシュー
瓦屋の小僧		コゾー
下男		ホチ、ヤロウ
下女	じよちゆー	オトコシュー、オカシラ、ワカイシュ
嬰兒		オンナゴシュー
坊主	おぼさん	ヤヤコ
梵妻		ボンサン、ボーズ、オボサン、オテラサン
神主	かんぬし	オクリサン、オダイコク
巫子	みこ	ネギドン、ネギサン
		ミコドン
賣卜者		ハツケミ
賣春婦		モカ、ヤシヤコラ、インバイ
妾		メカケ、テカケ
藝妓		ゲーシヤ、ゲーコ
酌婦		テンレツ、カンツ
娼妓		オヤマ、オイラン
情夫		ナジミ、イロオトコ
情婦		ナジミ、イロオンナ
角兵衛獅子	エチゴジシ	カジマジシ、トリカグラ
相撲	すまふ	スモトリ
左官	さかん	シヤカン
紺屋		コオヤ
獵師		テッポウチ
漁夫		リョーシ、ボン、ボンツク
農夫		ヒヤクショ
消防夫	しようぼうふ	ショーボウ
巡査	じゆんさ	ヲマワリサン

探偵	イヌ
たんてい	ドロボー、ヌスト
盗賊	ムシヨ、ヤキバ、ビヨーシヨ、デンデ
たうぞく	コジキ
火葬場	オセハニン、ナコドニン、ナコウド
乞食	ヒトヤ、セワヤキ
仲人	チャリ、ヒヨーヒヤクモノ
廃庵	オーチャクモノ
おどけもの（滑稽者）	トンテキ
なまけもの	ドザエモン
おてんば（御轉婆）	ヤクザ、ゴクドー、ドーラクモノ
溺死者	タワケ、アンポン
放蕩者	ヒエジリ、ヘボ
馬鹿者	イキスギ、オーチャクモノ
臆病者	ケチンボー、オシンボチ
生意氣者	
吝嗇者	

第四　身體に關する名稱

一　頭部

顱門	ペコペコ、
額	スタイグチ
したい	ビンチヨ
鬢	
びん	
月代	ギリギリ、マイマイ、イヂグリ、イジ
さかやき	メケン
旋毛	デスコ、オデコ
つむじ	クビタマ
眉間	ボンノクビ、ボーノクビ
みけん	ミミタボ、ミミタンボ
突額	ホオタ、ホッペタ
首	エコボ
くび	ヤブニラメ、ヤブニラミ、ヤブネラミ
頸窩	スガメ
ぼんのくぼ	ホトケ、ホトケサマ
耳垂	マイゲ、マイメ
頬	
ほほ	
靨	
えくぼ	
斜眼	
眇	
瞳孔	
眉毛	
まゆげ	

鼾	ヒビキ
舌	シタビラ、ベロ
唇	クチビラ
咽喉佛	ノドチンボー
突齒	デツバ、ソツバ
顎	アゴ
揉上	ハエサガリ

二　胸腹部

身體	カラダ、カラド
皮膚	カワ
背	セナカ
腹	オナカ
脇	ヒヤクヒロ、ハラバタ
肋骨	アガラボネ
尻	ケツ
臀部	ヘツ、シリコベタ
肛門	ケツノアナ、シリノアナ

生殖器(男)	チンボ、ヘノコ、マラ、チンチン(小兒)
生殖器(女)	オマンコ、オベンチョ、オチヤコ、ボボ

三　四肢

拳	ゲンコ、ニギリコボシ、ゲンコツ
指	イビ、ユビ、ヒトサシイビ、ナカイビ、ベニサシイビ、コイビ
手足の指の名稱	モモタ、モモネ
股	ムネヅタ、ムコヅネ
脛	ボンボン、ヒザボーズ、ヒザブシ、オサラ
膝蓋	アクト、アグト
踵	ツチツカズ
土踏まず	グリグリ、クリコボシ
踝	メクソ

四　排泄物

眼脂	ハナダラ、ハナミズ、ハナ
鼻汁	ミミクソ
耳垢	ツバ
唾液	

涎	よだれ
尿	ヨード
糞	くそ
屁	ション|ベ、ション|ベン、シーコ(幼兒)、ション|スイ
月經	へ
吐瀉	つきやく

五　疾病

病氣	ウンコ(幼兒)、ババ、チョーズ、
藥	オナラ
癩病	ブンヤ、サワリ
風邪	ヘド、ゲロ、ヘンド、ゲンゲ(幼兒)
腋臭	ワズライ、ヤマイ、アンバイ、グワイ
鞍	オックー(幼兒)
吃	カツタイボー、ナリンボ、カツタイ
啞	ガイキ、カゼ
聾	エークサイ、ネブカハラ
偏盲	アカギリ、アカギレ
跛	ドモ、ドモリ
佝僂	オーシ
白痴	ツンボ、ツンコ
氣狂	ガンチ
嚏	チンコ、チンバ
瘁	ネコゼナカ、セムシ
痘痕	タワケ
禿頭	キチガイ
黑子	ハクション、ハクション
瘤	メッタ、イモ
面皰	ヤカン
	クスベ
	イロベ、イロボロ

第五　衣食住に關する名稱

一　服飾物

着物	キリモノ、キモロ、キモン、キリモン、ベエ(小兒)
美衣	トットキ、イッチョーローソク
常衣	サシデ

紋服	モンツキ
襦袢	ジバン
單衣	ハダキ、フワ
綿入	ノノコ
法被	カンバン
筒袖	ツツボ、ツツボコ
頭巾	ズツキン
前垂	マイカケ
湯卷	イマジ
脚絆	ハバキ
紐	ヒボ
袂	タンモ（幼兒）
裾	ソソ
兵兒帶	サンジャク、サンシャクオビ
袖無	デンチ、デンチコ
襁褓	シメシ、オシメ
襁褓	ボソコ、ツヅリ

手拭	テノゴ、テノゴイ
風呂敷	フルシキ
紅	ベン
鐵漿	オハグロ
草履	ジョーリ
草鞋	ワロジ
足駄	タカゲタ、ボクリ
雪駄	セキダ
爪皮	ハナカワ
下駄の緒	ゲタノハナオ、ゲタノヨコオ
麻裏	フジクラ

二　家屋

納屋	コーエン、コンエ
塵捨場	ゴンズリバ、ゴンズイバ
敷居	シキ
欄干	ランカ
蓆	ミシロ

臺所	だいどころ
便所	キタダ、ダイドコ
便器	ヘッチンバ、ヘッチン、チョーズバ
	オカワ、オマル
玄關	げんかん
地鎭	ゲンカ
客間	ドーヅキ、ヂヅキ
	デ　ー
心張棒	シンダツ、シンザシ
さる（棧）	ネコ、オトシ
井戸側	イドツ、イドコイ
庭園	ツボノウチ、ツキヤマ
泉水	スワマ

三　家具武器

掛軸	カケジ
剃刀	カミスリ、ソリ、ナメボウ
	デ　バ
小刀	ケサン、テサン
文鎭	
分銅	ほーちょー
庖丁	
摺木	れんぎ
摺鉢	
飯櫃	
小皿	
德利	とくり
竈	かまど
涼爐	
薪	たきゞ
爐	
灰	
灰掻	
十能	じゅーのう
烟	けむり
炬燵	こたつ
水瓶	みずがめ
	ドキチン、ドビチン
	ホーチョン
	スリコギ、スリコゲ
	スリバチ
	オハチ、オヒツ
	テシヲ、テシヨ
	トックリ
	クド、ユリ
	ヒチリン、コンロ
	タキモン、マキ
	モエキジ、モエキジリ
	ヘ　ー
	ヘーカキ
	シューノ
	ケブリ
	バンコ、ツミバン、アンカ
	ハント、ハンドカメ

柄杓	ひしやく
片手桶	シヤーク、フシヤク
布巾	ふきん
箒	テンボ
はたき	フキノ
笊	ほゝき
桝	ホキ
灰吹	ざる
煙管	サイハライ、ザイ、ザイハライ
行燈	きせる
燈心	イカキ、イカケ、カゴ、フゴ
提灯	とうしん
雨天傘	ちようちん
脚立	マース
	きやたつ
	ヘーフキ
	キセロ
飯	アンドー、アンドン
朝食	ちやのこ
	トースミ
	バイバイ(幼兒)
	テリフリ
	ケタツ
	ママ、ゴハン、マンマ
	チヤノコ

四飲食

間食(午前)	あさめし
牡丹餅	ぼたもち
燒餅	アサメシ、アサハン
	ボタモチ、オハギ
間食(午後)	ひるめし
夕食	ゆうめし
赤飯	こはめし
握飯	にぎりめし
粥	かゆ
雜炊	ぞうすい
餅	もち
麥粉	
菜	さい
吸物	すひもの
味噌汁	
香の物	
澤庵	
乾大根	
	オカチン、カチン
	ゴセハン、ユーザケ、ヨーザケ
	ヨーメシ
	オコハ
	ニギリコ
	オカイ
	オジヤ
	ボチ
	コーセン
	オカヅ、オカズ
	スイモン
	オツケ
	コーコ
	コーコ、ツケモン
	ツルクシ、ツルクシダイコ

鹽　シヨ
濁酒　ドブロク
湯　ブー
水　ブー
肉　ミ

第六　神佛人事に關する名稱

一　神佛

神社　おみや　オミヤ
祠殿　オドー
鳥居　とりゐ　トリエ
佛　ほとけ　ノノサン、ノンノ（共ニ小兒）、オシヨロイサン、オシヨロイサマ
精靈　オシヨーイ、カイミヨウ
位牌　いはい　トーバ
卒塔婆　そとーば
結納　ゆいのう　イーノー

二　慶弔

里開　ハツキャク、サトクダリ、シンキャク
帶祝　オビナホシ
岩田帶　ハラオビ
葬式　そうしき　ソーレン
忌服　いみ　ユミ
幽靈　ユーレン
棺　くわん　カンオケ
卜筮　オミクジ

三　歌舞音樂

三味線　さみせん　シヤムセン
大鼓　たいこ　デンデン（小供）
面　メンノー
淨瑠璃　じよーるり　ジヨーロリ
祭文　さいもん　サエモン
浮れ節　うかれぶし　チヨンガリ

四　遊戲娛樂

鬼ごつこ　オニゴッチヤ

戰遊び　イクサゴッチヤ
姉樣ごと　ママゴッチヤ
競走　ハシリゴッチヤ
片足飛　チンギリ、チンガリ
竹馬　アシボク、ユキボク
獨樂　ゴマ
人形　オボコ
御手玉　オジヤミ、オヒロイ
花合　ハナヨセ

第七　殖産工業に關する名稱

農事

一　農事

杷　コマサラ
熊手　クマゼ
磑　トーウス
篩類　ヨロゲ、スイノ、トージ、フグイ
舂類　イチコ、ビクヘ、モツコ

漁獵

二　漁獵

俵　タワラ
收穫　アキ
案山子　ソメ
蛹　ドチ、ドツチ
繭　マイ
流網　マチアミ、ノドアミ
餌　エサ
穐　モチ、モツチ

商賣

三　商賣

問屋　トンヤ
魚市場　ヤツチャバ
紙幣入　カミイレ
猪牙　チヨコ
荷馬車　ウンソー

第八　運輸交通に關する名稱

人力車	リンリキ
轅	カジボ

第九　雜

黄	キナイ、キイナイ
萠黄	モヨギ
過失	アイマチ、ヤリソコナイ、シクジリ
私生子	シクジリゴ
惡戯	ワヤク、ワニク
富家	ダンナシユ
追從	オベツカ、オテタリ
湯屋	ダンダ(幼兒)
肩車	テングルマ
肥瓶	ドンガメ
肥槽	シヨンボケ
檣鐘	ハンショ
惠比須講	エベスコ

松の落葉	ゴ
人間	にんげん	ニンゲ
稻村	スズミ
はんかちーふ	ハンケチ、ハンケツ、ハンカチ
入物	いれもの	イレモン

第二節　代名詞

私	オレ	ワシ(男)
	オレ	ワタシ(女)
	ワシ	ワタシ、オレ、オラア(子供)
私等	オレガトオ	オラガトオ(男)
	ワシガトオ	ワシラガトオ(女)
汝	オンシ	テメエ、テマヘ、キサン、ウヌ(男)
	アンタ	オマハン、オマヘサン(女)
汝等	オンシラ	オンシガトオ、テマヘガトオ、キサンタチ、テメエラ(男)
	キサマラ	キサンラ、オマヘサンタチ、アンタガトオ、オマハンガトオ(女)
彼	アイツ	アレ、ヤツ

彼等	アイツラ、アイツラガトオ(男) アレガトオ アレントオ(女)
これ	コイツ
それ	ソイツ
あれ	アイツ、カイツ、
どれ	ドイツ
そこ	ホコ
あそこ	アスコ
こちら	コッチ、コッチヤ
そちら	ソッチ、ソッチヤ
あちら	アッチ、アッチヤ
どちら	ドッチ、ドッチヤ

第三節　數詞

一つ	ヒトツ
二つ	フタアツ
第一番	チヨキ、チョツサキ、ショキ
一回づゝ	ヒトツヅツ
半分	ハンブン
四分一	ヨツイチ
二倍	バイ

第四節　形容詞

大きい	オホきい
小さい	ちいさい
強い(氣性)	つよい
弱い(氣性)	よはい
弱い(器具)	ヤダイ、グスイ
善い	よい
惡い	わるい
鈍い	エエ、イイ
新らしい	あたらしい
久しい	ひさしい
重たい	おもたい

小さい	イカイ
強い(氣性)	チャッポイ、チイコイ、チイセイ
弱い(氣性)	エライ、キツイ
弱い(器具)	ヘボイ、ベボ
善い	ヤダイ、グスイ
惡い	エエ、イイ
鈍い	ワリイ、イカン
新らしい	トロイ、トロクサイ
久しい	アラス、シンキ、アラ
重たい	ヤアツト、
	オモテエ、オモタイ

長い	ながい	ミジケエ
短い	みぢかい	イガミ、エガミ、マガル
ゆがみ		エゴビツ
いびつ		
早い	はやい	ノロイ、チョロイ
遲い	おそい	セバイ
狹い	せまい	ヨケエ、タント、ギューサン、イカイ、タクサン
多い	おほい	チョビント、チョビツト、スクネエ、チイト
尠い	すくない	アッツイ
厚い	あつい	
濃い	こい	ウツスイ、ウスウイ
薄い	うすい	ヒヅルイ
まぶしい(眩)		イキリアッツイ
蒸暑い	むしあつい	アッツイ
暑い	あつい	サブイ
寒い	さむい	ヌクトイ、アツタカイ
暖い	あたゝかい	
冷い		ツベタイ、ツメタイ、ヒヤッコイ
生溫い		ナマヌルイ
鹽辛い	しをからい	シヨカライ
痛い	いたい	イツタイ、イツテイ
痒い	かやい	カヤイ、カエエ
饑い		ヒダルイ
危い		アブネエ、アブナイ、アムネイ、アムナイ
凄い	すごい	オソゲエ、オソガイ
甚い		バカニ
怪しい		オカシイ、クサイ
美しい	うらやましい	ケナルイ
惜しい	おしい	ホシイ
可笑しい	おかしい	ヘンテコ
寂しい	さみしい	サブシイ
安い	やすい	ヤツスイ
易い		ワケナイ、ワキャアナイ
忙しい		ヤカマシイ、イソカシイ

忌々しい　いまいましい　エマエマシイ、ゴオガワク
痛々しい　シヨオレナ、ヒドイ
くど〳〵しい　ヒツコイ、ヤカマシイ
みすぼらしい　ピンボクテイ、シヨンボロクチエ
見ともない　ミツトモネエ、ヒトメガワルイ
譯ない　ワキヤアナイ、ワキアネエ
粗末な　ツマラン
空洞な　カランポナ、シシカラ
睡むたい　ネブテエ、ネブタイ
煙たい　ケブタイ、ケブテエ
くすぐつたい　コソベタイ、コソベツタイ
平たい　ヒラクタイ、ヒラクテエ
細かい　コマケエ、ホソイ
柔かい　ヤワラケエ、ヤワコイ、ヤワイ

第五節　動詞

赤む　アカラム

あぐらかく（安座）　アングラカス
あせる（焦心）　セク、アハテル
遊ぶ　あそぶ　アスブ
暖める　あたゝめる　スクトメル
侮る　あなどる　ヤシメル、コミヤル
堀る　ほる　ホジクル
あふのく　あアヌク
過る　あやまる　シクジル
露はれる　あらはれる　バレル
青ざめる　アヲシヤブレル
戴く　いたゞく　イナダク
いぢめる（窘）　オガラセル
威張る　いばる　エバル、リキム
責める　せめる　アブラヲトル
言ふ　いふ　コク、ヌカス
入れる　エレル
動く　イゴク、イノク

うつむく(俯)	ウツブク
うなされる(呻吟)	ウムサレル
羨やむ	ケナルガル
植える	うえる	イエル
おどける(戯謔)	チョオケル
臆する	オソガガル、オヂケル
威どす	おどす	オドラカス
驚く	おどろく	オドケル
覆ふ	おほふ	カブセル
追ふ	おふ	ボフ
屈む	かがむ	シャガム、ショーヅクナル
噛じる	かじる	ケシル
傾ける	かたむける	カタゲル
返す	かへす	カヤス
かへす(孵化)		カイワラカス、カイワル
からかふ(調戯)		イセクレル
乾く	かはく	ハシヤグ

消える	きへる	ケエル
消す	けす	ケヤス、キヤス
燻ふる	いぶる	エブル、イブル
けなす(貶)		ヘコナス、クザス、コナス、バカニセル
焦がす	こがす	コガラカス
凍える	こゞえる	ハジカム、カジカム
拵へる	こしらへる	コシレル、コサエル
こはれる(壊)		コハケル、クズレル、クズケル
こはす		コハラカス、クズス
轉ぶ	ころぶ	ドンゲル
裂く	さく	ヒキシャク
刺す	さす	クスゲル
冷ます	さます	サマラカス
叱る	しかる	ヒカル
沈む	しずむ	スゴム
しなびる(萎)		シイナビル
賺す		チョオラカス、スカス

捨てる	フテル、フチヤル
濟ます　すます	スマカス
背負ふ	ショコナフ、ショウ
せびる（强請）	グズル、ネダル
濯く	イスグ、エスグ
剃る	スル、ナメル
燃く　そる　やく	クベル、モヤス
抱く	ダカエル、ダク
崇る	トイツク、トリツク
倒れる　たゝる　たふれる	コロブ
弛む　ゆるむ	ダルム
縮まる　ちぢまる	チヂクナル、チヂカム
縮める　ちゞめる	チヂマカス
散る　ちる	チラカル
繕ふ　つくろふ	ソソクル
潰れる　つぶれる	ツブレル
潰す　つぶす	シヤアカラカス

吊るす　つるす	ツルクス、ブルケル、ブランサゲル、ブルクル
研く　みがく	ニガク、トグ
溶かす　とかす	トカラカス、トロカス
撫でる　なでる	ナゼル、ナゼクル
なぶる（嘲弄）	ヒヤカス、オヒヤラカス
宵める　なめる	シヤブル、ナメクル
投げる　なげる	ホオカル、ホカル
毆ぐる　なぐる	ドオヅク、クラワセル、ブツ
匂ふ　にをふ	ニヨオ
荷ふ　になふ	イナウ
脱ぐ　ぬぐ	ノグ
塗る　ぬる	ヌルクル
狙ふ　ねらふ	ネツラウ
伸ばす　のばす	ノバラカス
這入る　はいる	ヘイル
減らす　へらす	ヘビル、ヘラカス
跨ぐ	アゴム、アンゴム

實る	イロム
毟しる	ミシル
結ぶ	ヌスブ
縋れる	モチカナル
貰ふ	ムラウ
讓る	イズル
譲る	アヤマル
託る	イグル
刎ぐる	オソヘル
教へる	ケツカル
居る	
最早	モオハヤ、モーハイ
既に	イツカア、イツツカ、トウニ
始終	シイジユー
直ぐに	ツイデニ、スグニ
まだ	マンダ

第六節　副詞

ちよつと	チョコツト
度々	コンキト
上に	イエニ
下に	ヒタニ
したに	スマニ
隅に	サカシマニ、サカサマニ
すみに	アベコベニ、サカシマ、アチラコチラ
倒に	ドツケツ、ベト、ドンゲツ
反對に	ホボカ、ホボコ
一番終に	チョツキリ
方々	ソゲニ、ソウ
丁度	タイゲ、タイガイ
左程に	ヒヨツト
およそ	イケンカ、ドゲンカ
若し	ムロン、モロン
定めし	テエレエ
勿論	モダニ
叮嚀	
ていねい	
無駄に	

法外に　トテモネエ
矢張　やはり　ヤツパリ
何故　なぜ　ナアゼ、ドオユウモンデ
態々　わざわざ　オナニ、タイダイ、オナサラ

第七節　接續詞

若くは　ホイデナキヤア、ソイデナキヤア
けれども　ケンド、ケド
さりながら　ソオダケレド
それゆゑ　ソイダデ、ソレダデ
それだから　ソイダモンダカラ、ソイダモンダン

第八節　助辭

一　はをのに等の他の語詞に附屬して融合變化したりと

は　思はるゝもの　イツチヤアコマル
て　行つては困る　コレジアアブナイ
は　是では危い　ワタシヤイカナイ
を　鳥を捕る　トリヨトル
の　私の處　ワタシントコロ
に　山に登つた　ヤマンノボツタ

二　がの等の從來の用語と異るもの

が　菓子が食べたい　菓子を喰ベタイ
の　わたくしの家では　オラガ家デハ
の　蚊の食ふ　蚊ガ食フ

三　天爾遠波を用ゐずして言ひあらはしたるもの

下駄を買つた　下駄買つた
酒を買つて來い　酒買つて來い
飯を食ふ　飯食ふ

四　無意味なるもの

は　此ノ本ヲばは買フ
ば　此ノ筆ヲばか買フ
さ　僕カさ本

動詞形容詞の活用形

第九節　動詞形容詞の活用形

一　四段活用　連用形

押さへる　押シケル
投げつける　ブツケル

二　上二段活用　終止形　連體形

起くる時　オキル時
綻ぶ　ホコロビル
綻ぶる折　ホコロビル折
報ゆる　報イル
懲るゝ時　コリル時

三　下二段活用　終止形　連體形　連用形

助くる人　助ケル人
捨つる時　捨テル時
考ふる場合　考ヘル場合
覺ゆる事　覺エル事
枯る　枯レル
枯るる　枯レル
植う　ウエル
植うる處　ウエルトコロ
任せて　任シテ

四　變格活用　終止形　連體形　連用形

爲る　セル
死ぬる日　死ヌ日
死に絶ゆ　死ニタエル

助動詞の活用形

第十節　助動詞の活用形

一　る　らる　終止形　連體形

打たる　打タレル
打たるゝ時　打タレル時
捨てらる　捨テラレル
捨てらるゝ時　捨テラレル時

二　す　さす　終止形　連體形　連用形

打たす　打タセル

打たする時　打タセル時
着さす　着サセル
着さする時　着サセル時
袰させて　袰サシテ

三　せらる　させらる　終止形　連體形　連用形

打たせらる　打タセラレル
打たせらるゝ時　打タセラレル時
受けさせらる　受ケサセラレル
受けさせらるゝ人　受ケサセラレル人
お休みなさいませ　オ休ミヤス

第十一節　時法等の言ひあらはし方

一　過去の言ひあらはし方

落ちた　落シタ
寂しうございました　寂シウゴザンシタ

二　未來の言ひあらはし方

讀まう　讀マアズン

時、法等の言ひあらはし方

未來

蹴よう　蹴ラアズン
起きよう　起キラアズン
來よう　來ウ
爲よう　爲イズン
有らう　有ラズ
寒からう　寒カラズ
暑うございませう　暑カラア

三　已了の言ひあらはし方

已了

食つた　食ッチヤッタ
食つてしまつた
枯れた　枯レチヤッタ
枯れてしまつた

四　繼續の言ひあらはし方

繼續

見てゐる　見トル
爲てゐる　爲トル

五　受動の言ひあらはし方

受動

勝たれる　勝テル

見られる　見レル
案じられる　案ジレル

使役

六　使役の言ひあらはし方

煮させる　煮ラセル
受けさせる　受ケラセル

打消

七　打消の言ひあらはし方

押さない　押シヤセン　押シヤヘン
着ない　着ヤセン　着ヤヘン
起きない　起キヤセン　起キヤヘシ
枯れない　枯ヤセン　枯ヤヘン
來ない　來ヤセン　來ヤヘン
爲ない　爲ヤセン　爲ヤヘン
死なない　死ニヤセン　死ニヤヘン
有りません　有リヤセン　有リヤヘン

疑念反言

八　疑念　反語の言ひあらはし方

死ぬかしら　死ヌカシラン
惡いかしら　惡イカシラン

推量臆想

出來ますかしら　出來マスカシラン
有るものか　有ルモンカ
苦しいものか　苦シイモンカ
出來るものですか　出來ルモンカ
飲めるものか　飲メルモンカ

九　推量　想像の言ひあらはし方

死んだらう　死ンダズラ
暑からう　暑イズラ
落ちまい　落メエ
爲まい　セメエ
出來ますまい　出來ンダラア

條件理由

十　條件　理由の言ひあらはし方

善ければ　善キニヤア
來ると　來ルトサカイ
死ぬと　死ヌトサカイ
凉しいと　凉シイトサカイ
恐しいならば　オソガキヤア　凉シイトサカイ

降つたら　降リヤア
來たら　來タアラ
任せたけれど　任シタケド
善いけれど　善イケド

十一　決意の言ひあらはし方

任せよう　マカソオ
爲よう　セエ
死なう　死ナア

十二　希望願望の言ひあらはし方

行きたい　行キテエ
見せよ　見ショオ
見たい　見テエ
御出でなさい　オイナ

十三　傳聞の言ひあらはし方

來るさうだ　來ルゲナ
善いそうだ　エエゲナ
死んださうな　死ンダゲナ

讀めるさうな　讀メルゲナ
行つたさうな　行ツタゲナ

十四　命令の言ひあらはし方

打て　打チヤガレ
行け　行キヤアガレ、ウシヤアガレ、ウセヨ
押せ　押シヤアガレ
見よ　見サレ、見ヤハチヨ
起きよ　起キラセ、起キサツセ、起キハチヨ
受けよ　受ケラセ、受キヤアガレ、受キヤハチヨ
來い　ウシヨオ、ウシヤアガレ
爲よ　セヤアガレ
お讀みなさい　お讀ミン
お出で　オイデン
お見　オ見リ、ミラセ、ミサツセ、ミサレ

十五　禁止の言ひあらはし方

見るな　ミサルナ、ミヤガルナ
爲るな　シヤガルナ、セヤアガルナ、シヤアガンナ

押すな　押シヤガルナ、押シヤガンナ、押シヤアガンナ
起きてはいかぬ　起キチヤイカン
見てはいけませんぞ　見チヤイカンゾ、見サッチヤイカンゾ
爲てはいけませんぞ　爲チヤイカンゾ

感情

十六　感情をあらはし又は餘情を殘す言ひあらはし方

打つ　打ッナア、打ッワ、打ッワイ、打ッネエ
涼しい　涼シイナア、涼シイワ、涼シイワイ、涼シイネエ、涼シイヨ
寢るがいゝのに　寢ルガエエノニ

待遇上

第十二節　待遇上の諸種の言ひあらはし方

一　本來尊敬の意をあらはすもの

召上る　食ベヤス、食イヤス
仰っしやる　イワサル、オイル

二　下に語を添へて尊敬の意をあらはすもの

父さま　タアサン、オトッアン
母さま　カカサン
殿　春ドン、菊ハン、秋チャン、花ヤン

三　上下に語を添へて尊敬の意をあらはすもの

お雪さま　オ春サ、オ菊ハン、オ秋ドン、オ花サン

四　本來輕蔑罵詈の意をあらはすもの

ぢぢー　やろー
野郎　ばか
馬鹿
あま
ひよつとこ

五　上に語を添へて輕蔑罵詈の意を強くするもの

くそ爺　くそぢゞ
ど爺　どぢぢ
こしぬけ婆　こしぬけばゞあ

六　下に語を添へて親密の意をあらはすもの

太郎公　たろこう
松の字　まつのじ
次郎州　じろしゆー
由坊　よしぼう

語詞の組立

第十三節　語詞の組立方

一　上に語音を加ふるもの

どえらい　ど畜生

二　中に語音を加ふるもの

ひよこたん　だまくらかす

三　結合語の融合せるもの

ぶつ叩く　ぶん擲ぐる　ひんむくる（ひきめくる）　ぶつこうばす

方言の分類例

第十四節　方言分類例

一　五十音の同行或は同列に通ふもの

しづく　シヅコ　雫

狸　タノキ
蚯蚓　たぬき　メメズ
みみず
鞭　ウルシ
うるち
枇杷　ビヤ
びは
密柑　ニカン
みかん
柚　イズ
ゆず
眉間　メケン
みけん
裾　ソ
すそ
指　イビ
ゆび
唇　クチビラ
くちびる
剃刀　カミスリ
かみそり
紐　ヒモ
ひも
芝居　シバヤ
しばゐ
俵　タアラ
たはら
繭　マイ
まゆ
（以上名詞）
消える　きえる　ケエル

研く	ニガク
撫でる	ナゼル
脱ぐ	ノダグ
毟しる	ミシル
結ぶ	ヌスブ
貰ふ	ムラフ
譲る	イヅル
教へる	オソヘル

（以上動詞）

下に	ヒタニ
隅に	スマニ
叮嚀に	テエレエ
無駄に	モダニ

（以上副詞）

二　或る語を省き或は附加するもの

晝	ヒル
溝	ミゾ
	ヒルナカ
	イミブ

獣	ケダモノ
雄	オンツ
雌	メンツ
鰹節	カツブシ
蟻	アリボ
蝌	オカイコ
糠	コヌカ
蕪菁	カブ
大根	ダイコ
菜	ナツバ
茄子	ナスビ
藻	モク
石	イシ
女	オンナゴ
頬	ホオタ

（以上名詞）

三　幼兒に用ゐしむる方言

けもの	ケダモノ
	オンツ
	メンツ
かつをぶし	カツブシ
あり	アリボ
かひこ	オカイコ
ぬか	コヌカ
かぶら	カブ
だいこん	ダイコ
なす	ナツバ
も	ナスビ
いし	モク
をんな	イシ
ほを	オンナゴ
	ホオタ

（以上名詞）

猫	ニヤア
鼠	チュウ〳〵
烏	カア〳〵
雀	チュウ〳〵
鶏	トオト
魚	ト
舌	ベロ
薬	オック
手拭	テンゴ
下駄	カッコ
提灯	バイ〳〵
湯水	ブー
饂飩	ズウズ
湯屋	ダンダ

四　標識語と全く異なるもの

目高	メンバチゴ
蚓斗	ゲエタフグ
瓦屋小僧	ホチ
溺死者	ドザエモン
膓	ヒヤクヒロ
袖無	デンチコ
握飯	コロシ

（以上名詞）

崇る	トイック
からかふ	イセクレル

（以上動詞）

既に	イツカア
度々	コンキト

（以上副詞）

六　本郡の方言として特筆すべきもの

讀まう	讀マアズン
死なない	死ニヤアセン
爲よう	爲エズン
有らん	有ラアズン

食つた	食ッチヤッタ
行かない	行カン
死んだらう	死ンダズラ
落ちまい	落チメエ
出來まい	出來ンダラア
來ると	來ルトサイガ
善いけれど	善イケド
見せよ	見ショオ
行きたい	行キテエ
來るさうな	來ルゲナ
行つたそうな	行ッタゲナ
行け	行カンカ
押せ	押サンカ
見よ	見ンカ
起きよ	起キンカ
押すな	押スナエ
行キヤアガレ	行キヤアガレ
押シヤアガレ	押シヤアガレ
見サレ	見サレ
起キヤガレ	起キヤガレ
押シヤアガルナ	押シヤアガルナ

第三章　文學技藝

第一節　文學

民間の文學として古くより行はるゝは、俳句と狂俳と是れなり。室町時代に於て最も好く行はれたる連歌は、戰國時代に入りて俳諧となり。此の俳諧は德川時代に入りて、其の冒頭の十七字を以て俳句を生み出しぬ。而して此の俳句は、又其の十二字を以て、更に狂俳を生みぬ。俳句は古語、古格に拘制さるゝことなく、俗に入り易く平民的にして、然も奇警に富み、飄逸洒脫、更に幽寂なる詩趣を看取するは、實に俳句の特色なり。狂俳は一層卑近のものにして前句とも稱し、民間日常の實情を、僅か十二文字の內に含めて、然も猶ほ人を刺し、人を殺すの氣概あるもの是れなり。前句は最も善く行はれ、田間にありて同好の士に押されて選者となり、斯界の宗匠と稱せらるゝ者、諸所にあり、前句の會ある毎に招かれて、各句に批評を加へ、優秀なるものを選出す、一里一邑の青年相寄りて之れを催し、或は大卷と稱し、雅題を定めて一般の投吟を待ち、日を定めて開會し、其の開會、終日、徹宵、數日に互ることなどあり、民間文學として最も隆盛のものと云ふべきなり。和歌漢詩に至りては、常に隆盛なりと云ふを得ず、殊に漢詩は

美術

其の入り易からざるが爲め之れを爲すものゝ數も亦極めて少し。

書畫其の他美術工藝に於ては、淺見寡聞未だ獨特の妙技あるものゝ出でしことを知らざるなり。此は土地の狀況にもよるべく、又神社の如き、佛閣の如き、殿堂伽藍の如き、優秀なる建築の設計さるゝなく、繪畫に彫刻に手腕を振ふの好機殆んど是れなきにもよるなるべし。

第二節　茶道

茶道

茶道は足利時代に起り、尾參の地に於ては戰國の豪傑中、之れを嗜好せしもの多く、德川時代に入りては、太平の娯樂として上流社會に行はれぬ、現今多くは文人墨客の間に行はる、煎茶、抹茶あり、簡素幽雅を主とするものにして、其の流派數多あり。斯道の宗匠、郡内に點散し、千家流、裏表、遠州、石州、有樂、宗偏、志野、久田、松尾等の流並び行はる。

第三節　生花

生花

挿花は安政の頃より廣く民間に行はるゝものとなり、其の流法も多く行はる、池坊最も普通にして、松月堂古流、眞道流、竹心流、遠州古流、千秋流、末生流等並び行はれ、宗匠各所に點散し、子弟を養ひ技を練る、盆石は近來世に出でしものにして、挿花と共に席間を裝飾するに供せらる。

第四節　圍碁將棋

圍碁將棋

昔くより普く民間に流行せり、明治三十七八年頃非常に流行し奇代の才を出しぬ、本郡西部の地に於て最もよく行はれ、盆正月其他閑散の時に於ては盛に碁會を催して技を戰はせり。

第四章　宗教

佛教

本郡に於て普く行はるゝ宗教は是れを佛教となす。殊に本郡の地は、親鸞上人の矢作柳堂の說法及蓮如上人の西端に於ける傳道等ありて、淨土眞宗とは最も深き關係ある土地なりとす。佐々木の上宮寺、野寺の本證寺、針崎の勝鬘寺は是れを總稱して參河三ケ寺と稱し、東海に於ける眞宗の巨鎭とす。其の上宮寺本證寺の二ケ寺は實に本郡に於けるの名刹なり。蓋し宗教の生命は、儀式にあらず、莊嚴にあらず、伽藍にあらず、堂塔にあらず、唯だ活ける信仰之れのみ、唯我獨尊實に自覺に存す。三河武士の本領は德川氏の建幕によりて發揮せられぬ、此の事業を以て三河武士に、櫻花と較ぶべき精華あるものなりとせば、彼の永祿の一向一揆と、近くは明治四年の菊間藩爭動とは、正に參河人の活ける信仰の大活動に

信仰

はあらざるか、自覺ある信仰の爲めに不惜身命一身を法に捧げし、遠くは三百餘年、近くは四十五年前の殉教者に對し、先づ虔みて敬仰の意を致し、欽慕の情を陳べずんばあらざるなり。殊に本郡の地は兩度の活動に於て常に其の中心地たり、且つ上宮寺本證寺蓮泉寺の如き實に其の主導者たりしに於てをや、活ける信仰には溫き血あり、動ける脈あり、堅き骨あり、强き皮あり、常に精勵して倦怠せず、遲滯することなくして、奮躍す、實に本郡の地は、佛教普く行はれ、稍もすれば他事を擲ちても、是れに熱狂せんとし易き地なる哉。

本郡に行はるゝ佛教には、天台宗、眞言宗、曹洞宗、臨濟宗、時宗、淨土宗、淨土眞宗、日蓮宗、等の各宗あり。其の最も盛なるを淨土眞宗となし、淨土宗之れに次ぎ、曹洞、臨濟、眞言、時宗、日蓮、天台、其の後に相次げり。各宗各寺院に於ては、宗祖の緣日、其の他一般に閑散なる期を選みて、佛事を營み、又諸種の追弔會を行ひ、或は名僧を招きて說教を乞ふ。其の檀家の者を始め、一般の者是れに參詣して法を聽く。淨土眞宗の報恩講、淨土宗の御忌法會、等は其の最も盛に營まるゝものにして、數日に續き正に信徒年中行事の一をなす。

本郡の寺院に就ては、前編既に記せる所の如くなるも、此所に順序として、更に其の大要を記さんには、眞宗の寺院には、前に云へる三河三ヶ寺の外に猶ほ桑子の妙源寺あり。三河三ヶ寺と共に東海の名刹となす。三河三ヶ寺は何れも三河尾張美濃伊勢等に亘り數百の末刹を有し、其の本山として、是等の寺院に對する絕大の權利を有し、又共に永祿一揆の主謀者として、三河の平原を攪亂せしめたる、偉力を持ちたるものなりき。妙源寺は是れとは趣を異にし、高田派專修寺に屬せしかば、一向一揆の時、家康の佐々木に敗れて、一騎落ち行くを迎へて寺の內陣に潛ませしとの由緖を以て、幕府よりは出格の保護ありし寺なりとす。他に濱三ヶ寺なるものあり。西衣ヶ浦に臨む所に在り。大濱の西方寺、高濱の恩任寺、高取の專修坊、是れなり。古蹟としては、矢作の柳堂勝蓮寺、西端の應仁寺等なるべきか、尙ほ逸すべからざるは、菊間藩の爭動に際し宗徒三千の罪を一身に荷ひ、終に斬罪に處せられ、不惜身命の聖訓を全ふせし、臺嶺上人の生地、小川の蓮泉寺あり。時宗には大濱の稱名寺あり、遊行道場として一國に冠たり、濱邊の巨刹として、古昔より其の名高し、禪宗には大濱の林泉寺あり。眞言宗には重原の遍照院あり。淨土宗には隣松寺の隣松寺あり。何れも郡內の名刹となす。

佛教各宗の盛衰は、其の時代の事情に依る、遠くは云はゞ德川時代に於ては、德川氏所崇の故を以て、士分は悉く權威と格式とを有したる淨土宗に入り、平民は其の傳道力と凝集力との旺盛なる眞宗に歸し、殊に永祿一揆の後は國內の大多數を擧げて是れに歸したりき。されば此の二宗は、德川時代を通じて佛教界を上下に二分し、最も勢力あるものなりき。されど幕府倒れて既に五十年、社會の變

遷は、此の二宗の勢力をして退轉せしめたるも鮮しとせず。眞宗は其の本基を下層に置きたるにより、其の影響を受けしこと輕きが如きも、主力を上層に置きたる淨土宗に於ては、其の打擊を受けし甚だ大なるものあるが如し。要するに此の二宗は久しき間、佛敎界の權威として、名僧智識を出したること實に尠しとせず。

佛敎の外尙ほ此の地に於て行はるゝ宗敎を耶蘇敎となす。されど此は遂に振はざるものゝ如し。極めて寡少の信徒ありとするも、殆んど認むべきものにはあらざるべし。

第五章　歌舞音樂

第一節　三河萬歲

三河萬歲

傳ふる處に據るに、昔三位國淸の三男玄海、熱田の藥師寺に住持す。應仁の亂に、細川道仙の兵燹に罹る、乃ち本郡西本郷村に來り、蟬宮廟祝上地刑部太夫が家に寓す、遂に工夫を凝らし、上古の典故を揑出し、昇平安民の語を稱へ、處々巡行す。所在の民之を萬歲と號く。遂に正月岡崎城に出てゝ萬歲踏歌する事を允さるゝに至ると云ふ。按に萬歲踏歌其由來久し、玄海の創意に出づるに非らず。日本歲時記に千壽萬歲と云ふ事あり、正月十五六日の頃、踏歌とて京中の男女の聲色美きものを集めて、內裏に於て祝詞を歌ひて舞はしめ給ひしことなり。漢土にても唐代に正月十五六日長安にて踏歌せしめし事、潛確類書に見へたり。此の起源に關しては種々の說あれども、三河に關係深き圓通大師、大江定基の時代より始まりしとの說多し、或は大江定基三河の國司たりし時、佛法傳來の文詞を作り、刈谷鄕士良太夫に敎へ、諷はしめたる男踏歌の遺風なりと云ひ。又一說には應通大師禪師入宋歸朝の節連れ來りし歸化人活計に窮したる爲め、祝の言葉を唱へ年始に唱舞せしに始るとも云ふ。而して三河院內別所宿等多くは村外別居部民の地にして、萬歲は其の生業の一たりしものゝ如し。三河萬歲は江戶時代にあり て、德川墳墓地なればとて、特別の待遇を受け、江戶にては武家風の大紋を着せしむる特例あり。毎年三河の國院內村作太夫、江戶に下りて正月十一日御勘定所にて萬歲を勤め、金子を拜領し、又淺草御藏にて勤め米十五俵を給はり居たりと云ふ。

第二節　盆　踊

盆踊

盆踊は、盂蘭盆會三日間を全盛の時とし、其の前後七夕祭八月朔日等の祭日及遊日に於て、老幼男女の別ちなく、打ち群れて合唱し、思ふが儘に踊り歩き、夜は神祠佛堂等の前に集り、提灯を點し、松明を燃し、群集一團となり、合意の唄

歌、舞踊、無禮講の中に、曉の鐘を恨みたるものなりき。此の風既に古くより頽れて、今は其の詳しきことを窺知し得ざるも、猶ほ此の風を存する地に就きて其の實際を見、又此の風俗の遺れるものかと思はるゝ童謠等の斷片を合せて考ふるに、一つの派手なる合唱の踊、音頭の類なりと想像せらる。而して盆踊なる名目は盂蘭盆會の三日間を全盛とし、唄ひ踊りしによるなるべし。此の風元祿の頃最も盛に行はれしが、享保に入りては嚴に之れを取締り、四民の逸樂に耽溺するを防ぎたり。名古屋藩に於ては、其の後間もなく、更に盆踊を奬勵せしことありて、又々全盛を極めしが、引き續き幕府の風俗上の取締益々嚴重となり、遂に之れを禁止するに至りしものなるにや、諸書更に是れに就て記する所なし。思ふに幕府を始め諸藩の方針として、平民的娛樂の發達向上は忌み嫌ひたるによるならん。三河の地に於ては南北設樂郡の山村、尾張に於ては知多郡の海邊に、今尙ほ頗る行はる、三河の笹踊は、此の遺風ならんか。

元祿時代

笹踊

神遊

第三節　神樂

神樂は我國上古の歌舞にして、一に神遊と云ふ。專ら神事に用ひられ、樂器は笏、拍子、和琴、笛、筆築にして、歌は神樂歌なり、作法は種々あれども、阿知女の作法を最古の遺制なりとして、最も之れを重んず。古き事は云はず、淸和天皇の朝、始めて神樂歌を選定せられ、醍醐天皇又神樂譜を勅定せらる、以來年々宮中の大儀式たり、諸國大小諸社及氏神神社祭禮等に行ふ神樂は、里神樂と稱するものにして、後には祭祀の時、獅々面等を蒙りて戲曲を之れに混ふるに至りぬ、一名獅々舞を神樂と稱するは是れが爲めなり。最も普通には大鼓、銅拍子を擊ち、竹笛を是れに合せ吹き、巫女之れに調子を合して舞ふ、到る所の神社にて行ふは皆な此の種なり、大和神樂、朝日神樂等の別あり。

里神祭

第四節　能樂

能樂として完全なるものは見られず、唯觀世流の謠の一部の人によりて流行せるを見るのみ。

觀世流

第五節　芝居並獅子舞

芝居は村芝居にして萬人講と云ふ、氏神神社祭正月及盂蘭盆會等の日に於て素人相寄り之れを演ず。獅々舞には男獅子嫁獅子の別あり、之れを業とするものあり、村芝居と同じく、氏神神社祭禮等に於て之れを舞ふ、多くは萬歲を兼ね、萬歲芝居と稱す。

萬人講

萬歲芝居

第六章　俗謠

第一節　里謠

第一項　萬歳唄

(一)　放下踊

萬歳唄
放下踊

○おもしろの海道下りは、筆にかくともおよばしな、小田原の茶屋を通れば、みめよき姫が茶をひくや、寄りて參れや旅人よ、旅人はお立ちあるとも茶わんなほすなしつのなかには、下屋の下、その藪の竹には節あるふしが四つそろひ、宵に殿を待つふし夜中に待つてぬるふしや、曉のはなれふしとや、夜明けて浮名の立つふしや、なにごとも御代で納る。

○鎌倉の與市が娘は、月がよどみて七月や、なゝ月の月のつばりで世になきものゝほしさよ、天竺のしゝの見たさよ、唐土のおたかのほしさよ、鎌倉の御所のおまへに老いたる松は何松や、あれこそわひのから松の一のお枝に唐土のおたかゞ巣をかけ、片羽根はれい〳〵紅梅、又片羽根はきりん紅梅、おもしろたかのふせどや、戀する姫御に見せばやの、けさしまのきりの深さよ、さら〳〵おたかゞ拜まれん、何事も御代で納まる。

○戀の關屋の乙若姫は、ことし十七寅のとし、伊勢や熊野へ參りそろ、津島河原で舟に乘りそろ、舟路は道はさだめて定めがないほどに、かたみおくりもめされ候、てゝ御のかたみ太刀や刀を、これをかたみとおぼしめせ、母ごのかたみには、肌の護やはだかたびら、これをかたみとおぼしめせ、あね御のかたみには、うはぎの小袖、これをかたみとおぼしめせ、何につけても旅と思へばものうや〳〵、何事も御代で納る。

(二)　京の町

○優女美し優女賣なる物を見さい、あこのまへのおまへの乙御前に至るまで、人がものをとへども十二月の事なれば、あまりいそがしさに、顔をうちふり賣りたるものを見さい、三つの朝の賣もの荒和布、若和布、うちみし鮭の子は、はやう壹籠ばかり入れてかたげて、かつを〳〵、蛤と賣りたり、夫より行過ぎ五條室町の馬の市のあたりに、我等のやうなしやれもの肌に、何も着ないで綿も入らぬおひへをとりかさね、尺八腰につきさして女郎の御前をそろりそと通れば、袖をひかへておもうしやれと云ふ時は、しやれ者のくせとして、料見は少しも持たぬと、まづ御名を問ふたり、なう〳〵それなる御女郎は、御名は何と申す初花御前と申しやる、春の初に初花とは何よりめでたし、是なる御女郎御名は何と申すぞ、あたらしどのと申し

やる、あたらしどのと申しやる、あたらしと聞くよりも床しく存じてさしより見れば、新らし顔の古き眉毛すゝけて小鬢はよごれ煤拂ひにさも似たり、禮式の候か、禮式の御事はひと筋の御事か思ひもよらぬこと仰せあり、それがこはくば鶴の一聲こされ牛筋もこそ、夫れがこはくば薪に馬鍬、去年植へた柿の木のならぬ事仰せあれ、いや〳〵ならぬ事こそなる本なれ、なるべし芽出たいなるべし、京の町のやさい女。

第二項　厄拂ひ

○ヤーラ目出たやな、たのしやな、めでたきことで拂ふなら、こなた御庭を眺むれば、三階松が飾りたて、一の枝には金がなり、二の枝には錢がなり、三の枝には盃がなり、上には鶴がまひ、下には龜があひをする、こなた旦那御吉慶と拂つてさらい。

○ヤーラめでたやな、樂しやな、さもめでたい事で拂ふなら、旦那茶碗や、おく皿や、夫婦の中は豆ぢよくよ、うんでどつくりみよーなら、行燈摺鉢と打拂つて、東の海へとおもへども、西の海へさらい。

○ヤーラめでたや、たのしやのなんぼーや、めでたい事で拂ふなら、かんかんづくしで拂ひませう。大寒小寒酒のかん、子供にらくがんやりや泣かん、橋の欄干に屋根ふかん、みかんきいかんすこやかん、青物市へ青物出せば、一〆二〆三〆に賣り拂つて、西の海へさらり。

○ヤーラめでたや、たのしやの、なんぼーや、めでたい事で拂ふなら、こゝの旦那の壺の内に、鶴が巣をかけまして、つるは千年かめは萬年、ほらがひは山に千年海に千年、里に千年合して三千年、ふーふく〳〵とふき拂つて、西の海へさらり。

○ヤーラめでたやな、さもめでたい事で拂ふなら、一にいわしや二に鰊、三にさよりや四つよろづ、五ついつもの細か物、六つ昔の大鯨、七つ鯰やかね叩き、八つやき物かばやきや、九つ小鯛やしま鯛や、十でとんととび魚と打拂つて、西の海へさらい。

第三項　地搗歌

○大望なやぐらを組みたてゝ、「ヨンヨイ」空は三十三天の「ヨイヨイ」下はな

らくの底までも「ヨイヨイ」ひゞき渡るやうなどーづきでヨンヨイ」どんど
とんどと有りがたい「ヨイヨイノヨーイヤナ」さりとは揃た、さらばそのや
なひーきやげ「ソーリヤエーンヤ」エーンヤ」エーンヤトナー」

○(出)エーコーノサンサー　(請)エーコーノサンサー

(出)サンサさゝふねーに、おかめ女郎をのせてー、

(請)エーヨイ〳〵ヨイコノサンサー

(出)むらのわかいしゆに、かーぢよとーらせう、ションガイナー、

(請)エーンエーンエーコノサンサー

○(出)ヤレかーがのかがのちやうーの、笠やーがやけて、かーさに、ことか
く、こーのー夏は、(請)ヤレかーさがーない、「ズント」かさがない、
かさにことかくこのなつは、

○(出)ヤレふーたつ、ふかぐさ小將さまはー、をーのの小町へかーよーひが
さ、(請)ヤレかーよひーがさ、「ズント」かよいがさ、をーのの小町
へかーよーひがさ、

○(出)京の加茂川の、小鳥のこかずを、ごぞんじか、(請)なんぢやいな
ー、(出)かーもーが三三が九つ、白さぎ三羽に、をしどり五つに、
「サ」うがーなーなーつ、(請同上)

○(出)ひいたりよー〳〵、(請)ヨイ〳〵、(出)ひいたりよ、わかい
しゆよ、(請)ヨイ〳〵、

(出)わかいしゆ方のひきふりは、(請)ヨイ〳〵、

(出)から天竺にも我朝にも、(請)ヨイ〳〵、

(出)またとこざらぬひきぶりだ、(請)ヨイ〳〵、

(出)そのいきさまさずひいてくれ、(請)ヨイ〳〵、

(出)ヨーオイ、ヨーオイ、ヨーイトナー、(請同上)

(出)ヤーッザイノエン〳〵、(請同上)

(出)エン〳〵こゑがよくそろたにヨー、(請)エーンヤ、エーンヤ、
エーンヤトナー。

○さつても、さつても、さても西行のぼんさんが、はしめてあづまへくだら
れて、あつたの宮へとたちよられ、これほどすゞしき御宮を、なせにあつ
たとつけられた、そこでかんぬし走り出てゝ、これ〳〵まうしほんさんへ、
西と云ふ字はにしとよむ、行と云ふ字はゆくとよむ、そこで西行も困られ

て、網代の笠をばちよとかぶり、ひちく杖を手にとつて、遙に沖を眺むれば、出船入船ほかけ船、かけて走るは桑名船、よいやねがよいやね、アエーンヤエーンヤ、ハリハサノエンヤコノサヤレコンノー

○ゆんべゆめよみた不思議な夢を、「ヤレ何よえ」斯波の玄蕃の火見の櫓の中のまんなかから、すつてんころりん、ちやんころりんと、おちたやうなる夢を、「ヤレ何よえ」斯波の玄蕃の火見の櫓の中の眞中から、すつてんころりん、ちやんころりんと落ちたやうなるゆめを、「アエーンヤ」「エーンヤエーンヤトナ」

○花の都ぢやにしきにいろとようゆたの一「さよぢや〳〵」外は青葉に「サイ〳〵」くらま　ヤサー川の　ノーホンインデゴザンス、おそ咲く花の名所とて、殊ににぎはふわいの一」さすが都の藤の森とはよう言うたの一「さよぢや〳〵」花がひらけばサイノー、紫色でノーホンインデゴザンス、赤いと白いと咲きわけて、それはみごとぢやノ、ー、「サンサ」櫻が咲き亂れて姉さん心がうき〳〵、「さんささゝ舟で」ヨーイヤナー、

第四項　木遣歌

○エー　つなはーなんぶの　オーヨー　せんすぢーうちかな　ヨーエー　まけばーほどなく　ヨーエー　たいぼくもー　てんじやうするー　ヨーエー

ごしうぎーめでたくーヨー、

○エー三河の名山　ヨーイヤヨーイ　ヤサーヤーレコリヤエー　猿投は三社だ　ヨーイヤヨーイ　ヤサーエーンコリヤエー、

○ソーローターリ　ヨーイヨーイ　野に住む駒のみだれがみ　だれとりあげてゆひてはなーいかと　朝ひきつなハサーノエー　ハリハサーノエー、　ヤーエーンヤラ　ソーレハ　ハーリー、

○(出し)　一には天照皇　ヤハレー、　(請)　ヤツトコセーヨーイヤナー、

(出し)　一には天照皇大神宮樣だよ　ヨーイトコネー、　(請)　ソーリヤーアリハーノ　アリヤーラン　ヨーイトコネー、

(出し)　二には丹羽田だ　ヤハレー、　(請)　ヤツトコセーヨーイヤナー、

(出し)　二には丹羽田の井戸神樣だよ　ヨーイトコネー、　(請)　ソーリヤーアリハーノ　アリヤーラン　ヨーイトコネー、

(出し)　三にはさぬきだ　ヤハレー、　(請同上)

三にはさぬきの金比羅樣だよ　ヨーイトコネー、　(請同上)

(出し)　四には信濃だ　ヤハレー、　(請同上)

(出し)　四には信濃の善光寺樣だよ　ヨーイトコネー、　(請同上)

農事唄
田植田草

（出し）五には出雲だ　ヤハレー、　（請同上）
（出し）五には出雲の大社だよ　ヨイトコネー、　（請同上）
（出し）六には六角堂　ヤハレー、　（請同上）
（出し）六には六角堂觀音樣だよ　ヨーイトコネー、　（請同上）
（出し）七には成田だ　ヤハレー、　（請同上）
（出し）七には成田の不動樣だよ　ヨーイトコネー、　（請同上）
（出し）八には八幡だ　ヤハレー、　（請同上）
（出し）八には八幡の八幡樣だよ　ヨーイトコネー、　（請同上）
（出し）九には熊野だ　ヤハレー、　（請同上）
（出し）九には熊野の權現樣だよ　ヨーイトコネ、　（請同上）
（出し）十には豐川だ　ヤハレー、　（請同上）
（出し）十には豐川稻荷樣だよ　ヨーイトコネー、　（請同上）

第五項　農事唄

五月田の水のほどまで戀ひ忍ばれてやがて秋田の落し水
此の田植へるが此の米喰はぬ稻の穗が出りや私しも出る
五月三十日は泣く子が欲しや畔に腰かけ乳のませ

土臼びき

水に浮草美事なものよおらも小紋に染めて着る
草は取りよいなぎ澤瀉はねぶかぞろひで身をやつす
いとし殿御さ五段田に一人涼し風吹け空くもれ
暑や苦しや六月土用水も湯に沸く田の中で
（浮いたかひよこたん流れてどこいつく）

雨乞

今年や世が良て穗に穗が下る樹はとりおけ箕ではかる
臼の輕さや相手の好さよ相手變るな何時までも
來いと云はれて其の行く夜さは足の輕さや嬉しさや
臼よ廻れよどんどゝ落ちよ君が代臼は何時までも
ぬのこ買ふより臼買ふておくれ臼はぬの子のかはりする
春いておくれよ一杵なりと春いた御禮は寢て返す
今宵今晩今晩かぎりこれに懲りずにまた明日の夜も

祝儀

（辛棒は金だよ金の心棒のつきるまで）
思ひもよらぬ日がてりて池のまこもが木にかゝる
雨乞ひかけたる其の德で道の小草に米がなる
めでた〳〵の若松樣は枝も榮へや葉も繁る
あげよ〳〵は日頃の思ひ今日は吉日抱きあげる

雜謠

數へ歌

さいた盃や見てめしあがれ中には鶴龜五葉の松
此所の御家は目出度いお家鶴が御門に巣をかける
濃茶煮出したに婆樣もござれ嫁の惡口云ふて飲もに
お前龜崎私しや鶴が崎鶴と龜との差し向ひ
おどけ果てたよ鷹取山で昔なぢみが餅くれた
一夜權現の傘松は松は枯れても名は殘る
一夜權現の燈籠の灯誰が毎夜ともすやら
お伊勢參りに今朝出た船は今は權現の洲を廻る
樣と沈丁木枯れても香ふ萎れてもよい我妻は
今年や豐年門田の稻も丈が六尺穗が二尺
五萬石でも岡崎樣は城の下まで船がつく
色が黑くて嫌ならおよし私しや漁夫の娘で御座る
吉田通れば二階から招く然も鹿の子の振袖で
いとし山越へ又山越へて會ひに來る樣還さりよか

第二節　童　謠

○大黑樣と云ふ人は、一に俵を踏んまいて、二ににつこり笑らつて、三に盃手に受けて、四つ世の中よい樣に、五ついつもの如くにて、六つ無病息災に、七つ何事無きやうに、八つ屋敷を廣め立て、九つお倉を打ち廣め、十でとんと治まつた。

○岡崎お城は低いお城、名古屋お城は高いお城、一段上れ二段上れ三段上つて東を見れば、よい子が三人揃つて通る、先に行くのは酒屋の娘、まん中にゆくのが饅頭屋の娘、跡に行くのが油屋の娘、油屋の娘は伊達者な娘、油一本きりゝとしめて、朝に笄、晝間は島田、晩の七つはおさげがみ、お下げ髪誰に結うて貰ろうた、前のおばさんに結うて貰ろた。

○ほうほけきやうや鶯や、たま〳〵都へ上る時、梅の木小枝で晝寢して、赤坂ばざゝの夢を見た、何んと見た〳〵かたらんせ、四十四人が毬をつく、其中一ちの小娘は、きんらん前かけ綾襷、八つ緒の雪駄を、ちやら〳〵と〳〵。

○ぎり〳〵まるやまどつこの東、東を見れば、御門とびらにおさよと書いてね、おさよさしたるまき繪の櫛はね〳〵、誰に貰ふたか、源二郎さんに貰ふたかね、源二郎男は、伊達者でござるね〳〵、伊達者みこんでみもちに

なつたのね、みもち幾月七月八月ね、そこでおさよが涙がほろ〳〵。

○

一ットセー　一ッ大事の文珠さん、針のミヅ江の三ッ頭、「ヨウ」三ッ頭。

二ットセー　ふたらく東を向ひたらば、松さん御山で手を叩く、「ヨウ」響きます。

三ットセー　みやがりさんすな、お山さん、節季の賄ゐはどうなさる、俺しや憂ゐはいな。

四ットセー　よんだる御客は由良之助、お輕は二階でのべ鏡、「ヨウ」のべ鏡。

五ットセー　いつきて見ても井戸端で高麗下駄履いてちやあらちやら、「ヨウ」ちやあらちやら。

六ットセー　無理にしめたる腹帯を、ゆるめておくれよ民造さん、「ヨウ」民造さん。

七ットセー　何んでもかんでも呼出して、打かけお寺の裏門へ、「ヨウ」裏門へ。

九ットセー　やれ〳〵おそがや、おそろしや、ろく〳〵首が飛んで來る、「ヨウ」飛んで來る。

九ットセー　こゝはたんぼの庄屋さん、丁と組んだら牢が出た、「ヨウ」牢が出た。

十オトセー　とん〳〵叩くは誰さんだ、松さん忍びか這入らんせ、「ヨウ」這入らんせ。

○

一で二で三で四で五つ六で七八で、九よで八まよで、二十三四十五六七八九の、九十ぢや五貫でおとのやとんそれ。

○ねんねこ〳〵ねんねこや、ねんねのお守は何處へいた、あの山越へて里へいた、里のみやげに何もろた、でん〳〵太鼓に笙の笛、お手にも似合はぬ風車、あーちのばーばに何貰ろた、きんちやこのうて錢入れて。

○ねん〳〵ころ〳〵ころ〳〵よう、おころり小山の雉子の子は、泣くとお鷹に捕られます、だまつてねん〳〵ねん〳〵よ、ねんねのお守はどこ往つた、お山を越へて里へ往つた、お里の土產に何貰ろた、でん〳〵太鼓に笙の笛、おきやがり小法師に振鼓、叩いて聞かすにねんねしな。

○正月三日はよい日だの、下駄の齒のやうな餅食つて、あいまにやおかゝの乳のんで、

○お月樣幾つ、十三七つ、未だ年は若いね、紅鐵漿つけて、西へ西へとお嫁

入りなさい。

○お月様こ様、お前の孫が、天から落ちて、一ノ木二ノ木、三ノ木櫻の枝に、字が書いてあるが、誰もよう讀まん、おふじに讀ましよ、おふじもよう讀まん、お寺の小僧さんに、ぜにやつてみな讀ましやう。

○螢さんがいろ、あつちの水はまづい、こつちの水はうまい、茶びしやく持てこい汲んでやる。

○田螺殿（ツボリドン）〳〵、お彼岸まゐりをさつせぬか、烏といふ黑い烏が、足をつゝき目をつゝき、それでやう參らん。

○烏々勘三郎、なぜよみよとらぬ、ことしや貧乏で、それでよみよ取らぬ。

○雀はチュウ〳〵忠三郎、烏はカア〳〵勘三郎。

○開いた〳〵、何の花が開いた、蓮華の花が開いた、開いたと思つたら、やつとこせえでつぼんだつぼんだ。

つぼんだつぼんだ、何の花がつぼんだ、蓮華の花つぼんだ、つぼんだと思つたら、やつとこせえで開いた〳〵。

○トリ中の小佛、なぜ春がしとならぬ、親の日に海老食つて、それで春がしとならむ、ケケコウー。

第七章　祝儀弔祭

第一節　祝儀

胎兒生るれば、先づ産衣を着す、三日にして祝儀あり、七日にして又重ねて祝儀あり、此の日を以て父の忌あけとなす、古くは此の日に於て産兒に命名しぬ、十日にして母の枕直あり、月餘にして母の忌ずみ、生兒を伴ひて土産神詣をなす、産兒の初參りと稱し祝儀あり、百十日にして喰初めの儀あり、滿一ヶ年にして生誕の祝を擧ぐ。是等の事は昔も今も變らぬ習にして、猶ほ婦人懷胎して五ヶ月に至れば著帶あり、男子の數多く且つ健在なる家より此の帶を贈るの風あり、岩田帶と稱す、初産の婦女は多く實家に歸りて、助産を賴むを常とせり。

嬰兒長じて三歳に至れば髮置の儀をなし、五歳にして男子は袴着、女兒はかづき初の祝儀をなし、土産神に詣づ、十五歳の頃に至り額直しとて前髮を除きて半元服をなし、次に鬢髮の際を削りて角を入る、是れまでは振袖なりしを袖留とて

祝儀

枕直、忌ずみ

岩田帶

元服

袖を短縮し、茲に初めて元服の式を終る、女子にありては此の頃より漸く齒を染め眉を削り、着衣の脇を詰めるを以て成年となりし證となす、されど多くの女子は結婚と同時に是等の事をなし、亦此際親戚知人を會して祝儀を擧げ、是れをかね付祝と稱したりき、されど今は時勢の變遷に伴ひ女子にあらずば髪を置くものなく、就學の時至りて學校に入るに非ざれば殆んど袴着の必要なし、其他男子も女子も凡て學齡時期を出づれば、元服の式もなくかね付祝儀もなく、漸くに事物を解して成年す。

かれ付祝

結婚

結婚をなすには先づ相互に認諾を與ふるもの多し、既に認諾あれば、媒人其間に周旋して、諸種の儀式をなす。是等の儀式は諸人に在りては昔も今も凡そ變ることなく、其式吉日を撰び男の方より結納の贈物として魚酒小袖等を贈り、或は帶代として金子などを贈る者あり、茲に舅家には常陸帶の祝といひて使者を饗し、結納領收狀をしたゝめ、或は答禮の使者を發す。更に吉日を撰みて嫁の調度を贈る。かくて女は鐵漿親を賴みて齒を染めたるものなれども、今は全く此風頹る。

結納

聟入の式

此の日聟たるべき男子は、媒人と共に禮服を着け、嫁たるべき女子の家に至りて饗を受く、之れを聟入の式と稱す。此の時嫁たるべき女子は、化粧を整へ、多くは髪を高島田に結び、衣裳は白綸子白紗綾の類を着け、慇懃出でゝ聟を迎へて對面す。饗應終りて聟嫁方を立出づれば、嫁は髪に綿帽子を蒙り、被衣を戴き、其の後より隨從して家を出づ。被衣を着けて嫁ぐは死すとも歸らざるを意味するに出づ。嫁の調度品も、此の時嫁入音頭の調子面白く、目出た〳〵の内に、擔ぎ出さるゝを通常とせり。一行聟家に至る頃には、日既に西に臼づきて暮色至る、一行を迎へて先づ之れを祝言の席に導き、媒人上席に着き嫁は下座に着く、熨斗三方吸物の膳など出てゝ、茲に三三九度の盃事ありて式を了る。嫁は茲に白衣裝を緋綸子其の他色あり模樣あり香ある衣に代へ、舅姑小舅姑に見へ初對面の盃を交す。之れを色直しと稱す。親戚知己來りて祝儀を賀し、「御代は芽出たの若松樣は枝も榮へや葉も繁る」「此所のお家は目出たいお家鶴が御門に巣をかける」等、祝言の歌の内に、酒を汲み交し、曉に至るもの多し、媒人其他皆無言に其の家を辭す、歸ると云ふ語を不吉なりとし、之れを云ふを忌めばなり。又嫁の調度を擔ぎ來りし、棒杖等も折斷して歸る、之れも歸ると云ふことを思はしめざるが爲めなるべし。翌日嫁は聟方の親戚知己の家を廻りて土產を贈り、初對面の言葉を交す。其れより三日にして里歸りの式、膝直の宴、ひろめの宴などをも開くものあり。尙ほ婚禮の際、先づ佛前に參拜するの風あり、神祠に參拜するの風あり、是等は家庭の事情に依りて異れども、何れも結婚は神聖にして嚴肅を尊ぶに出づ。

三々九度

色直し

里歸り

婚禮の法令

抑々婚禮の法令は既に江戸時代の初期に於て見ゆ。特に公家武家の緣組は、最も之れを嚴酷に取りて一々幕命を待たしめたり。又諸大名より幕吏其の他の近習

皆私かに婚姻の約をなすを禁じたり、享保には妻妾の別を正し、元文には離婚の制を布き、不義密通の法令は最も善く備れり。是等は種々の政略上より出でたるものなきにあらざるも、又治道の要素より、正に然るべきもの是れありしなり。

元和

元和には音信、贈答、儀式、家宅普請、等の華美を制し、元祿にも重ねて之れを令し、料理も二汁五菜後段一つまでに過ぐべからずとし、享保には婚姻の行列結納、祝儀、酒代など其れ〳〵制限を加へ、天保の饑饉あるや貧福に拘らず、婚姻の節は一汁、一菜、有合せの野菜肴二種との觸書を見るに至りぬ。而して此等の祝宴に於ける煩鎖なる繁禮、縟節は、江戸の水島卜也が、自ら小笠原流の家傳を得たりと稱し、勝手に諸種の空禮を揑造せしに起りしものにして、數多の弊習は早くより之れを禁ぜられしも止まずして以て江戸時代を了りぬ。

明治

明治の御代に入り六年令あり婚禮等の儀は身分に應じ相當の式を用ふべきものなるに、格外の調度不相應の費用を盡くすものあるは以ての外のことなり、向後舊弊を一洗して家を富まし、國力を增すの心懸急務たるべし云々是れより舊藩時代の煩鎖なる婚儀の風は稍々縮少せられて今日に及びぬ。

初帷子

男兒生れて初年の五月の節句を初幟と云ひて大に之れを祝ひ、女兒は亦其の初年の三月の節句を初雛と曰ひて祝ふ、女子長じて聟を迎ふるの式は、吉日を撰びて、婚禮の日、化裝衣粧を整へ、家の門外に出でゝ、聟の至るを待つ、待女房之れにして、聟の家に入りて後己れも其の後より隨從して家に入る、他は前に記したる處と凡そ異なる所なし。

厄年

男子は廿五歳と四十二歳とを厄年となし、女子は十九歳と三十三歳とを厄年となし、其の前後兩年を前厄後厄となす。同年の者相會し厄明けの年を祝し、氏神神社に紀念の燈籠其他紀念の品を奉納するの風昔より傳はれり。六十一歳に至りて本卦返り、還曆の祝をなし、七十歳にして古稀の賀、七十七歳にして喜字祝、八十八歳にして米字壽をなす等、昔も今も一にして他の地方と異ならず。

第二節　弔祭

弔祭

葬儀

臨終

葬儀は神葬佛葬の二行はれども佛葬を以て最多とし、火葬を通例として埋葬をなすものは神葬に依るもの〻外極めて少し。臨終には子孫姪等枕頭にありて、斷末間の死水を含ましむ。五體遂に冷ゆるや是れを北枕に直して、枕元に香を燒き佛前に燈明を上ぐ。一夜は其の死を惜み、輙宵伽するを多しとす。葬儀の日には六親眷族知己緣故皆集り來りて弔詞を述べ、伽僧來りて枕經を誦ずるあり、甥姪先づ屍體を取りて湯灌し、剃髮し、白衣を着せ、念珠を持たせて棺に納む。或は生前遺愛の物品、六道錢、杖草鞋などを納むるものあり。或は妻妾の夫の死を悲むものは、髮を斷ちて棺中に納め、其の貞操を表するものあり。又負布と稱し佛

負布

前に供へ或は佛事に使用せし白木綿を以て之を蓋ひ、或は信州善光寺の經帷子を死體に着するあり、之れを棺に納むれば更に之れに輿を冠す。宗門檀那寺の僧至りて佛前に讀經をなし、更にお髪削とて剃髪の式をなし、之れに法名を授け　西方極樂淨土に往生すべき死出の旅に赴かしむ。寺僧の導師式を終れば葬列は導師を先にして家を出づ、香爐、紙花、幡、天蓋、位牌、棺など列をなし、喪主後に在り親族故舊皆之れを送りて、野邊に至る。棺を蓮華臺に載せ北向となし、更に僧侶の讀經あり、親戚故舊の燒香あり、終りて一同最後の別をなして、埋葬に附し、或は火葬に附す。火葬埋葬の事は舊來の慣習に依り、村中の者手を別けて之れを爲すの美風あり。火葬に附したるは夜半の煙となり、明くれば甥姪又野外に至り、灰の下に白骨を拾ひて、是れを墓所に葬る。一抔の土一塊の石永遠の哀は留りて、亡骸空しく土の下に朽ち終る。其後七日にして初七日の祭儀あり、次で三十五日四十九日の法會あり。一年にして一週忌の法會あり、其後は三年七年十三年四十五年百年千年等の年忌を營む。其の外月々の命日には、多くは墓參をなし、又佛前に供養して其の冥福を修す。尚ほ盂蘭盆會には新精靈樣を迎へ、墓所を清めて香花を手向け、佛前に迎火を點じ、祭儀最も鄭重なり。恩師、恩人、戰病死者、有緣者、及無緣佛等の靈に對しては、同志相寄り或は己が志により　時々追弔會を營みて其の冥福を祈る。死は人生の最大事なり。美はしき芳志により、

剃髪の式

法會

墓參

其の祭式の昔も今も變りなく、最も圓滿に執行さるゝぞ、誠に嬉しき事ども なる。

年中行事

第八章　年中行事

一月　一月　暦

一日　四方拜　年賀　各官衙學校祝賀式　氏神及墓參り若水を汲み、屠蘇雜煮を祝ひ、松飾りす。

家庭には歌かるた、雙六、萬歳。

二日　初荷　買初賣初

三日　元始祭

四日　御用始

五日　新年宴會

二月　二月　暦

四日　節分　此の日豆を撒く、福は內鬼は外、藝妓等の假裝、厄拂ひ。

十一日　紀元節　各官衙學校祝賀式

梅の花見、雪見の宴。

舊正月

舊正月　暦

三月

元日　早朝に氏神及寺院墓參り。
若水を汲み、今日より三日間屠蘇雜煮を祝す、酒媒には數の子、田作、黑煮豆、昆布卷を用ふ、歌がるた雙六、追羽子、紙鳶、手鞠。
萬歲　猿曳　豐川參り　汐干狩。
正月元日二日三日の三日間は百姓一般に業を休み、門には注連縄を張り、家具一切を清めて紅白の餅飾をなし、若水を汲みて神前に供へ、氏神神社に參拜し、又近隣知己を訪れて新年を賀す　此の日他家に嫁したるは里に歸り、外に在るも亦家に歸り、數の子、田作、黑煮豆等の酒媒にて屠蘇雜煮を笑味の內に祝ふ。一年中最初の遊日にして最も樂しき日となす。正月三日間の遊日は勿論春夏秋冬時季其々の遊日にも總て是れを正月と稱するを見るも、此の正月三日間年始の遊日が如何に樂しきものとして一般に迎へらるゝかを推して知るを得べきなり。其の外初觀音、初弘法、初天神と稱して人出極めて多く重原弘法の如き最も好く賑ふ。

三月　曆

十日　陸軍記念日　奉天戰捷記念。
二十一日　春季皇靈祭。

舊二月

下旬　彼岸の中日、御彼岸參り、名古屋別院賑ふ。
二十三日頃各學校卒業及修業證書授與式。
桃の花見、大府の桃山。

舊二月曆

初午　稻荷祭よく賑ふ、豐川參り多し。
舊藩の時に於ては、此の日を以て子弟を手習師匠の門に入れき。
十五日　涅槃會　釋迦の花屑。
二十二日　水口祭　農家の行事。

四月

四月　曆

一日　各小學校入學式及始業式。
三日　神武天皇祭　知立神社祭禮。
縣社知立神社例祭。
各町山車を曳き廻し、又古は知立附近十數ヶ村は其の氏子として祭日には必ず餘興を獻ずるの例なりき、今も其の面影を存す
十八日　鄕社明治川神社例祭。

舊三月

下旬　櫻の花見、明治用水水源の櫻。

舊三月曆

三　日　雛節句　雛人形を飾り菱餅蓬餅たにし等を供ふ、時桃の花によし俗に桃の節句と云ふ。

二十一日　弘法參り　重原一里山、一ッ木の三弘法に於ては三日間開帳あり一年中最もよく賑ふ。

二十五日　汐干狩の好期とす。

蓮如忌　西端の應仁寺、善男善女群集す、時恰も西端東端等桃果園の花見に好し。

櫻の花見　明治用水水源の櫻最もよし、若芽萠へ出づる雜木の丘陵の間に在りて漸くぬるむ流水に三輪二輪また一輪散る景最もよし。

五月

五月暦

一　日　刈谷町　鄕社市原稻荷神社例祭。

各町山車を曳き廻はし、殊に大名行列を以て名あり。

二十七日　海軍記念日　日本海々戰大捷記念。

舊四月

八　日　灌佛會　甘茶　花の塔　甘茶うまし。

下　旬　此の頃より五月節句の幟を立て始む。

六月

六月暦

舊五月

五　日　端午の節句　菖蒲刀、冑人形を飾り、外には幟を立て、柏餅、菖蒲酒、菖蒲湯にて祝ふ。

二十六日　廿六夜待　今宵月の出づるを待つ。

二十八日　中將虎御前の涙の雨。

里門々田の稻に夕の納涼よし。

七月

七月暦

土用入　丑の日饅を食ふ、土用餅。

中　旬　此の頃より新川海水浴場賑ふ、三河鐵道の便あり。

三十日　明治天皇祭

舊六月

舊六月暦

十六日　祇園祭　津島祭。

蟲祭。

農休み　慍鈍　土用干。

晦　日　名越の大祓。

八月

八月暦

入つ橋知立の燕花子見物。

諸學校の暑中休暇。

舊七月暦

七　日　七夕祭　今夜各家供物を列ねて二星を祭る、小兒は笹竹に短冊をつるし、夜は提灯を點じて走り廻る。

十三日　盂蘭盆會　此の三ヶ日は祖先を祭るの日にして、正月三日の遊日と共に大正月たり、外に在るも他家に嫁したるも、皆郷里に歸りて、中元の禮をなし、墓參をなし、故人を訪れて相樂しむ、小兒は夜間提灯を點じて走り廻る喜ぶこと限りなし。

十五日　送火　諸寺施餓鬼をなし夜は送火を點ず。

二十四日　地藏緣日　大施餓鬼。

九月暦

二百十日

二百二十日

二十日　此頃彼岸の入

二十一日　棚尾村郷社八柱神社例祭

二十三日　此頃彼岸中日　秋季皇靈祭

舊八月暦

朔日　八朔。

十五日　月見　團子　八幡祭。

此の頃より氏神神社の祭禮。

十月暦

二日　矢作　郷社矢作神社例祭。

三日　坂戸　郷社酒人神社例祭。

五日　長瀬　郷社長瀬八幡宮。

七日　渡刈　郷社糟目春日神社例祭。

七日　大濱　郷社大濱熊野神社例祭。

九日　大濱　郷社熊野神社例祭。

八日　堤　郷社神明宮例祭。

十日　小川　郷社神明社小川天神社例祭。

十二日　西本郷　郷社和志取神社例祭。

十三日　各學校戊申詔書奉讀式。

十五日　宮地　郷社糟目犬頭社例祭。

十五日　野田　郷社野田八幡宮例祭。

十六日　櫻井　鄉社櫻井神社例祭。
十九日　大岡　鄉社白山神社例祭。
三十日　各學校敎育勅語奉讀式。
三十一日　天長節　各學校祝賀式。
　此の月各氏神の祭禮、菊見。

舊九月　　舊九月曆

九　日　重陽　おかづら節句、菊の花見酒を飲む
十三日　後の月見　俗に豆名月と稱し、豆栗などを供す。
　此の頃氏神神社の祭禮至る所に行はる。
　氏神々社の祭日は盆正月と並べて年中大行事たり、時は恰も中秋月は實る天氣はよし、壽司を漬け赤飯をたき、親戚故舊を招きて饗應す。ビユードン〳〵太皷の響笛の音和して愈々豐なり。

十一月　　十一月曆

十五日　七五三の祝儀　七才の女子の帶解、五歳男子の袴着、三歳の兒の宮參り髮置。
二十五日　此の頃より滿期兵の除隊。

舊十月　　舊十月曆

朔　日　爐開き。
六　日　十夜開白　淨土宗寺院に於て今日より十五日まで十日間法會執行。
二十日　蛭子講　蜜柑、ぼた餅、商家に於ては壇を造り赤飯神酒を供し、膳を設けて來客を饗す。
　高濱、新川、大濱等の沼海釣魚によし。
　近山に紅葉狩によし。

十二月　　十二月曆

一　日　新兵の入營。
二十一日　此の頃冬至南瓜を食ふ。
三十一日　忘年會　夜明し　各社の年越祓。

舊十一月　　舊霜月曆

二十二日　此の日より淨土眞宗の報恩講。
二十三日　報恩講　淨土眞宗の年中大行事とす

舊十二月　　舊師走曆

下　旬　煤拂
　節分　豆撒き福は內鬼は外。

三十一日　忘年會　夜明し　豐川本宮山夜ごもり。
大神樂　大祓。

第十二編　人物傳

第一章　武人

水野忠政

水野忠政は幼名を牛息丸と云ひ、後右衞門大夫忠政と稱す。知多郡緒川城にありて刈谷城を併せ、是れに徙る。其の祖先を尋ぬるに鎭守府將軍多田滿政の裔浦野重房知多郡緒川に住し、緒川三郎と稱す、其の裔雅經緒川村の地頭職たり。其の裔藏人貞守の時水野の地に徙る、因て氏を水野と改む、其の孫下野守清忠は卽ち忠政の父なり。忠政一臂を伸べて城を國外に築き、維持其術を得たるは實に智勇の士と云ふべきなり。信元忠重外數子あり、德川家康の母氏は亦實に忠政の女なり。

水野忠政幼ゝ牛息丸

水野信元

水野信元は水野忠政の長子なり。本名は忠次、初め通稱を藤七郎と稱し、後四郎左衞門と改め、又下野守と稱す。父の後を繼ぎ尾州緒川、三州刈谷兩城を兼知し、今川氏に背きて織田信秀に屬す。永祿三年六月織田信長の命を受け兵を出して參州勢と石瀨川に戰ひ、復た刈谷の十八町畷に戰ひ、後屢々交戰す。四年二月

水野信元忠政の子

信元尾參二州の兵を弭めんと欲し、信長に說て曰く、今川義眞昏昧多慾武備亵へ士風廢す、爲すあるに足らざるなり。獨德川家康剛傑果敢材幹ありて且つ春秋に富む、彼今兵寡しと雖も、西は君の武に對し東は今川の勇に抗し、毫も辟易の色あるなし。今彼と相和し。以て東顧の患を省き而して濃江二州を徇へば卽ち創業の功速に成らんと信長之れを善とし、媾和遂に成る。信長諱字を信元に授く信元の信字卽ち是れなり。天正三年十一月織田信忠兵五千に將として秋山晴近善光寺氏定等を濃州岩村城に攻め大に之れを屠る、時に信元佐久間盛政と隙あり、盛政卽ち信長に讒して曰く、信元元來好を武田氏に通す、是れ公の既に知る所なり、然れども未だ叛意あるにあらず、豈圖らんや秋山晴近等の岩村に敗るゝや、信元糧を城中に送りて之れを援け、又其の返禮を受く、今に於て之れが謀をなさざれば後恐くは害を生ぜんと。信長半は之れを疑ひ使を緒川に遣し信元を詰問す。信元大に驚き其の寃を訴へんとし一人の家老をして使者共に岐阜に至らしむ。家老途にして其の使者と酒を飲み遂に亂醉撲鬪に及び共に死す。盛政愈々讒し事遂に解けず。信長甚だ怒り家康に命じて死を信元に賜ふ。家康其の救ふべからざるを知り先づ秘して事に託し久松俊勝をして信元を招かしむ。信元來る家康之れを岡崎松應寺に入らしめ、平岩七之助に命じて之れを殺さしむ。石川日向守先づ行きて信元を斬る。家康卽ち其の首を信長に献ず實に天正三年十二月二十七日なり。

盛政讒す

賜死

水野忠重

忠政の四男

水野忠重

水野忠重は忠政の四男なり。初め通稱を藤十郎と稱し、後總兵衞と改め、和泉守と稱す。兄信元と好からず、避て鷲塚村に居る。永祿六年冬一向專修の徒德川氏に抗するや、忠重馳せて岡崎に抵り德川氏の爲に力戰す。既にして天正三年信元殺さる。八年秋織田信長忠重を刈谷に封ず。信長卒するの年鳥居元忠と共に甲斐の國府に營し、北條氏と戰て之れを破る。其の他小牧の軍、長湫の役、盤江の攻城等皆功有り盤江を攻むるの年十月豐臣秀吉伊勢を攻む。忠重弧軍之を拒ぎ、水を阻てゝ軍す、秀吉其の營の嚴整たるを觀て桑名に入ることを得ず、秀吉關白に任ぜらるゝの後忠重を見て深く其の鋭武を賞すと云ふ。又筑紫小田原の二役に從て戰功あり。惜むべし慶長五年七月石田三成の臣加々井彌八郎秀望の爲め知立に於て刄せらる。時に年六十季子隼人正忠淸後を繼ぐ。寛永九年忠淸參州吉田に轉封さる。其の子孫また長く駿河國沼津に封ぜられ、五萬石を食む。

戰功

刄せらる

水野勝成

忠重の嫡男

水野勝成

水野勝成は忠重の嫡男にして、幼名國松丸通稱を藤十郎と云ふ。後六左衞門或は乘之助と改め、日向守と稱す。性粗豪年十六高天神の役に槍を揮て數人を殪す。戰功算ふるに遑あらず、武功斯の如しと雖も惜むべし罪を父に得て刈谷を去り、西國の諸豪に游事し、無辜を殺すこと數回居り難くして逃れて京に上る時に石田

三成等伏見なる德川家康を攻めんとして近畿騷擾す。勝成馳せて伏見に抵る家康喜ぶ乃ち使者をして百方忠重を和解せしむ。於是勝成復た父に謁す。尋で家康會津を征す。勝成軍に從ふ時に父忠重知立の變に遇ふ。乃ち命を得て刈谷に還る。既にして三成等兵を擧げて東上す。勝成また家康の先鋒に屬し之れに向ひ、先づ大垣城を落し、進で大に關ヶ原に戰ふ。後刈谷を領す。大阪の陣起るに及び男勝俊と俱に軍に從ひ、奮戰斬首頗る多かりき。元和元年大和國郡山城を賜ひ六萬石を食む。五年備後國福山に轉封され、十萬石を領す。寛永十四年肥前國島原の耶教徒蹶起するや、勝成また征討の軍に從ひ軍議に參預して報暦鷄及竹釘軍の事を屬言して滿座の諸將を驚かしぬ。攻城の日男勝俊と俱に兵五千に將として先登し、功最も多かりき。十六年致仕宗休と號す。慶安二年年八十八にして卒す。子の勝俊繼ぐ。其の子孫長く下總國結城一萬八千石を食む。

關ヶ原合戰

水野清久

水野清久は忠重の子にして通稱を太郎作と云ひ左近大夫と稱す。初め父忠重と俱に鷲塚村に住す。永祿六年一向宗門徒の亂起るや、父と俱に岡崎の急に赴く。其の部下に大見藤六と云ふ者あり、勇士なり、七年正月奔て門徒に屬す。三日土呂の宗徒出でゝ額田郡作村附近の民家を火く、家康便ち甲を擐て出づ。小豆坂に於て宗徒に遇ふ。是日藤六矢田作十郎等と俱に門徒に將たり。家康の將士深く之れを惡む。誓て之を約す。既にして戰ふ宗徒敗れて退く清久藤六を追ふ。藤六射に精なり矢を注て埃つ睥睨して曰く近かば殪さんと清久勇敢槍を揮て進む。適々流矢あり藤六の肘に立つ。清久得て竟に之れを殪す。清久時に年二十、藤六の首を家康に示し大に賞を賜ふ。

水野清久忠重の子

夫人水野氏

夫人水野氏諱は大、水野忠政の女なり。性婉順端厚才識あり。天文十年岡崎松平廣忠に嫁す。十一年十二月男竹千代を生む。德川家康是れなり。忠政卒し其の子信元後を嗣ぐや、勇悍果斷駿河今川氏と絕ち、尾張織田氏に屬す。廣忠素より今川氏の眷顧に沐す、卽ち信元と姻戚たるを不可なりとするや、夫人水野氏また憐むべし破鏡の歎に泣く、時に竹千代甫めて二歲水野氏また遂に病む。酒井正親惻隱忍びざるの情あり。是れを廣忠に告げて第中に寓せしめ、醫藥看護懇切にす。九月刈谷に護送する者阿部定次、金田宗祐、淺羽三大夫等三十人許、途、鷲塚を經て刈谷十八町畷に至る。夫人水野氏侍女をして定次等に傳へしめて曰く妾深く思ふ趣旨あり轎を茲に置て咸速く還るべしと、定次等應へて曰く謹で命の辱きを拜す、されど如何で此所にて御別れ申すべき强て城までは御送り奉らんと。水野氏誡めて曰く妾の阿兄信元殿には性急に在す、汝等城に抵りなば必ずや命なかるべし、最と憫にこそ、又願ふに斯くては岡崎殿の御怒愈々著しかるべし、後竹千

夫人水野氏

家康の母

夫人の先見

代に得再會んことも難かるべければと、反覆論說丁寧にして還らしむ。乃農民に昇せで城に抵る、城中より將卒二百人許出で來れり。是れ且は轎を迎へ且つは送者を捕獲せんが爲めの者なりき。後に是れを聞く者夫人の先見慈惠に感ぜざるものなかりしと。夫人後に知多郡阿古居の鄕士久松俊勝に再嫁し、三子を生む、後に至り皆諸侯に封ぜらる。慶長七年八月二十九日卒年七十五、江戸小石川に葬る法諡傳通院詔して從一位を贈らる。

再嫁

松平親氏

松平親氏は右京亮有親の子なり。小字は二郎三郎、元世良田を氏とす。應永年間將軍義敎の足利持氏を追討するや、關東の諸國大に騷亂し、敢て持氏の招きに應ずるものなし。獨り親氏父有親と共に僅に八十騎を率ひ往きて持氏に應ず。持氏喜び乃ち有親を封ず。後軍敗れ持氏自殺するに及び有親父子持氏の子義久を擁して扇谷に軍し、義敎の兵と戰ひて利あらず、且つ夜に入つて路を失し、義久虜にせられ、有親父子辛ふじて難を遁る。義敎猶令を下して殘黨を捕へ之れを戮す。有親親氏逃れて藤澤寺に入り、遊行上人の徒弟となり、有阿彌德阿彌と稱し、俱に諸國を巡歷し、參州矢作に至る。德阿彌病俄に起る。遊行之れを坂井村與左衛門なるものに托して去る。德阿彌與左衛門の家に寓し髮を蓄へて女婿となり、一子廣親を擧げて其の婦歿す。廣親は卽ち酒井氏の祖なり。與左衛門の友に加茂郡

酒井氏の祖

松平郷士太郎左衛門なるものあり亦女ありて嗣なし、親氏の凡人に非さるを知り、乃ち與左衛門に乞ふて其の女を以て之れに妻し、迎へて己が後を繼がしむ。是れを松平氏の祖とす。婦一子を擧ぐ泰親之れなり。親氏資性慈仁且備さに艱難を嘗むるを以て頗る緩急の機を知り、務めて衆望に從ふ。兒暴なるを討ちて其の武威を示す。附近の諸豪風を望みて降る者多く地を領すること漸く廣し。卽ち壘を高くし堀を深くして以て敵に備へ、又六所明神を祀りて鎭守とす。歿するに臨み子孫に謂て曰く、我名門の後に生れ、今少しく其の地を得たりと雖も未だ以て祖先の名を顯はすに至らず、汝等宜しく時に臨み、機に應じ、近傍の地を領し、以て祖先の名を顯すべしと。永享九年四月二十日歿す。今加茂郡松平村高月院に其の墓を存し幷に其の像を有す。

松平氏

松平親忠

松平親忠は泰親の子信光の第三子なり。幼名竹千代丸、後小次郎右京亮、又藏人頭と稱す。資性叡智にして勇武あり。安祥に居り、櫻井福釜等の城を改めて之れを陷る、青野藤井等の諸城亦風を望みて來り降る。時に叔父松平彈正左衛門尉岡崎にあり病て歿す。嗣子猶幼なり、乃ち親忠をして其の後を治せしむ。親忠子長親を安祥に留め往て岡崎に入る明應二年十月伊保の城主三宅加賀守、擧母の城主中條出羽守、八草の城主那須惣左衛門、上野城主阿部孫二郎等相謀り、兵四千

松平親忠信光の三子

を將ひ岡崎を攻めんとす。既に矢作川の上流を渡り井田の上野に到る。親忠之れを聞き自ら兵一千を卒ひて岡崎を出で、伊賀川を越へ、敵の中軍を衝く。岩津の援兵も亦來りて其の背を討つ。敵狼狽敗北す。是に於て威名益々震ひ西三の諸城主皆來り欵を送る。六年七月髮を削り西忠と號す。大樹寺を建立す。九年八月十日卒す。時に年六十三。法名は大胤西忠松安院と號す。男子九人あり。曰く親長、乘元、長親、親房、超譽、親光、長家、長忠、乘清と、親忠人となり愼沈にして其の臨みて治をなすや、賦歛を省き、孤寡を撫み、賞罰を明にし、法制を修む、是を以て國人皆爭て用をなすを樂むと云ふ。

西忠と稱す

松平長親

松平長親

松平長親は親忠の第三子なり。嗣となりて安祥に居り、藏人と稱す、出雲守に陞せらる。西三河を定む。而して東三河は猶今川氏親に屬す。氏親は駿河の守護なり。永正三年氏親其の將北條長氏を將として、大兵を率ひ來り八月岩津を攻む。長親五百騎に將として赴き救ふ。其の騎に謂て曰く汝等世々忠を我家に盡す、而して我未だ厚く報ゆるを得ず。今亦我が爲めに死を決す、我の深く愧づる所なりと。因て大桶を以て酒を貯へ、杯數十を泛べ、自ら一杯を飲み、餘瀝を桶中に瀉きて曰く、事急なり、各人に觴するに暇あらず、交々就て之れを飲めと、衆感奮夜矢矧川を渡り、駿河の軍を襲ふ。宇都忠茂曰く我れ必ず捷たんと果して之れに捷ち軍を西岸に收む、氏親長氏遁れ走り戸田憲光田原を以て降る。長親忠茂に問ひて曰く何を以て捷を知る曰く長氏寵を負ひて士を侮る、士に鬪志なし是れを以て之を知ると、長親五男を生む、曰く信忠、親盛、信定、利長、義春、長親老ゆ信忠嗣ぐ。

松平信忠

長親の長子

松平信忠

松平信忠は長親の長子なり。小字を竹千代と云ふ。二郎三郎又藏人と稱す。左京亮に任ぜられ家を繼で安祥にあり。常に郡小を寵任し荒酒汰侈賦歛度なし。屬邑稍々畔き安祥殆んど孤立となる。郡臣屢々諫むれども聽かず、既にして信忠大に悔悟し、郡臣を召し之れに其の子清康を托して曰く、我れ不德にして親に離れ衆に背き今や已に臍を噬むとも及ばず、獨り清康は幼と雖も頗る奇資あり、汝等善く之れを補佐せよと。大永二年大濱に退きて老し、髮を削りて祐泉と號す。後泰雲と改む。享祿四年七月二十七日卒す、時に年四十三法名を泰孝遺忠と云ひ、安栖院と號す。三子あり清康、信孝、康孝と云ふ。信孝合歡木の城を治し、康孝三ッ木の城を治す。

祐泉と號す

松平清康

松平清康

松平清康は信忠の長子にして初め清孝と名く。小字は竹千代二郎と稱す。永正八年九月を以て安祥城に生る。體幹短小と雖も資性隸悟眼光人を射る。幼より故老に對する毎に或は古今の治亂を諮詢し、或は士衆を召して其の戰擊の功を叙せ

しめ、膝に憑り聳聽して倦まず、其の他病を問ひ死を弔ふ等皆成人の如しと云ふ。大永三年甫めて十三にして家を繼ぎ、益々臣庶を撫循し恩惠備さに至る。故を以て衆皆感戴し、叛を伐ち威名大に張る。松平昌安岡崎城に據り又山中に城きて叛す。宇都忠茂昌安を伐つの策を立つ。清康其說を佳とし風雨に愛じて山中を襲ふ。昌安狼狽出でゝ降る。享祿二年吉田城の牧傳藏を伐つ。傳藏吉田川を渡り決戰す。兵及頗る銳し。清康勇斷指揮其の當を得竟に大に勝ち傳藏を捕獲す。吉田城を收め、更に進みて田原城を攻む。城主戸田憲出でゝ降る。茲に東參悉く平ぎ清康の威三河全國に普く尾濃の士また來りて欵を通ずるもの漸く衆し。甲斐の武田信虎また人をして來り好を通ぜしむ。清康素より西上の志あり。天文四年愛知郡森山の城主織田氏に叛きて來り降る。清康衆に謂て曰く、我先づ尾を擊ちて織田氏を夷滅し、濃江を席卷して西上し、兵を京畿に觀めさんとすと。十月清康親ら精騎一萬を將ひて森山に次す。時に松平信定上野城にありて病に托し軍に從はず、衆心疑懼す、訛言流出國事を秉れる阿部定吉將に信定に從ひ亂を作さんとすと。定吉の子正豐是を聞きて大に憂ふ。十二月昧爽營中馬逸し士卒爲めに騷擾す。清康起て之れを視る。時正豐刀を奉じて從ふ。誤て其の父定吉殺さると聞き、突然清康を殺す。清康時に年三十五岡崎隨念寺に葬る。後又改めて大樹寺に葬る。今隨念寺に其の影を存す。三男一女あり。男を廣忠、成譽、信康と曰ひ女は酒井忠次

殺さる

に嫁す。清康曾て掌中是字を握るを夢む。醒めて之れが吉凶を浮屠氏横外和尙に問ふ和尙斷じて曰く、是の字を析ては日下人なり、君が家他日必ず日下の人となり國權を掌握することあらん。然れども握りて未だ開かざるは其は君にあらずして君の子孫にあらんと。清康之れを喜び横外和尙の爲めに龍海院を立つ、一に之れを是字寺と云ふ。清康また文事に通ず。餘暇あれば連歌をなす、曾て宗長法師を聘し、桑子明眼寺に至り、百韻連歌を興行し、又能を好み、時に場を設け、士卒をして齊しく之れを觀望せしめぬ。

松平廣忠

家康の父

松平廣忠

松平廣忠は清康の嫡子にして大永四年四月を以て岡崎城に生る。小字を千松丸或は仙千代又竹千代と稱す。天文四年十二月父清康の森山の營に於て弑せらるゝや立ちて後嗣となる。年甫めて十三、安部定吉之れを補佐す。五年正月元服して二郎三郎と稱し、族を德川と稱し、廣忠と名づく。十年刈谷城主水野忠政の女を娶り、一子を生む、家康之れなり。十二年七月水野信元今川氏と絕ち、織田氏に附く、廣忠之れを聞くや駿の惠たるや厚し私すべからずとなし、乃ち信元と婚を絕ち夫人水野氏を刈谷に歸す。時に松平氏內訌交々起り威振はず、加ふるに織田氏の來りて岡崎を侵すこと極めて急なり。十六年十二月駿人來り援けんとして任子を求む、廣忠乃ち子家康をして駿河に質たらしむ。十七年三月織田信秀兵を遣

し來り侵さしむ。廣忠之れを鵜原に捍ぐ。尾兵敗走す。十八年二月廣忠の師駿將僧雪齊等の兵と與に安祥を攻め、風雨に乘じて急に之れを襲ふ。駿師進んで牙城に逼り、遂に守將織田信廣を捕へ、大久保忠俊をして之れを護らしむ。是れより先き任子家康の駿河に赴く途上戸田憲光竊に尾に卽き伴りて家康を熱田に送り織田氏に致す。茲に雪齊使を尾州に遣し、任子を代へんことを請ふ、信長之れを許す、因りて家康尾州より歸り今川氏に至る上下爲めに欣々然として安祥の圍を解き、信廣を尾州に送り、乃ち軍を撤す。三月六日廣忠岡崎城に於て死す。時に年三十四なり。廣忠壯武、餘りありと雖も、性猜忌深く臣民服せず、部下畔くもの多し、其の卒するや國に主なく、松平氏の勢愈々衰ふ。後家康志を得るに及び詔して從一位權大納言を贈らる。大樹寺に葬る一男三女を殘す。男は卽ち家康なり。

松平信定

松平信定は長親の子なり、幼名を與一郎と云ふ。伯父玄蕃頭親房櫻井城にあり役に戰功あり、是歲清康尾張の品野城を攻め取り之れを信定に賜ふ、三年清康宇理城を攻む、信定の從子親次軍に先鋒たり戰歿す。信定見て之れを救はず、清康誚責す、天文四年清康朝覲を志して西伐す。信定軍に從はず、上野城に居て兵を集む。清康西伐の途に卒して後信定遂に織田氏に結び大に松平廣忠の患を作す。

自刄す

天文七年信定卒して岡崎の君臣始めて寢食を安んず。其の子清定孫の家次、皆德川氏に叛て常に患をなす。家次の子忠正及忠吉共に德川氏に忠勤を盡し、忠正の子家廣に至りて慶長六年二月濱松城を賜ふ。此の年家廣家康の怒りに觸れて自刄す。繼嗣なく、櫻井松平の家茲に絕す。

松平信一

松平信一は長親の子勘解由左衞門利長の子なり。幼名を勘四郎と云ふ。父の利長藤井城にあり。天文九年六月織田信秀兵を遣して安城城の松平長家を攻めしむ。利長安祥を援け、織田氏の兵と戰て歿す。信一後を繼ぐ。軀幹短小と雖も英武絕倫にして一生德川氏の爲めに盡し、其の戰功枚擧し難し。長澤の役に從ひ、また永祿六年には藤井城に據て一向宗門の黨徒を拒ぐ。十年將軍義昭三好義繼等を討たんとして援兵を織田氏に請ふ。織田氏また援を德川氏に請ふ。家康特に將器を撰び、信一を以て其の任に充つ。信一信長の營に到る。近江箕作城を攻めて須臾にして城を破る。信長深く其の武勇を賞し韋製胴服を脫で賜ふ。元龜元年十一月再び織田氏の援として、淺井淺倉二氏の兵と近江堅田に戰て之れを破る。信一後に櫻井城松平信吉の後嗣となる。慶長六年伊豆守に任じ、常陸國土浦城に居り終に卒す。

松平清定

松平清定は櫻井の城主信定の「男」にして「後に名を」家重と更む。天文十四年上野城に據て主家に叛く。十五年松平廣忠是れを征め、清定降る。乃ち是れを櫻井城に置く内膳正たり。

松平家次

松平家次は清定の男なり。永祿元年德川元康家次を尾張の品野に置き城を守らしむ。三月尾張の兵來り攻む。家次夜に乘じて之れを退く。永祿六年一向一揆の起るや、家次是れに應じて櫻井城に據る。七年二月酒井正親是れを攻めて家次を降す。元康其の父祖三世叛するの故を以て是れを刑せんとす。大久保常源泣諫する所ありて乃ち赦さる。

松平忠正

松平忠正は家次の男なり。本州野田長篠の役、及遠江掛川、近江姉川の戰に從ひ毎に功あり天正五年七月三十四歳にして歿す、此の人武勳を建つ櫻井松平家父祖三世の醜惡を雪ぎたりと云ふべきなり。

松平忠吉

松平忠吉は家次の次男なり。武鑑によれば兄忠正の後を嗣ぎ、櫻井城主たりしと云ふ。藩翰譜には此の事なし、忠正卒する年其の子廣家生る。故に忠吉姑く兄忠正の家を繼ぎしものなるべきか。

松平家廣

松平忠正の嫡男なり。德川氏關東に封ぜらるゝに及び、上野國松山の城を賜ひ慶長六年二月濱松城を賜ふ。此年家老堀勘兵衛を誅せるが爲め譴を被り、六月十四日自刃す。年二十五、武鑑には忠吉の二男忠頼家廣の後を承りとし藩翰譜には世嗣なきを以て家絶ゆとあり。

松平信吉

松平信吉は忠吉の嫡男にして勘四郎と云ひ。藤井の城にありき、後松平信一の嗣となり安房守と稱せり。

松平康親

松平康親は上青野村の人なり。幼名を忠次と云ふ。原姓は松井氏にして左近と稱す。其の先は判官源の爲義の十三男、松井冠者維義にして備中國松井の莊に住せり。其の十世保仲、永享十一年、幡豆郡吉良に徙る。保仲より六世忠直の男は卽ち此の忠次なり。初め東條の城主松平右京亮義春に仕ふ。義春日近城の役に戰死せし後其遺腹の子龜千代生る。龜千代の母は乃ち康親の妹なり。永祿四年石瀬の役に出陣し次で津の平を守り、東條の城を攻む。吉良義照降る家康津の平を賜ふ。五年康親西郡城を攻む。駿河の豪將鵜殿長照之れを守る。康親實策を盡して攻む。長照城を致して去らんことを乞ふ。家康之れを許さしむ。康親兵を伏せ長

照の二子三郎四郎藤三郎を擒にす、此時家康の世子信康駿河にあり。且つ今川氏眞甚だ鵜殿の二子を惜む。乃ち談成りて質子を易へ、信康岡崎に歸ることを得たり。十二年正月掛川の役に、元龜元年六月姉川の役に出陣し、九月また織田氏の援兵として近江に佐々木氏の兵と戰ふ。三年味方の原の役に東條の兵を率ひて戰ひ、天正三年五月長篠の役に鳶巣城を陷る。八月遠江國諏訪の原城を固守す。其の他一生の忠戰勇略數ふるに遑あらず。忠次初め家康の偏諱を賜ひて康親と更め、後また松平の姓を賜ひて周防守と稱したり。天正十二年享年六十三にして卒す。吉良莊法應寺に葬る。男康重家を嗣ぐ。

松平の姓を賜ふ

松平康時

松平康時

松平康時は鴛鴨村の人にして和泉守信光の十一男なり。大永七年清康八名郡宇理城を攻る時從軍す。享祿二年清康寶飯郡牛窪城を攻る時、先鋒として戰ふ。今橋の城陷るの後、鈴木重政酒井忠恒と共に之れを守る。天文五年卒す。隣松寺記には康時を親光に作る。宮内小輔と稱せり。其の子親康一向一揆の亂に際して鴛鴨の城を固守して岡崎を捍衛せり。

松平親盛

松平親盛

松平親盛は長親の二男なり。初め三郎二郎と稱す。驍勇善く戰ふ。長親之れを福釜の城に置く。清康の世に至り每戰先鋒たり。享祿三年八月清康宇理城を攻むるや、親盛大手の攻將たり。軍利あらず。苦戰之れに死す。弟信定また之れにあり。親盛の急を救はざりしを清康大に之れを誚責す。親盛の子親次、孫の親俊、共に驍勇を以て名あり。親俊の子康親、家康の信任厚く、大番頭を務む。親盛より八世を經元祿十二年松平淺二郎の時に至りて家絕ゆ。

宇都忠茂

宇都忠茂

宇都忠茂は左衛門五郎と稱す。宇都宮氏の支流にして上和田村に住す。其の先泰藤と云ふ者、新田義貞に越前に從ひ、義貞の歿するや、三州上和田村に匿る。入道して蓮常と稱す。其の孫泰道宮の字を省きて單に宇都と稱す。泰道泰昌を生み、泰昌昌忠を生み、昌忠忠興を生む。忠興は卽ち忠茂の父なり。忠茂松平長親に仕ふ。永正三年八月、今川氏親、松平氏の深く基業を樹つるを忌み、自ら師を率ひて岩津を圍む。忠茂松平長親に從て岩津の急を救ふ。駿師敗績す。後松平昌安山中に據りて東參を侵略するに當り、松平清康之れを伐んと欲す。忠茂之れを諫止す。而して大永六年四月忠茂清康に勸めて風雨に乘じ、山中寨を攻めしめ、之れを陷る。時に松平親貞岡崎にあり、孤守すること能はず、懼れて降る。是に於て東參西參の諸豪傑相踵して歸降し、松平氏の家勢大に振ふ。清康乃ち忠茂の功を賞せんと欲し、召して其の欲する所を問ふ。忠茂辭して曰く臣の四子叨りに秩祿を辱ふす、復他に須むる所なし、然れども願くは統下の市征を賜りて以て老

を養はんと。清康笑て之れを許す。忠茂後悉く市征を蠲きて復徵集せず。是に於て市人大に悅び商旅爭ひて集り、岡崎の殷富全く此に搬ると云ふ。忠茂四男子あり忠俊、忠次、忠員、忠久と曰ふ。

大久保忠俊

大久保忠俊

大久保忠俊は宇都忠茂の第一子なり。上和田村に生る。幼名を新八郎と稱し、後五郎右衛門と改め、故ありて氏を大久保と改む。亨祿二年松平清康牧野成命と御油畷に戰ふや、忠俊從ひて功あり。天文四年松平廣忠伊勢に潛居し、松平信定岡崎を奪ふ。忠俊兄弟日夜心を盡して酒井石川等の諸氏と竊に畫策を通じ、廣忠を迎へて縣塚に次す。五年九月廣忠牟呂に入り、國人多く來歸す。六年春信定忿り兵を發し來り圍む。忠俊書を矢に約して城上に射、四月を以て廣忠を迎ふるを約す。信定終に勝つべからざるを知り、兵を收めて上野に還る。忠俊等密議益々熟し、遂に岡崎の留守松平信孝に之れを告ぐ。信孝之れを諾し、疾と稱して有馬溫泉に浴し、次で京師に往きて報を待つ。是に於て忠俊等潛かに廣忠を迎へて岡崎に入る。五月朔廣忠諸將士の功を賞し、一百貫の地を忠俊に賜ふ。九年忠俊渡理の戰に從ひて植村榮安と共に敵兵を拒ぎ、十四年春廣忠に清田畷の戰に從ひて尾人と力戰す。後十八年十一月駿將雪齊等と安祥を圍み、其の將織田信廣を虜にするや、忠俊忠勝忠世等と信廣を携へて西野に抵り、任子德川家康と易へて還る。

常源と號す

大久保忠勝

弘治元年八月蟹江城を攻むるや、忠俊、忠員、忠世、忠佐、阿部忠政、杉浦鎭貞及び鎭榮の七人と槍を執りて血戰奮擊し、遂に其の城を拔く。世に之れを稱して蟹江の七本槍と云ふ。永祿六年十一月一向宗徒の亂に忠俊一族を和田に會して岡崎の聲援をなす。七年正月宗徒兵を土呂、針崎、野寺に分ちて和田を圍む。忠俊族を率ひて郭外に接戰す。是れより先き忠俊髮を削りて常源と號す。後天正九年九月を以て死す。時に年八十三。一男子あり忠勝と云ふ。

大久保忠員

大久保忠勝

大久保忠勝は忠俊の子なり。上和田村に至る。幼名を新八郎と稱し、後五郎右衛門と改む。天文十一年駿河の將僧雪齊の尾人と清田畷に戰ふや、忠勝軍に從て功あり。十七年十一月酒井正親石川清兼等と共に松平重弘等を山中城を攻め、終に之れに克つ、弘治二年冬忠勝、忠佐及酒井忠次等と共に福釜城を守るや。柴田勝家荒川賴季等兵二千を率ゐて來り攻め、接戰して忠勝を傷く。然れども勝家等の軍終に敗れて退く。永祿三年忠勝家康に大高に從ひ、殿戰す。是の夏忠勝等刈谷の兵と十八町畷に戰ふ。而して時方に酷暑に際し炎熱に堪へずして互に兵を收む。一向の亂に忠勝の一族大に功を立つ。慶長六年死す。時に年七十二。忠勝數子あり。長子家忠嗣ぐ。

大久保忠員は忠茂の第三子なり。上和田村に生る。初名を甚五郎と稱し後平右衛門と改む。初め松平信定岡崎城主德川廣忠の幼弱に乘じ、之れを除きて自立せんと欲す。天文四年廣忠奔りて伊勢に往く。信定遂に岡崎を奪ふ是に於て忠員兄忠俊と日夜心を盡し、遂に廣忠を迎へて岡崎に入る、弘治元年蟹江城を攻むるや忠員また蟹江七本槍の一人たりき。後天正十年十二月を以て歿す。時に年七十三。八男あり。忠世、忠佐、忠包、忠寄、忠核、忠爲、忠長、忠孝と曰ふ。

蟹江七本槍の一人

大久保忠世

大久保忠世は忠員の長子にして、上和田村に生る。初名は新十郎後七郎右衛門と更む。天文十五年秋德川廣忠の上野城を攻むるや、忠世年甫て十五。軍に從て功あり。十七年山中城を攻め、十八年安祥を圍み。弘治元年蟹江城を攻めて七本槍の一人たり。永祿元年廣瀨城を攻め、三年六月石瀨に力戰し、十八町畷の役に從ふ一向宗の亂起るや一族を擧げて之れに當る。元龜三年冬味方原の役に從ひ軍敗れて濱松に入る。天正三年長篠の役に從ひ、銃手を率ひて大功を立つ。四年家康に從て乾城を攻め、十年甲信二州を討ちて郡里を徇定し、十三年また信州に入り上田城を攻む。十八年七月小田原の軍に從ふ。城陷るや豐臣秀吉忠世を召して曰く子の陣營を布く實に天下無雙なり。因りて小田原の守衛と爲すと。忠世命を受けて城を守る。時に頻年兵革の弊を受けて士民窮乏し食を失ふもの多し。忠世

大久保忠佐

之れを憐み長部屋を造り、飯を炊き、以て飢餓を救ふと云ふ。八月忠世小田原に封ぜられ、邑四萬石を食み、後五千石を加賜せらる。文祿二年九月忠世疾あり、其の危篤に及び家康が賜ふ所の一向亂感章を取りて曰く。後來に傳ふべきものにあらず我れ取りて黃泉冥路の手券と爲さんと乃ち之れを毀裂し、命じて柩に收めしむと云ふ。尋で卒す。時に年六十三。忠世四男あり。忠鄰。忠基、忠成、忠永。と云ふ。

大久保忠佐

大久保忠佐は忠員の第二子なり。上和田村に生る。通稱治右衛門。弘治元年甫めて十九蟹江の戰に從ひ七本槍の一を以て稱せらる。後柴田勝家の來りて福釜城を攻むるや、忠佐進みて勝家を傷く。後刈谷、石瀨、一向の亂、皆軍に從ひて功あり。永祿十一年掛川の戰に先登して近松丹羽の首を獲る。姉川の戰には命を受けて部隊を指揮し、敵を擊ちて之れを郤く、味方原の戰又從ひて功あり。長篠の役には忠佐忠世と共に銃隊三百を率ひて先鋒す。偉功を立つ。後忠佐家康に陪して安土に往くや。信長召見して曰く長篠の力戰孤猶忘れずと。乃ち左右を顧みて曰く。所謂長篠の鬚男とは卽ち是れなりと。是の年諏訪の戰忠佐敵を斬る、長湫の役軍使となりて奮戰し。殊功あり。天正十八年上總茂原の田五千石を賜はる。慶長庚子の秋德川秀忠に東山道に從ふ。明年駿河の沼津二萬石を賜はる。髮を削

道善と號す

りて道善と號す。慶長十八年九月卒す。時に年七十七。忠佐幼弱より戰爭毎に銃刄の中に接すと雖も一つも身に傷を負はざりしと。一子あり忠兼と云ふ。

大久保忠教

大久保忠教

大久保忠教は通稱彦左衞門、忠員の第八子にして上和田村に生る、初の名は忠雄小字は平助忠員の長子先づ歿し、次子忠世嗣ぐ忠教年十七、兄忠世に從て遠州乾城の戰に首級を獲高天神の役に城將岡部長教を殺し、忠世の臣本多主水をして其の首を擧げしめ、猶進んで首級若干を得たり。上田の戰我軍利あらずして走る。敵の追ふこと急なり、忠世忠教共に返戰して辛ふじて之れを支ふるを得たり。其の他戰功擧げて數ふべからず。忠世の子忠鄰德川氏の關東に入るに及びて小田原城主となり、忠教また二萬三千石に封ぜらる。忠鄰本多正信と隙あるに及び罪を得て彦根に幽せらる。忠教また坐して封を失ひ。後三千石を賜ひて麾下隊と爲る。大阪の役に忠教奮鬪して大に功あり、忠教家康の出戰毎に必ず之れに從ふ。又必ず功あり。家康封土を與へんと欲す。忠教固辭す。然れども大議ある毎に必ず參與す。家康遺命して曰く大議は必ず彦左衞門を以て決を取れと。是を以て秀忠の時威望甚だ隆し。諸侯敬服せざるなし。家光の時、年老を以て優禮先代に踰ゆ。亦屢々封土の命あり、更に受けず。忠教死に瀕するや其の戰功を思ひ上使を以て五千石を賜ふ。忠教曰く命且夕にあり加增何にかせん、徒に子孫を奢侈に流れしめんのみと、終に請けず。寛永十六年二月晦日卒す。年八十墓は額田郡尾尻村長福寺にあり。忠教人となり磊落奇智頓才に富みしは人の好く知る所なるも、身儉にして他に嗜好なく、綿袍を衣て出勤す、治世にありと雖も猶戰國の人の如かりしと。

大久保忠鄰

大久保忠鄰

大久保忠鄰は忠世の長子にして上和田村に生る。本名は忠泰幼名を千丸と稱し。後新十郎と更む、永祿六年冬德川家忠一向宗門徒の難を避けて和田砦に入るや忠鄰の一族擧げて之れを迎ふ。時に忠鄰歳甫めて十一、家康曰く斯の弧兒を鞠養し以て近侍となさんと、乃ち携へて岡崎に赴く、十一年忠鄰軍に從て掛川を攻む其の後天王山の戰天方の戰姉川の役味方原の戰長湫の役皆軍に從て功あり、天正十四年十二月家康駿府に徙るや忠鄰獨り之れに從ふ。文祿二年秋父歿し小田原城を賜はり采邑七萬石を食む十二月命を受けて家康の子秀忠に仕ふ。關ヶ原の役治まるや其の冬家康忠鄰を召して曰く弧繼嗣を立てんとす。孰れか可ならん、忠鄰應へて曰く黄門公嘗て繼嗣たり臣未だ其の過あるを見ざるなり、家康後に井伊直政、榊原家政、本多忠勝、平岩親吉、本多正信等を召して其の志を問ふ。正信曰く公子秀康武にして勇なり世子たるべし、因りて忠鄰正信二人をして是れを論ぜしむ。正信前議を固執す、忠鄰曰く抑々軍國を攻伐するは武を以て基とすと雖も天下を

流竄ぜらる

創夷するは文武の二道を以て務となす。黄門公智勇兼備れり此の君に非ずは他に世子なし、家康遂に忠鄰を以て是となす、忠鄰人となり純良にして本多正信と共に政務を補佐す、而して忠鄰の威望獨り高かりき、不幸變事に遇ひ罪に斷ぜられ近江に流竄さる人皆忠鄰の罪なきを悼む。然も忠鄰君命の尊きを重んじ敢て訴へず、後に井伊直孝封地に就き忠鄰に謂て曰く蓋ぞ上書して申理せざる余不肖と雖も請ふて辨ぜんと。忠鄰の曰く今に至りて之れを訴へ釋さるゝを得ば朝野必ず先臺君無辜を罰す故に今將軍之れを釋すと云はん是れ先臺君を不明とし不孝の名を負はしむるものなり縱ひ罪を免ぜらるゝも獨り心に愧ぢざらんやと、直孝之れを聞き涙を揮て出づ、元和二年四月忠鄰髮を削りて溪庵道白と號す後秀忠忠鄰を召す終に出でず、寛永五年二月謫所に卒す。時に年七十六。七子あり忠常、忠繼、教隆、幸信、忠尚、忠村、貞義と云ふ。

大久保景實

大久保景實

大久保景實は宮地村の人にして宮内氏なり、初め與八郎と稱し右衞門と稱せり、號を景實後に忠景と改む。景實の父加藤景成は加藤左馬介嘉明の從弟なりと云ふ、大久保忠俊の姉を娶り男景實を生む。景實母氏を冒して大久保と稱す、永祿六年一向宗門徒の亂に大久保氏闔族和田に據て善く一揆を拒ぐ景實も亦戮力して功あり。家康之れを賞して眉尖刀を賜ふ、後大久保氏の守護神たる犬頭社を承けて是れを祭祀す。

加藤嘉明

加藤嘉明

加藤嘉明は小川村岩根の產なり。孫六郎と云ひ又左馬助と稱す其の祖藤原重光始め加藤を氏とす。重光より十五世正成の時弘長年中岩根を領す正成より六世を秀久と云ひ其の弟秀正の嫡男正嘉の二男は卽ち嘉明其の人なり。永祿六年正嘉一向宗門徒に黨して德川氏に抗す、七年國を去て尾張に住す。當時嘉明尙ほ襁褓中の嬰兒なりき。長じて筑前守秀吉に仕ふ賤ヶ岳の戰には七本槍の一を以て謳はる時に年二十一と云ふ。征韓の勳功は是れを諸史に讓て記さず。嘉明武勇の人たりしのみならず。沈重溫厚仁慈の人なりしと云ふ。寛永三年侍從に任じ四年會津の城に封ぜられ、四十萬石を領しき。八年九月十二日六十九にして卒す。後孫永く近江國水口城二萬五千石を食む。

賤ヶ丘七本槍

酒井正親

酒井正親

酒井正親は通稱は與四郎雅樂頭と稱す。德川の支流酒井廣親四世の孫清秀の子なり。德川信忠に仕へ三世に歷仕し、大小の家事悉く其の議に與かる。德川廣忠曾て伊勢にあり、正親諸臣と是れを迎へ刈谷城主水野忠政の女を迎へて婚儀を修す。忠政卒し子の信元天文十二年織田氏に通ず。廣忠乃ち今川氏の前を繕ひ、水野氏と婚を絕ち、夫人を退く。偶々夫人病む。正親熟思するに惻隱の情忍びざる

ものあり。私に夫人を邸に迎へて、其の病を養はしめ、また其の子家康を相見えしめ其の癒ゆるに及びて刈谷に護送せしむ。天文十七年小豆坂の役に織田氏の猛將鳴海大學助を獲尾軍を敗る。其他攻城野戰の功極めて多し、永祿五年西尾城を賜ひて之れに徙る。家康の臣下に城を賜ふは蓋し之れを以て始とす。此の年家康織田信長と和成る。今川氏眞之れを聞き、大に憤り人をして來り責めしむ。正親人を遣り之れを辨ぜしむ。此に於て氏眞の意漸く解く、六年一向一揆の亂に正親西尾城にありて一揆を拒ぎ功あり。天正四年疾に就く家康自ら往きて之れを訪ふ。六月二日卒す。子あり。重忠と云ひ、忠利と云ふ。重忠の孫は寛永の三輔雅樂頭忠世及び下馬將軍忠清を出し、忠利の子忠勝また名臣を以て名顯はる。

高木清秀

高木清秀は高木村の產なり。父は宣光其先は馬左權守源滿仲の裔判官代信光より出づ。清秀幼名を善二郎と稱し、後主水と改む刈谷城主水野信元に仕へ、齡十六にして刈谷の戰に出でゝ功あり。小豆坂の役には今川氏の兵と馬上に組みて其首を獲る、永祿七年家康に見え、家康其の祖先の名田大岡の地にあることを聞き、子孫世襲の印書を賜ふ。姉川の役信元に殊功あり。天正十年甲斐にありて家康に辟され。一千石を給せらる。長湫の役清秀策を家康に陳ぶ。家康是れに從ひ果して敵を麾にす。天正十八年相模國鰭名の地五千石を給せらる。年老ひて致仕し采邑に閑居す。家康出でゝ狩し、路を枉げて其の居を訪ふこと屢々なりき。文祿元年征韓の役起るや二年名古屋の營に至り、家康に謁す。家康喜悅す。慶長庚子の役また從軍せんとす、老を以て聽かれず。十五年七月歿す年七十五。三男あり、光秀一吉正次と云ふ並に戰功あり。正次元和元年河內國丹南郡一萬石に封ぜらる。

土井利勝

土井利勝は其の出身を明にせず。藩翰譜には三說を載す、其の一は家の系圖を引て遠江守土井貞秀の後裔小左衞門利昌の嫡男なりと云ひ、其の二には水野下野守信元の子なりと云ひ、信元自刄の時年甫めて三歲、乳母愛育して後是れを利昌の養子として遣す。其の三には古老の談を擧げて曰く一日侍從家康の來るを迎へ低聲陳言することあり、侍從便ち命じて其の兒を携へ去る。因て當時は人之れか侍從の子なりと云ひき。察するに信元の子なることは是の日につら〳〵聞きしなるべしと云ひ信なるにやと云へり。土井村の說には其の地に早乙女小左衞門利昌と云ふものありて、家康に事へて寵あり、命に因て氏を土井と改む。其の女また家康の近侍たり。元龜元年家康濱松に遷る。利昌父子を召す、既にして女身めるありて天正二年男子を生む。家康是れを信元に委附す。松良甚三郎と稱し、後大炊介と更む。三年信元自刄す。生母の請により是れを利昌に托す。利昌乞ふて義子となす。大炊頭利勝是れにして家康の子たること知るべきなりと。利勝長ず

るに及びて頴悟人に過ぐ。七年德川秀忠の濱松に生るゝや、家康利勝をして秀忠に仕へしめ、改めて甚三郎と稱す。十九年利勝采邑一千石を賜ふ慶長七年下總小見川の田一萬石を領す。十年從五位下に叙せられ、大炊介と稱す。十五年邑一萬石を加賜せらる、佐倉に徙る。十七年食邑を累加し政治を預り聞く、寛永十年封を下總古河城に轉す。舊封を併せ十六萬二千石を領す、十五年六月連署たりしを免じ、大老職に補せらる。正保元年七月病て卒す、時に年七十二。利勝寛仁にして智慮あり。青山忠俊、酒井忠世と並び後世より寛永の三輔と云はる。特に利勝閣老中に獨り傑出せりと云ふ。

利勝五男あり利隆、勝政、利長、利房、利直なり。利長父の封を割きて一萬石を領し、後五位下に叙せられ、兵庫頭と稱す。又利隆の封一萬石を讓り受け後三千石を加へ、西尾城に封ぜらる。相傳へて曾孫利信に至り、同國刈谷城へ移封せらる。子孫相繼で明治に至る。

板倉勝重

板倉勝重は中島村の人なり。其の祖は源義家に出づ。義家十二世の孫義季は南朝の忠臣にして女影原に戰歿す。其の四世の孫滿賴に至り三州八幡に住す。其の子重定中島村の城主松平好景の家人となりてよりは其の子賴重孫の好重皆松平氏に仕へて精忠なり。勝重は卽ち好重の子なり。好重三子あり長は忠重季は定重勝

重は其の仲子なり。勝重幼時故ありて桑門に入り僧玉峰の徒弟となり、香峰宗哲と號し、中島鄕永安寺に居る。旣にして父好重善明堤に戰死し、家兄家弟叉相繼で戰歿す。是に於て家康宗哲を召して其宗を繼がしむ。是れより宗哲諱を勝重通稱を甚平と稱す。後四郎左衞門と改む。勝重賦性謹直にして高度あり書史に通ず。天正十四年九月家康駿府に入り勝重を以て司直奉行となす。勝重命を受くるや固く之れを辭す。許されず勝重乃ち家に歸り妻に胥議し、且つ之に敎へて後心を決し入りて命を拜す。美談として後世に傳へらる。勝重職に就き公平正直法を執ること謹嚴良吏の名嘖々たり。小田原及關東の代官を兼ね、武藏の田一萬石を賜はる。慶長六年五月家康京師に所司代を置く、勝重加藤正次と擇れて之れに任ず。勝重四民の訟を聽き處理秩然裁判流るゝが如し。孚誠爲めに條達し、寛嚴並び行はる上下新政に服す。九月參河の田六千六百石餘を加賜せられ、八年二月從五位下に叙し、伊賀守と稱す。十四年九月山城の田九千八百石餘を加賜せられ、元和五年從四位下に叙し、侍從に任ぜらる、六年職を辭す。子の重宗之に代る。寛永元年十月勝重卒す歲八十。重宗の弟重昌は慶長十年講和使節として大阪城に至り、使命を全ふし亦十四年島原耶敎徒鎭定の總督として彼の地に赴き、翌年正月朔日其地に討死す。其子重矩に至り寛文十二年野州烏山に徙り、孫の重寛の時天和三年五月陸奥福島に封ぜられ、相傳へて十三代勝尙に至り、明治元年重原に轉封さる。

司直奉行となる

本多廣孝

本多廣孝

本多廣孝は名を彦次郎と云ひ、右兵衞佐と稱せり。下和田村の人なり。父を佐野信重と云ひ、清康に仕へて享祿二年御油の役に戰歿す。時に年二十五其の父を與八郎と云ひ、同じき享祿二年吉田の役殊勳を立て主君清康より賞として下和田の地を賜ふ。下和田村に住するの初めなり。彦次郎また松平廣忠に仕へ、偏諱を賜ひて廣孝と云ひ、本多の姓を冒す。和田佐崎大野等の戰毎に先鋒たり。廣忠卒して後天文十八年駿河今川義元の兵安祥を攻むるや廣孝また先登して大功あり。永祿四年德川元康の命を承け、酒井正親と俱に東條城を攻めて、吉良義昭を降し、又義昭の臣富永忠元の首を獲き。六年冬一向宗門徒の亂に義昭また一揆に應じて東條城に據り、廣孝土井城にありて一揆を拒ぐ。惡戰最も苦しむ。七年夏田原城を攻め、元龜元年姉川の役には其の子彦次郎康重と共に先鋒となりて大功あり、三年冬味方の原の戰ひに家康の軍大敗するや廣孝軍に殿して退き、長篠の役には鳶巢の砦を陷れ、武田氏亡びて後は父子大久保忠世と俱に甲斐國を平定す、其の諸所の戰功知略盡し難し、慶長元年年七十にして卒す。

本多正信

本多正信

本多正信は小川村の人なり。其の祖は藤原顯光に出づ。正信曾祖父忠正の時始めて參河に徙り其男正定安城松平廣忠に仕ふ。其の男俊正また廣忠に仕ふ正信は乃ち其の嫡男なり初め彌八郎と稱す。永祿六年一向宗門徒の亂に宗徒に黨し、弟正重と共に上野城酒井忠尙に黨して一揆に應援す。翌年二月一揆鎭りて後正信北國に奔る。天正十年家康特に之れを召す。正信卓犖にして器幹あり、沈毅寡默身を奉ずること薄く、介然深刻動もすれば倨傲人を見るの弊ありしと雖も智謀よく變に處し着意往々意表に出でき。是れを以て家康秀忠に重ぜられ、常に帷幄に侍して軍國の大議に參與せざるはなかりき。德川氏創業元勳の列位に居る從五位下に叙せられ、佐渡守と稱す。邑二萬石を食む。元和二年六月卒す。享年七十九。正信家康を見ること朋友の如く而して秀忠正信を待つ長者の禮を以てせりと。また正信機務に參する毎に言ふ處甚だ多からず。纔に一二言を以て進止を決し而して能く諷諭に長じきと。

本多正重

本多正重

本多正重は正信の弟にして姫小川村に住しき。初め名を三彌と云ひ、後に三彌左衞門と稱せり、永祿六年兄と共に一向宗門徒の一揆に應援し、翌年また家康に仕ふ。十一年三月掛川城の役に先登して首を獲、元龜元年六月姉川の役に亦首を獲、三年十二月三方ヶ原の戰ひに創を被ること四ヶ所、軍敗れて退く。後三河を去て、四方の諸侯に歷仕す。慶長九年再び德川氏に仕ふ。惜むべし其の器兄正信に及ばず。動もすれば粗暴或は人の怒に觸る。元和二年下總國にて所領を加賜せ

られ、其の年年七十三にして卒す。子孫駿河田中城四萬石を食めり。

本多修理

本多修理

本多修理は西端村の人なり。永祿三年五月今川義元の兵敗るゝや、德川元康大高城にありて其の報を聞く。乃ち元康本多忠次の陣代本多修理をして該城に留らしめ己は十九日夜半靜かに兵を班す。後修理また城を避けて二十二日岡崎に至り、元康に謁す。元康是れを賞して刀及び戰袍を賜ふ。後元和二年に至り、忠相西端の地其他九千石を食み、邑治を其の地に置く。其の後孫忠寛の時に及び、元治元年十二月諸侯に班し、美作守と稱す一萬五百石を食めり。

本多宗信

本多宗信

本多宗信は中の鄕村の產にして刑部左衞門と稱し、德川家康に仕ふ。家康嘗て西尾城主牧野新次郎を攻めんとし、之れを酒井雅樂助に命ず。雅樂助齡尙ほ若かりければ特に宗信に命じて是れに輔佐たらしめき。其の材器以て知るべし。後孫酒井家に傳ふ。

安藤家重

安藤家重

安藤家重は鎭守府將軍源頼信の後にして頼信の次男肥後守頼淸七世の孫を業基と云ひ、其九世孫は卽ち安藤家重なり。桑子の城主にして德川廣忠に仕へ、天文九年安祥の役に戰歿す。二子あり長を基能と云ひ、次を家次と云ふ。二子共に家康に仕へ、基能は三方原の戰に家次は大阪の役に何れも戰歿す。基能に二男ありき其の長を直次と云ひ、其の次を重信と云ひき。

安藤直次

安藤直次

安藤直次は基能の長男なり。初め彦四郎或は又兵藏と稱せり。年甫めて十七姉川の役に功あり。其の他戰功多し。慶長十年正月武藤近江等の田二千三十石を賜ふ。大阪の役起るに及び最も先きに馳せて軍に至る。子の重能奮鬪遂に戰死す。直次曰く男兒當に屍を野邊に曝すべしと、軍終りて歎惜悲慟すと云ふ。元和三年掛川城を賜ひ、一萬石を加封せらる。後紀伊頼信に傅として政を與り、五年封を田邊城に轉じ、節邑三萬石を併せ、與かの采邑を附屬して五萬五千石を領す。寛永十二年五月卒す歲七十二。

安藤重信

安藤重信

安藤重信は基能の次男にして直次の弟なり。初め彦十郎後に又左衞門と稱す。兄直次と共に長湫の役に功あり。後中納言秀忠に仕へ對馬守と稱す。元和元年大阪城陷りて後檢使として之れに留ること二旬、百般の事を指揮せり。元和五年上野國高崎城五萬六千石に封ぜられ、七年六月六十五歲にして卒す。子孫岩城國磐城平五萬石を世襲せり。

植村榮安

植村榮安

植村榮安は初字は新六本郷村の人なり。父は氏義土岐氏の後なり。松平清康に仕ふ。天文四年清康尾張森山の營にありて其臣阿部孫七に弑せらるゝや、榮安傍にありて斬て是れを誅す。既にして織田信秀の兵八千來り侵す。十四年三月二十日廣忠の近侍岩松八彌酔後廣忠の寢室に入て是れを傷く、廣忠刀を拔て之れを追ふ、偶々榮安來りて之れと橋上に遇ひ、相搏て乾濠に墮す。松平信孝また來りて八彌を刺す。榮安また是れを斬る榮安後に出羽守と稱す。天文二十一年八月沓掛に戰死す時に年三十二。

植村榮政

植村榮政

植村榮政は榮安の男にして、本郷村に生る。通稱を新六郎と云ひ、後出羽守と稱す。天文十八年廣忠の子竹千代任子として駿河今川氏に赴くや、群兒之れに從ふ。榮政もまた其の一にあり。時に甫めて九歳既にして長じ、戰功多し。偏諱を賜ふて家存と改む。永祿四年家康尾張の信長と連和し、百餘騎を從へて尾張に赴く、信長之れを迎ふ榮政刀を操て從ふ。信長の衞士之れを呵禁す。榮政目を瞋らし大音聲に我は植村新六郎なり。刀を奉じて吾君に從侍す、何すれぞ叱すると。會盟終りて後信長榮政を召し之れを賞して曰く今日の擧動威風凛々樊噲が鴻門に於けるに髣髴たりきと。賞して寶刀を賜ひき。甲斐武田晴信嘗て郡臣と共に僕指して天下武勇の士を評品することあり。此の榮政を以て三河大切の雄なりと稱せりと云ふ。榮政其の後年を明にせず一子あり。家次と云ふ。時に年十八長湫の役に從て功あり。慶長四年年三十三にして上野國舘林城邊大島に終る。男志摩守家政寛永十八年大和國高取城二萬五千石に封ぜられき。

阿部正勝

阿部正勝

阿部正勝は小針の城主阿部四郎五郎忠正の後なるが如し。小針村の產なり。父を正宣と云ひ、童名を善九郎と云へり。天文十六年松平竹千代任子となりて駿河に赴く。正勝甫めて八歳扈從す。途上戸田憲光の奸計の爲め俱に尾張に至る、十八年竹千代また駿河に赴くや、また是れに從ふ。長ずるに及び大小の戰役に功を立てざるなし。天正の晩年伊豆の市原の地を領し慶長五年年六十一にして卒す。

阿部正次

阿部正次

阿部正次は正勝の男なり。永祿十二年小針村に生る。關ヶ原の役に從ひ、また大阪の役に從つて動功あり。元和六年五萬石を賜はり、小田原城に徙る。九年閑老に拜し、寛永三年大阪城代に任ず。正保四年十一月七十九にして卒す

平岩親吉

平岩親吉

平岩親吉は幼名を七之助と云ひ平岩親重の子なり。親重姓は弓削尾張國平岩に住す。依て後平岩を稱す。七之助幼にして母に死に別れ所緣を尋ねて阪戸村に至る。時に額田郡岩津村信光明寺の住僧七之助と微緣あり取りて之れを養ふ。天正